
特務捜査官ゲイル&サム～俺たちは英雄じゃない

五月雨拳人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特務捜査官ゲイル&サム／俺たちは英雄じゃない

【NZコード】

N8222Y

【作者名】

五月雨拳人

【あらすじ】

ゲイルは宇宙連邦治安維持局の特務捜査官である。ピースマイカ

宇宙連邦治安維持局とは、宇宙連邦治安維持法に則り「個人で所有するには強力過ぎる知識、技術、能力またはそれによつて産出された物」を取り締まる機関である。

ゲイルは今日も相棒のサポートメカ、サムとともに宇宙狭しと駆け巡る。

1 (前書き)

SF（少し不思議）という承りだければ幸いです。

鬱蒼とした森の中に、不自然な獸道がある。

踏み折られた草や、へし折られた木々が作る道が延々とまっすぐ伸びている。それはまるで、巨大な何かがただまっすぐ進みたいというだけで、草木の存在などに歯牙にもかけず進んだという感じだった。

大人二人が両手を伸ばしてやつと抱えられほどいの木が、右や左に折られている。さらに太い樹木は、幹が折れる前に根が耐え切れず根元から倒れている。

つまりこの獸道を作った何かは、木々をまるで草をかき分けるような容易さでなぎ払って行つたのだ。

どのようなものが通れば、こんな獸道ができるのだろう。どれだけ巨大で、そして強力なら、こんなにも無造作に森の中に道を作れるのだろう。

地面には、何かとてつもない重量のものを引きずつた跡が続いていた。

めきめきと音を立てて、木が倒れる。

幹に手を添え、軽く横に払うだけで木が倒れる。

ゲイルは、黙々と森林を開拓していく相棒 サムの広い背中をぼんやりと眺めていた。

三メートルの巨体を全身くまなく金属板で包んだサムの、直線的な凹凸のある背中は、ところどころ銀色の塗装が剥がれていた。ゲイルは、次は別の色にサムを塗つてみようかと考えるが他の色を塗つてもしつくりこない気がした。何よりこの無骨で実直な、脳味噌まで金属でできている相棒が、赤や黄色などの派手な色に染まっている姿はとても想像できなかつた。

結局ゲイルはサムのカラー・チェンジを諦め、塗装の剥がれた箇所

を線で繋いで絵を描く作業を脳内で始めた。

この森に入つてから何時間、ゲイルはサムの後ろを歩いているだろつか。サムがせつせと道を作ってくれるおかげで、彼は森を平地のように何の苦労もなく歩くことができる。照りつける陽射しは強いが木陰に入れば涼しいし、森特有の湿度の高さも気にならない。これら宇宙戦闘服の体温調節機能を切つて、電池を節約できる。どう考へてもこの辺に充電ができるような設備はないので、これもありがたいことだ。

だつたら最初から歩きにくい森に入らず街道や平地を歩けばいいのだが、そもそもサムがどうしてこんな無益な森林伐採をしているかというと、ゲイルが原因であった。

「おい見ろよ。森だぜ森、むしろ森林？　あれ？　森と森林ってどっちが強いんだ？　いや、そんな事はどうでもいい。こうなつたらフイトンチッドとマイナスイオンを過剰吸引して、疲れた心と体を強制リフレッシュするしかねえ！」

森を見るや否や、ゲイルは意味不明な事を喚きながら意氣揚々と中に入つていった。だが一時間ほどで「飽きた」だの「疲れた、腹減った」だの言い出して歩くのを放棄したのだ。

サムが来た道を戻るのと提案すると、同じ道を歩くのをゲイルは嫌がつた。

ではこのまま進むしかないと言つと、今度は歩きにくいから嫌だと首を振る。

ならおぶらうかと提案すると、恥ずかしいからやめると拒否する。

地面に座り込み、不貞腐れるゲイル。子供のよつと黙々をこねる相棒に、サムの機械仕掛けの脳にノイズが走る。だがそのノイズはあまりにも日常的な出来事なので、サムにとってはエラーでも何でもない。相棒のわがままに対応するのは、彼にとつてもはやブログラムされたルーチンワークと同じ事になつていた。

子育てに慣れた母親と同じ感覚とでも言つのだろうか。サムはいつものように、ゲイルに問いかける。何が気に入らないのか。どうすればお気に召すのか。

ゲイルはあれこれと不平を並べ立てたが、簡潔にまとめると「木が邪魔で歩きにくい」という傍若無人なものだつた。

サムはゲイルをなだめすかして先を急こうと促すが、彼は頑として動かず、拳句の果てには「道がないなら作ればいいじゃないか」などと、是正ない子供か頭の悪い貴族のような事を言い出した。サムが無益な環境破壊だと諭したが、一向に聞き入れない。一度駄々をこねたらテコでも動かないだろう。

そしてサムはこのままでは任務に支障が出ると判断し、わがままな相棒のために仕方なく実行に移した。手で草木を払い、足で土を平らに踏み固める。一トンもの体重で踏み固めた地面は、舗装されたように歩きやすく、どんどん視界が開けていく森の姿に、ゲイルの機嫌はようやく直つたかに見えた。

だがそれも長く続かず、今ゲイルの興味はサムの背中の塗装が剥げた部分に注がれているのであつた。

振り返る事も手を休める事もなく、サムがゲイルに問いかける。

「ゲイル、気がついていますか？」

「はあ？」

いきなり声をかけられたので、ゲイルは意味が解からず素つ頓狂な声を上げた。

「気づいたかつて、何にだよ？」

「我々がこの森に入つてから、まだ一匹も生物を目撃していません

ん

「お前がバキバキ木をへし折つてるから、ビビッて隠れているだけじゃねーのか？」

「確かにその可能性はあります。けれどこれだけ木を倒して、鳥の一羽も羽ばたかないのはいささか不自然ではないでしょうか？」

言われてみれば確かにそうだ。普通森の中でこれだけ木を倒せば、鳥たちが喚きながら飛び立つて逃げるだろう。小動物が怯えて隠れているのは当然だとしても、大型の獣がこの広大な森で一匹も発見できないのは明らかに不自然だ。

それにサムは、闇雲に木を倒していたわけではない。進行方向に複数のスキヤンをかけ、小動物や鳥が隠れていないか、巣がないかと吟味した木だけを倒していたのだ。もちろん木を倒す方向も計算している。

「妙だな……。まさか俺たちのせいでの、みんな逃げ出したんじゃねえだろうな?」

「いいえ、そうではありません」

「どういう事だ?」

「この森にはすでに、我々よりも厄介なモノが存在しているようです」

サムが巨木をなぎ倒すと、視界が一気に開けた。

一人は、森を抜けたと見間違つ場所に出た。
だがすぐにそれは違うと理解できたのは、目の前の光景が自分たちの背後と同じだったからだ。

へし折られた木々。踏み折られた草に固められた地面。サムがゲイルのために作つた道と、同じ景色が広がつていた。

違う点があるとすれば、それは木々がでたらめな方向に倒れいることだ。例えるなら、邪魔だから無造作に払つたとでもいう感じだ。中には圧倒的な質量で押し潰されたような形跡もある。

この道の創造主は、ただ自分が進みたい方向に木があつたから倒したのだろう。まるで草を引き分ける感覚で。

道は森の南から北上し、西に向けて折れ曲がつている。西に方向転換する角の部分に、二人が東から来た道がぶつかつたのだ。

「おいおい、この森にはお前のオヤジが住んでるのか?」

ゲイルがサムの前に出て、森の中にぽつかりと開いたトンネルの

中に立つ。道の幅は、サムが作った道の倍以上あつた。

「倒れている木の断面がまだ新しいですね。鉢合わせしなくて幸運でした」

「だな。こんな小山のようなバケモンの相手なんて、頼まれたつてしまくねえぜ」

ゲイルは倒れた樹木をペチペチと叩きながら軽口を叩くが、いつものキレがなかつた。木には恐竜が引っ搔いたような爪跡が四本走つており、幹の太さはサムの胴体よりもさらに一周りは太い。

「まだこの近くにいるようですね。遭遇すると面倒なので、もう少し時間をおいてから」

「どうした?」

言葉を途中で止めたサムに、ゲイルが声をかける。だがすぐに彼が自分には感知できない何かを察知していると判断し、様子を窺う。ゲイルには何も聞こえなかつたが、サムの聴覚はゲイルとはできが違うのだ。

「ゲイル、悲鳴です」

「何だ……そんな事かよ。それで?」

あつさりとゲイルは聞き流し、少しの間沈黙が流れる。その間サムはじつとゲイルを見ていた。

「な、何だよその目は……?」

「いえ、助けに行かないのかな、と」

またサムの悪い癖が始まった、とゲイルは思った。いつもの事ながら、相棒の人の良さにはほどほど呆れる。どうしてこのむくつけき金属の塊は、やたらと余計なお節介をしたがるのだろうか。自分たちには、余計な事に首を突っ込んでいる暇などないというのに。

「どうせ原住民のガキだろ? ほつとけほつとけ

小指で耳をほじりながらゲイルは言つ。だがサムもなかなか強情で、一步も引かなかつた。

「どうして貴方は、いつもそう薄情なのです。少しは困っている人を助けようとは思わないのですか?」

「思わないね。知つてるか？ 情けは人の為ならずと言つて、無闇に手助けをすると、そいつのためにならないんだよ」

「それは誤った解釈のほうです。正しくは、人に情けをかけると、

結局は自分を助ける事に繋がるという意味です。貴方こそ、因果応報という言葉を知つていますか？」

「し、知つてるよ、銀河万丈くらい……」

「まつたく全然違います。耳と脳は大丈夫ですか？」

「うるせえっ！ 御託ばつか並べやがつて。ちょっと辞書が丸々頭に入つてるからって、調子に乗るんじゃねえぞ！」

間違いを指摘されて逆ギレするゲイルに、サムはさらに追い討ちをかける。

「ははあ、さては怖いんですね？ そうならそうと、素直に言つたらどうですか？ いいですよ、怖いなら無理に助けに行かなくても」

「何だとこの野郎。上等だ、行つてやるひじやねえか！ 悲鳴がしたのはどっちだ！？」

「三時の方向です。距離は

「こつちか！」

サムが言い終わるよりも早く、ゲイルは竜巻が通つた後のような森のトンネルを疾走していた。

「まつたく、いつもながら手のかかる……」

すでに見えなくなつたゲイルの背中に向けて、サムが小さく声を漏らす。鉄仮面のような顔から表情は読み取れないが、どことなく微笑しているように見えた。

「いや、いや

サー・シャはくせのある長い赤毛を振り乱しながら、必死で石を投げる。だが腰が抜けた尻餅をついた状態で投げた石は、見当違いの方向に飛ぶか、届かず、虚しく地面に落ちる。

！ ！ ！ あ、お行け！」

後退りながら、サー・シャは死に物狂いで石を投げる。石と一緒に
むしitた草が、少女の眼前で舞つた。

繋ぎ合わせたような巨大な生物が、地響きのような唸り声を上げている。

緑色のぶよぶよとした虫の腹に、小石が虚しく弾かれた。蟻に似た顔面の顎から、じゅるじゅると粘液が涎のごとく垂れる。それが食欲を連想させ、サー・シャの恐怖を増幅させた。

壁が彼女の逃げ道を塞いでいた。

見上げるほどの崖は、腰を抜かした少女の力ではとてもないが登れるものではないだろう。それに登つている間に絶対捕まってしまう。完全に退路を絶たれ、绝望と恐怖で疾が溢れをつくなる。

森にサー・シャの絶叫が木靈する。叫んでも無駄な事は充分解かっている。この森には、城の屈強な兵士ですら恐れて入つて来ないのだ。だがそれでも、自我を保つために本能が喉を振るわせる。そうしないと精神が壊れてしまいそうだった。

木靈が小さくなるにつれ、サー・シャの絶望が大きくなる。
食べられる そう思つた時、サー・シャの耳に信じられない声が

届いた

ପାଇଁ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

サー・シャの叫びに応えるかのように、誰かの叫びが徐々に近づいて来る。

その声は一秒ごとに大きく、そして近くなる。視界を蟻頭に塞がれているが、誰かがこちらにもの凄い速さでやって来るのが感じられた。

背後からの咆哮に、蟻頭がゆっくりと振り向く。巨大な腹が蠕動しながら移動すると、サー・シャの視界が僅かに開け、ほんの一瞬だが誰かがこちらに駆けてくるのが見えた。

誰かが助けに来てくれた。

絶望に支配されかけた少女の心に、一筋の希望の光が射す。それは太陽の光のように、とても明るくて温かい。

サー・シャは、幼い頃母から聞いた昔話を思い出した。

絶体絶命のピンチに現れる、勇者の物語を。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

疾走しながらゲイルが吼える。

ゲイルが駆け抜けた跡は、耕したかのように地面が抉れていた。速い。あれほど歩きにくいくらい愚痴をこぼしていた森を、矢のよう駆け抜ける。

緑の巨大な物体を視界に捉えた。見るからにおぞましく、そして大きい。あれならこの森に生えている木々など、何の障害物にもならないだろう。

だがそんな事はどうでもいい。それよりも、縄を裂くような悲鳴と一緒にだけ緑の塊の後ろに見えた赤毛が、ゲイルのテンションを一気に上げた。

さらに速度を上げる。

蟻の頭がゲイルに向き直り、突然湧いて出た邪魔者に敵意を剥き出しにする。ゲイルは構わず一直線に蟻頭へと突進した。

下半身がイモムシ状なだけに、蟻頭の方向転換は遅い。ぶよぶよした腹が波打ち、見る者の生理的嫌悪感を刺激する。だが腰から上

の人間に近い上半身は、下半身に似合わず機敏な反応を示す。

強引に体を捻り、蟻頭は近くにあつた木々を後ろ手で払う。腕のほんの一振りで、数本の大木がゲイルに向かって飛んだ。

突然襲いかかる大木の弾幕。だがゲイルは止まることも避ける事もせず、まるで飛んでくる巨木など目に入らないかのようにただ真っ直ぐ蟻頭へと駆ける。

回避行動すらしないゲイルに、一本の木が直撃コースで飛来する。当たれば常人なら即死間違いなし。だがゲイルは右手を振りかぶると、木の幹に手刀を一閃した。

「ゲイルチョップ！」

ただの手刀。ただのチョップ。たつたそれだけの一撃で、巨木が真っ二つに割れてゲイルの後方へと吹っ飛んだ。

ゲイルの走る速度はまったく衰えず、蟻頭がようやく重たい体を引きずるように反転した時にはすでに懐に入っていた。

「遅いんだよ、『テカブツ』が！」

ゲイルは左足を地面に突き刺す勢いで踏み込み、体を回転させる。突進の勢いをそのまま乗せ、強烈な右の回し蹴りを放った。

ずどん、と蟻頭の腹が大きく凹み、巨体が横にずり動く。だがゲイルの足は、すぐに押し返されてしまった。

予想外の弾力に、ゲイルはバランスを崩す。だが何とか持ち直し、蟻頭の腹に蹴りの連打を浴びせた。

爆撃の連続音が森に響くが、ゲイルの足には分厚い水風船を蹴つたような感触が伝わつただけだった。

「クソ、効いてねえ」

ゲイルが顔を上げて蟻頭を見るが、ダメージがあるようにはまったく見えない。無論蟻の顔面に表情があればの話だが。

腹を攻撃するのを諦めようとした時、頭上から蟻頭の腕が襲いかかつて來た。

「うおっ……！」

鋭い爪を持つた豪腕が、次々とゲイルを襲う。イモムシの下半身

と違い、蟻頭の腕は移動速度の千倍は速かつた。

矢継ぎ早に繰り出される蟻頭の攻撃を、ゲイルは右に左に飛び跳ねてかわす。巨大な腕が空振りするたびに、地面が深く掘られた。

「へつ、遅い遅い。遅すぎて目をつむつてもかわせるぜ」

余裕綽々のゲイルは本当に目を閉じる。それでも蟻頭の攻撃は、ゲイルには当たらなかつた。

だが

「あら？」

目を閉じて飛び跳ねていたため、ゲイルは蟻頭が掘つた窪みに足をとられた。

無様に地面に仰向けに倒れるゲイル。その隙を逃さず、蟻頭の腕がゲイルに伸びる。

強烈な平手打ちが、大量の土砂を撒き上がらせた。激しい土煙が起こり、少女は慌ててバスケットを庇うように覆い被さる。

辺りに充满していた土煙がようやく治まるごとに、サーチャはゆっくりと体を起こした。体中に土を被つていたが、幸いどこにもケガはない。口の中の砂を吐き出し、髪に積もつた土を手で払い落とす。バスケットの中身も、彼女が身を呈して守つたお陰で無事だつた。ほつと胸を撫で下ろすが、今はそれどころではない。蟻頭はまだ自分の目の前に居るのだ。だが怪物は自分の事など気にもかけず、背中を向けてじっとしている。

これはチャンスだ そう確信したサーチャは、勇気を振り絞つて蟻頭の横をそつと通り抜ける。怪物は何かに夢中になつていてるようで、地面を這い進む少女にはまったく気がつかなかつた。

そういうえば、助けに来てくれた（と彼女が勝手に信じている）勇者様の姿がなかつた。まさか颯爽と駆けつけたはいいが、怪物に恐れをなして逃げ帰つてしまつたのだろうか。

いや、そんな事があるわけがない。何しろ勇者様なのだ。こんな虫っぽい怪物を恐れるなんて事はないはずだ。

だが、ちらりとサー・シャは自分の家よりも大きな蟻頭を見上げる。まず目についたのは、グロテスクな下半身だ。その上に人の体と蟻の頭を据えるなんて、子供でもこんな奇抜なデザインは思いつかない。確かにこんな巨大な怪物と闘えと言われたら、どんな勇猛な戦士でも一の足を踏むだろう。

得も言えぬ不安に襲われたサー・シャは、とにかくここから離れようと必死に地面を這う。大事なバスケットを頭に乗せて両手で支え、懸命に足を動かした。

這い進むにつれ、蟻頭の腹で隠れていた景色が露になる。ふと見ると、蟻頭の手から何かがはみ出しているのを見つけた。

よく見るとそれは、蟻頭の手に押し潰されたゲイルであった。

「あ…………」

助けに来たはずの勇者が、まさかの返り討ちに遭っている。

あまりにショッキングな光景に、サー・シャの手からバスケットが落ちる。そして少女の意識は闇に吸い込まれた。

蟻頭の指の隙間から覗くゲイルの体は、ぴくりとも動かない。巨木を簡単になぎ倒す蟻頭の豪腕を受ければ、圧死は必然であろう。むしろゲイルと解かる形を残しているのが奇跡だ。

獲物を完全に仕留めたと確信したのか、蟻頭が嬉しそうに顎をガチガチと鳴らす。表情を持たない蟻の顔が、まるで笑っているように見えた。

だが次の瞬間、蟻頭が苦痛の声を上げる。見れば、蟻頭の指をゲイルが両腕で締め上げていた。

「いてえじやねえか、この……この……えっと、半分以上虫だから、この虫野郎」

ゲイルは両足を蟻頭の指に絡ませ、さらに締め上げる力を強める。ぎりぎりと指が軋み、怪物は悲鳴に似た鳴き声を上げた。

指を襲う激痛に、蟻頭は堪らず手を激しく振つてゲイルを振り払おうとする。だががつしりと指にしがみついたゲイルは、振り回さ

れながらも執拗に蟻頭の指を締め付けた。

「オラあつ！」

気合いとともに、ゲイルは蟻頭の丸太のような指をへし折り、そのまま力任せに引きちぎる。

蟻頭の絶叫が一際大きくなる。ゲイルは怪物の指を引きちぎった反動を利用して跳躍した。

地面に降り立つたゲイルは、抱えていた怪物の指を放り捨てた。どさりと地面に落ちた指は、濃い緑色の体液を撒き散らしながらのた打ち回る。蟻頭も激痛のあまり暴れていた。

「マジであつたま來たぜこの野郎。虫らしく踏み潰してやるから覚悟しろ！」

蟻頭に向けて指をさすと、ゲイルは両足を開き腰を落とす。ゆっくり肺と腹の中の空氣を全て絞り出すと、大きく深く息を吸う。

「我 最強なり」

ゲイルの発した言靈キワードによつて体内の内燃氣環ソウルジェネレーターが発動し、全身の筋肉が制限から解放される。戒めを解かれた肉体が歓喜の声を上げ、その高揚感がゲイルの闘争心をさらにかき立てる。

「行くぜっ！」

低くしゃがみ込んだゲイルは、全身のバネを最大限に溜める。地面を穴が開くほどの力で蹴り、音速に近い速度で空へと舞い上がった。

数秒で森を見渡せるほどの上空に到達する。下を見ると、蟻頭の姿が豆粒ほどに見えた。

体が重力に捕らえられ、上昇が止まる。

「体がダメなら頭を潰せばいいって、昔から決まつてんだよ」雲に手が触れる上空で、ゲイルはにやりと笑う。

自由落下が始まり、ゲイルの体が下に引っ張られる。それと同時に右足を高く振り上げて、自分の体を縦に連續回転させた。

高度が下がるにつれ、落下速度と回転速度が上がり、ゲイルは車輪のように大気を切り裂きながらまつ逆さまに落ちた。

「くらえ！ 必殺、超重力踵落とし《グラビトンボマー》！」
遠心力で加速した踵が、落下速度をプラスされて蟻頭の頭頂部に炸裂する。

轟音が生まれ、蟻頭の首が衝撃に耐え切れず体にめり込む。完全に頭が沈み込んで勢いは止まらず、上半身がめきめきと虫の腹に飲み込まれ、蟻頭は縦に押し潰されていく。強制的に押し込まれた上半身に圧迫され、虫の腹が破れ体液が噴出した。

大気との摩擦で、全身から煙を立ち上げたゲイルが足を離す。地面に着地して見上げると、蟻頭の体長は半分以下になっていた。

すっかり体積の小さくなつた蟻頭の腹を、ゲイルが爪先で軽く蹴る。だが蟻頭は脈動しながら体液を垂れ流すだけで動かなかつた。蟻頭が完全に沈黙した事を確認し、ゲイルは「フン」と鼻を鳴らす。

「虫！」ときが俺に勝とうなんて、百億万年早いぜ

「そのわりには苦戦していたようですが？」

「うおっ、びっくりした！」

いきなり背後に現れたサムに、ゲイルはびくつと体を震わせる。

「何だよサム、今頃追いついたのか？ 相変わらずドン亀だな、お前は」

「私は重力下では、本来の機動性を發揮できませんからね。それと

「あ……」

サムが両手に抱えている少女を見せると、ゲイルは忘れていた大事な何かを思い出したような顔をする。

「誰かさんが目的を忘れて派手に暴れまわっているので、私が保護しておきました」

サムの皮肉に、ゲイルが「ぐ……」と唸る。蟻頭に叩きつけられた事で頭に血が上り、今の今までっかり少女の事を忘れていたのだ。

ゲイルは少女の顔を覗き込む。『氣を失っているのか、サムの手の中でぐつたりとしていた。

「おい、動かねえぞ。まさか死んでるのか？」

「いいえ。氣を失っているだけです」

「そうか……」

ほつと息をつくゲイル。注意して見れば、少女のささやかな胸が小さく上下している。特に目立った外傷はなさそうなので、本当にただ氣絶しているだけなのだろう。

少女が無事なのを確認すると、やおらゲイルは溜め息をついて肩を落とした。手を頭の後ろに組み、わざとらしくがっかりしたポーズをとる。

「どうしました？」

「しかしうつすい胸だな。こいつ本当に女か？ つたぐ、参ったな……」

「まだ少女と呼んだほうがよい年齢のようですが、それが何か？」

「いや、どうせ助けるなら巨乳の美女が良かつたなあつて思つてな」

「はあ……」とサムが呆れる。鉄仮面の通気孔から、溜め息に似た排気が漏れる。

「こんなツルペタを助けるために苦労したなんて、とんだ無駄骨だぜ。俺は胸がメロン大以下の奴は、女と認めないポリシーを持っている事に定評があるんだ。知ってるだろ？」

両手を胸の前で動かして豊満な胸をジエスチャーするゲイル。サムは奇妙な動きをする相棒を、文字通り無機質な目で見ていた。わずかな沈黙の後、サムは少女をそつと木陰に横たえた。そして蟻頭の死骸に近づき、しげしげと眺める。

「この生物……奇妙ですね」

「無視か？ 俺の話はスルーか？」

「え？ ああ、すみません。よく聞こえませんでした」

「お前はその気になれば、一キロ先で落とした針の音でも聞こえ

るだろ。それとも何か？俺の声は、お前のセンサーでも感知できない特殊な音波なのか？」

唾を飛ばして喚く相棒をよそに、サムは蟻頭の腹の表面を左手でなでる。

突然サムの右手の甲から剣が飛び出し、一秒間に一万回振動する超振動ブレードの刃が低い唸りを上げる。

左手で当たりをつけた箇所に、ブレードの刃が突き刺さる。ゲイルの渾身の蹴りですら破れなかつた体皮に、刃はあっさり飲み込まれた。そのまま刃で円を描き蟻頭の腹をくり貫くと、躊躇なく腕を突っ込み何かを掴み出した。

「ゲイル、これを見てください」

「全部無視かよ！？」

目の前に突き出されたサムの手を、ゲイルが叩く。粘液のついた握り拳がぬちやりと音を立てて開かれると、ゲイルの顔が徐々に真剣になる。サムの掌には虹色に淡く輝く、クリスタルに似た物体が乗っていた。

「これは……」

「科学的に圧縮されたエネルギーの塊です」

「と言うと、この化け物は人工的に作られたものだつて事か」

「当たりだな、とゲイルはにやりと笑う。

「この惑星には絶対ありえない物質ですからね。間違いないでしょう。恐らくこの物体は、怪物の構築及び原動力として機能している核のようなものです。ただエネルギーの圧縮率が異常で、これ一つでも小さな発電所程度のエネルギーを有しています」

そうか、とゲイルは頷く。クリスタルは仄かに明滅を繰り返し、ゲイルの顔を照らしている。蟻頭の命の源であつたクリスタルの光はとても美しく、そして儂かつた。

二人がクリスタルを眺めていると、乾いた音を立てて、蟻頭の死骸に亀裂が入つた。巨体が形を失つていく。地面に落ちた破片はさらに細かく崩れ、砂となつて風に舞つた。

「核を抜いたため、肉体が崩壊を起こしているようですね」

「所詮は仮初めの命つてやつだ。命を与えられた操り人形も、電池が切れればただのガラクタに逆戻りか……」

無言になるサムに、ゲイルは「悪い。忘れる」とばつが悪そうに言った。

二人はしばらくの間、崩れ行く蟻頭の姿を黙つて見守った。

蟻頭は、五分ほどで完全に砂の山に変わった。砂山もいすれ風に飛ばされてなくなるだろう。残つたのは、ゲイルの拳ほどの大きさのクリスタルだけ。サムは、掌でぼんやりと光るクリスタルと砂山を交互に見た。

「感傷か？　お前にしてはセンチメンタルだな」

そう言つとゲイルは、サムの手からクリスタルを取り上げた。クリスターにまとわりついて蟻頭の体液を、顔をしかめながらズボンの尻で拭く。

「いいえ、そういうわけでは……」

「くだらない事を考へている暇があつたら、とつととコイツのデータをキヤサリンに回せ。恐らく今回の^{ターゲット}標的に繋がる鍵だからな」

「了解しました」

サムの両目が赤く光り、ゲイルの掌に置かれたクリスタルをスキンする。データを採取すると、衛星軌道上で待機している宇宙船のメインコンピューター『キヤサリン』に転送した。

サムからの転送データを受信したキヤサリンは、すぐさま惑星全体のサーチを開始した。

「サーチ開始しました」

サムの報告を受けると、ゲイルは持っていたクリスタルを無造作に腰のポーチに突っ込んだ。あまりの自然な動作に、さすがのサムも思わず見逃してしまったところだった。

「ちょ……もう少し丁寧に扱つてください。もしそれが爆発したら、いくら貴方でも無事では済みませんよ」

「つたく心配性だな……お前は俺の母親か？」

「そういう問題ではありません」

「いちいち細かい事を気にしているとハゲるぞ」

「元から髪なんて生えてませんよ」

「ははっ、そうだつたな」

サムは上手く話を反らされた事に気がついたが、ゲイルが楽しそうに笑っているのを見てそれ以上何も言わなかつた。

「それじゃあ獲物の巣穴が見つかるまで、どこかで待機するか。

無闇に歩き回つても、腹が減るだけだからな」

大きく伸びをすると、ゲイルの腹が鳴る。そしてそれに呼応するように、少女が小さな声を上げた。

「「ひ、ん……」「…」

サー・シャは小さく呻くと、ゆっくりと目を開けた。木の枝が風にそよぎ、木漏れ日が顔に注ぐ。太陽の光が目に入り、思わずきゅっと目をつむる。

自分はどうしてこんなところに寝ていたのだ？ 田を開じたまま、事の顛末を思い返してみる。背中に感じる草の感触が、妙に心地良かった。

じつして草むらに寝転んでいると、木陰で昼寝をしていただけのように思える。時折吹く風が肌を優しく撫で、赤い前髪を揺らした。昼寝にはもつてこいの日だったが、果たしてそのために自分は森にまでやって来たのだろうか。

まどろみの中で混乱した頭を整理していると、木々のざわめきに混じって聞き慣れない声が聞こえてきた。

「それより腹が減ったな。何か食い物持つてないか？」

「もう全部食べたのですか？」

「育ち盛りだからな。あれっぽっちじゃ足りねえよ」

「これ以上育つわけないでしょ。……。食料といいやつとの戦闘といい、少しは計画性というものを身につけてくださいよ」

「つたく口うるせえな。お前は俺の女房か？」

「そういう問題ではありません」

「あれ？ この会話、前にしたつけ？」

「気のせいですよ。それより、その手に持っているものは？」

「これが？ さつきそこで拾った」

「それはあの少女の所持品でしょ。勝手に触ると怒られますよ？」

「バスケットと言えば、中身は食い物に決まってる。助けてやつた謝礼代わりに、ちょっとくらいつまんでも罰は当たらないだろ」

バスケットとう単語を聞いて、サー・シャの目が大きく開かれる。

そういうえば、自分はバスケットを持っていたはずだ。そしてあれには、大事なものが入っているのだ。

慌てて起き上がる。声のした方向へ顔を向けると、奇妙な二人組みが座り込み、バスケットの中を覗き込んでいた。

「なんだこりや。草しか入つてねえぞ……」

「あてが外れて残念でしたね」

「まあ意外と美味しいのかもしれないし、とりあえず食つてみるか」「そこで躊躇なく食べる、という選択肢を選ぶ神経は尊敬に値しますよ」

「あまり褒めるなよ。照れるぜ」

「褒めてませんよ。せめて火を通して食べないと、消化に悪いですよ」

「サラダだつて生で食つだろ。それに火なんか通したらビタミンが破壊されちまう」

サー・シャが愕然としている間に、男がバスケットの中から草をひと束掴み、ゆっくりと口に運ぼうとした。サー・シャは慌てて駆け出す。

「だ、ダメ。待つて！」

「おや、気がついたようですね」

「なんか凄い形相でこっちは走つてくるぞ?」

必死で走るサー・シャに向けて、男が笑顔で手を振る。その手には、彼女が命がけで森に採りに来た薬草が握られていた。

「おい貧乳、これ食つていいか?」

「誰が貧乳よつ！」

「がつ……！」

見ず知らずの男に自分が最も気にしている事を言われ、反射的に体が動いた。座り込んでいる男の顔に、サー・シャの低い飛び蹴りが炸裂する。男は見事な後ろ回りで地面を転がつて行き、木にぶち当たつてよつやく止まつた。

「あ……」と大きな鎧を着たもう一人が、木の根元でひっくり返

つている男を見て呆然とする。

サー・シャは落ちたバスケットを拾い上げると、散らばった薬草をせつせと中に詰め込んだ。

「あの、お嬢さん……？」

「何よ、何か文句ある？」

背後から恐る恐る声をかける鎧を、サー・シャはぎろりと睨む。普段なら、自分の倍くらいある身の丈の鎧男に向かつてこんな啖呵は切らないのだが、先の一言で完全にスイッチが入ってしまい恐怖も何も感じなかつた。それ以前に、こんな巨大な鎧を着た大男が存在するわけがないという疑問すら湧かなかつた。

「いいえ滅相もない。それよりも、相棒の失礼をお詫びします。あれは昔から粗忽な男で、私も普段から手を焼いて困つていたのです。今回の事は、彼にとつて良い教訓になるでしょう」

そう言うと大鎧は、よくやつたとばかりに親指を立てる。見た目を裏切る紳士的な態度に、サー・シャはすっかり毒氣を抜かれてしまい、煮えたぎつた頭がすうっと冷めていく。

「そ、そつ……、それなりいわ……」

冷静になつてみれば、恐らく彼らが蟻頭から自分を助けてくれたのだろう。命の恩人に蹴りを入れてしまつたと今さらながら気づいても、済んでしまつた事はどうしようもない。サー・シャは謝るのと礼を言うタイミングを一度に失つてしまつた。

「時にお嬢さん」

「サー・シャ」

「え？」

「あたしの名前。サー・シャでいいわ」

「了解しました、サー・シャ。私の事はサムとお呼びください」

それと　とサムは木の下でまだ伸びている男を見て、

「あちらの不躾で無作法で無礼な男がゲイル。私の相棒です」と紹介した。

なだらかな平地を、サー・シャはゲイルとサムを連れて西に歩いていた。彼女の案内で森を北に抜け、街道まで出てきたのである。

ちらりとサー・シャは後ろを盗み見る。背後では、ゲイルが不貞腐れたように手を頭の後ろで組んでぶつくさと歩いている。蟻頭にペシャンコにされたように見えたが、ピンピンしている。きっとあれは自分の見間違いだったのだろうと、サー・シャは納得しておいた。

ゲイルは見れば見るほど奇妙な男だった。薄い茶色の髪はぼさぼさで、目つきがやたら悪い。歳は自分よりも少し上だろうか。体格は細身だが痩せっぽちではなく、筋肉質で締まった印象を与える。

何より目を引くのはその服装だった。体にぴったりとした、首から下は爪先から手の指まで繋がった服。ゲイルの体に合わせてあつらえて、動きやすさだけを追求したようなデザインだ。だがその素材が何なのかは、見ただけではまったく判らない。もしかしたら町ではこういう服が流行っているのかもしぬないが、サー・シャの趣味ではなかつた。

ゲイルの服にはあちこちに焼け焦げたような跡があり、火事場泥棒をしてきた直後の盜賊をイメージさせる。恐らく十人がゲイルを見たら、八人は自分と同じ感想を持つだろう。

最後尾を黙々と歩くサムも、奇妙という点ではゲイルを上回つていた。

まず何より大きい。村で一番大きな男でさえ、彼に比べたら大人と子供だ。ゲイルだって小柄ではないが、サムの中にはつぱり納まつてもまだ余裕があるだろう。いつたい鎧の中にどんな人が入っているのか気になるところだが、見ないほうが良いという気がしないでもない。

鎧のデザインも奇抜だった。田舎育ちなのでこれまで数えるほどしか見た事ないが、城の兵隊や騎士のものとはまるで違う。だが彼の物腰や口調は、ゲイルと違つて上品だ。もしかしたらどこか名家の騎士なのだろうか。それにどちらかと言うと、サムの鎧は戦うための実用品ではなく、装飾や儀礼用のものに見える。だとしたら、

サムが主人でゲイルが従者だろうとサー・シャは勝手に設定を決めた。だが冷静になつて一人を観察すると、なんと胡散臭い連中だろう。命を助けてもらつた負い目からつい家に招待してしまつたが、早まつた事をしたのかもしれない。そうサー・シャは後悔したが、もう後には引けなかつた。

「おい、まだ着かないのかよ？」

後ろからゲイルが訊ねてくる。少し歩くたびに同じ質問をするので、サー・シャは小さな子供の母親になつたような気分だつた。

「うるさいわね、もうちょっとだから黙つて歩きなさいよ」

「さつきからそればつかじゃねえか。俺、ハラ減つて死にそうなんだけど」

「お腹が空いたくらいで死にはしないわよ」

「いや死ぬよ。餓死だよ餓死」

「ああもう、男のくせにグダグダ文句ばかり。少しほはサムを見習いなさいよ！」

「俺はあいつと違つてテリケートなの。歩けば疲れるし、動けば腹が減るんだよ」

何を当たり前の事を言つてゐるのだろう、とサー・シャは思つた。軽装のゲイルがそんなに疲れているなら、サムはどうなる。あんなに大きくて重そうな鎧を着ているのだから、疲労はゲイルとは比べ物にならないはずだ。それでもサムは文句一つ言わない。ゲイルはサムを少しば見習つべきだ。特に彼の紳士的な態度を。

「ほら、あそこに火山が見えるでしょ。あの山の近くだから、もう少し辛抱して歩きなさい」

サー・シャが南を指差すと、山頂から黒い煙をくゆらせている火山があつた。山の周辺だけ煙の影響なのか、暗雲が立ち込めてやけに暗い。麓は荒れ地と化しており、目に見えるのは岩と赤茶けた土ばかり。山へ続く道も荒涼として、近づくにつれて草木がまばらになつて殺伐としていく。ついさきまで生命力溢れる森を歩いていただけに、あまりの殺風景さに薄ら寒くなつてくる。

「ではあの火山を越えて行くのですか？」

「次は山越えかよ……」

「ううん、あの山には近づいちゃいけないの。だから遠回りだけ
ど、迂回して村に向かうわ」

「近づいてはいけないとは、どういう事ですか？」

「あの山はね、この辺りの守り神なの。神様が住んでる神聖な山
だから、誰も近づいちゃいけないってずっとと言われてたわ。もつと
も、火山だったのは大昔の話だったみたいだけね」

「しかし、今あの山は火山活動をしているように見えますが」

「十年前、あたしがまだ小さかった頃、急に活動を再開したの。
噴火こそしなかつたけど、大きな地震があつてみんなが大騒ぎして
たのを覚えてるわ。神様の怒りだと祟りとか言ってね」

「神様ねえ……。胡散臭い話だ」

「けど、あの地震があつてからなの。麓や森に怪物が出没しだし
たのが。だからますます誰も近寄らないようになつたわ」

「怪物はあの一匹だけではないのですか？」

「あんなに大きいのは珍しいけど、うじじゃうじじゃ居るわよ」

「危険な土地ですね。軍隊などが討伐してくれないのでですか？」

ゲイルの言葉に、サーチャの表情が曇る。辛い過去を思い出して、
唇をきゅっと噛んだ。

「何度も軍隊が出陣したわ。けど相手が悪すぎ。全部こじてんばん
にやられて逃げ帰ったわ」

「そりゃここの軍隊」ときじや、あの化け物に手も足もでねえだ
うつよ」

ゲイルがからから笑っていると、サーチャは「その中にはたしの
父さんも居たの」と、は小さな声で言った。その途端ゲイルの笑い
が止まる。

「す、すまん……」

「いいのよ、本当の事だし。けど偉い人は名誉とか誇りとかの
ほうが大事で、あたしたち平民の命なんて何とも思っていないんだわ。

あんな怪物に勝てるわけないのにね」

俯くサー・シャに、ゲイルとサムは言葉を失う。かける言葉が見つからないという感じだ。サー・シャも何も言って欲しくなかつた。気休めや慰めをかけられたところで、彼女の父が帰つて来るわけではないのだから。

「あたしの村は森にも山にも近いから、よく怪物の討伐に巻き込まれたわ。男の人は連れて行かれて、女の人は無理矢理働かされた。けど王様ももう懲りたみたいね。もう随分前から兵隊も徴兵も来なくなつたわ」

「恐らく、国がそれだけ疲弊しているのでしょうか？」

「フン。馬鹿が政治をやると、ろくな事になりやしねえ。だが政治をやつてる奴に限つて馬鹿だから始末に負えねえな」

そうね、とサー・シャは小さく微笑んだ。だがその笑みは諦めと悲しみを含んでいて、どこか寂しそうだった。

「ところでよお

「なあに？」

「俺、ハラ減つて死にそんなんだけど、その草食つていいか？」

「だ」から、これは大事な薬草なの。村に帰つたら」駆走してあげるつて、さつき言つたじやない！」

「そうだっけ？」

「馬鹿じやないの？ あんた馬鹿じやないの？」

「お前、二回言つたな。この貧乳貧乳貧乳！」

「バー・ガバー・ガバー・ガバー・カ！」

子供のように口ゲンカする二人を、サムは黙つて見守る。つと顔を上げると、火山が目に入つた。黒い雲がかかつた火山は、静かに火口から煙を昇らせ、そこには神よりも悪魔が住んでいるように見えた。

太陽が山の陰に隠れようとする頃、みづかへゲイルたちはサー西亚の村に到着した。

村は太い丸太で作つた柵で囲われ、門の内側の両脇には見張り櫓が一棟建てられていた。

門には村の若い男が一人立つており、それぞれの手に武器を握り締めている。農具を改造したようなそれは、あまりに貧弱で頼りなく、ほとんど氣休めといった感が拭えなかつた。

門の前に立つて大柄な青年がサー・シャの姿を認めるべく、笑顔で手を振つてきた。だがすぐに、彼女の後ろを歩いているゲイルとサムに気づいて表情を引き締める。

青年はサー・シャに駆け寄ると、まるで悪党から助け出さよつて手を引いてゲイルたちから離した。

「ちょっとグレン、何するのよ。痛いじゃない」

「それよりもここに行つてたんだ? あまり心配させんなよ」

「別にあんたに心配して欲しくないわよ。ちょっとおじこちゃんのために、森に薬草を探りに行つてただけ」

「森つてお前、あの森は怪物が出るから危ないって散々言われてるだろ」

「だつて、おじこちゃんの病気に効く薬草は、あの森にしか生えてないんだもの……」

叱られてしゅんとするサー・シャ。グレンと呼ばれた男は、仕方ないなどという顔をする。

「で、誰なんだあいつら?」

明らかに警戒した顔で、グレンはゲイルとサムを見やる。一步前に出、サー・シャを自分の後ろに隠すと同時に、手に持つた武器を構えた。

「何モンだ、てめえら?」

グレンの持つ棍棒には、あちこちでたらめに釘が打ち込まれている。こんな物、怪物相手にどこまで通用するかはわからないが、少なくとも普通の人間に對しては充分な凶器だ。それを筋骨隆々のグレンが持つと、それだけで威圧感は抜群だった。

だがゲイルは釘バットを構えて啖呵を切つているグレンの姿を見ても、恐怖を感じているように見えない。それどころか薄ら笑いすら浮かべていた。その余裕がグレンの神經を逆なでする。

「なに笑つてんだよ。殺すぞ？」

「いやなに、子供がおもちゃで遊んでる姿が微笑ましくてつい」

「テメふざけてんのか？ いつぺん死んどくかコラ」

「できもしない事を言つなつて、ママに教わらなかつたか？」

「野郎……」

一触即発の空気が漂う中へ、サー・シャが割つて入つた。グレンの袖を引っ張ると、耳打ちをする。

「ちよつとお、あたしの命の恩人に喧嘩吹つかけないでよね」

「なに……」とグレンの顔に動搖が走る。

「あたしが森で怪物に襲われた時、彼らが助けてくれたの。だから警戒しないで。そりや見た目はメチャクチャ怪しいけど、悪人じやないわ」

グレンは乱暴に腕を引いて、服の袖を持つサー・シャの手を払う。「チツ」と舌打ちを残すと、面白くなさそうに地面に唾を吐いて去つて行つた。

「何だあいつは？ お前のコレか？」

サー・シャに向けて、親指を立てるゲイル。

「やめてよ、ただの幼馴染。あいつはグレン。村長の孫で、この村の自警団のリーダーなの」

「ガキ大将がそのまんま大きくなりました、つて感じだな

そうね、とサー・シャはくすくす笑つた。

「さ、それより家うちに行きましょ。お腹が空いてるんでしょ？」

「おう、そうだ。すっかり忘れてた」

「なにそれ？ あんたって本当に変な人ね」

「そうか？ 初めて言われたぜ。それよりさあ

「なに？」

「俺、ハラ減つて死にそななんだけど」

「やつぱあんた馬鹿だわ……」

がつくりと肩を落としつつ、サーチャはゲイルたちを伴つて家路についた。

がつがつぼりぼりはぐはぐぱりがりぱりんぱりんべきつもきつ。
平凡な食卓に、似つかわしくない異音が流れる。ゲイルが食事をしている音だ。両手にものを掴み、それを交互に同時に口に入れる。飢えた獣よりも食欲に、噉むのも煩わしく飲み込む。一緒に食事をしているサーチャたちは、卓上に空になつた皿が次々と積み上げられていくのを呆然と眺めていた。

「見てて気持ちいいくらいの食べっぷりね。まだ足りないでしょ
？ もっと作つてくるわ」

「あ、あたしも手伝うわ、母さん……」

サーチャの母 リネアが立ち上がり、娘がそれに続いて台所に向かう。こうしている間にも、皿が次々と空になつていく。ゲイルの食欲はとどまるところを知らず、放つておけば朝まで食べ続けるのではないかと思われた。

「ときにお若いの……ゲイルさんと仰つたかな？ サーチャを助けてくれたそうで、何とお礼を言つたらよいか」

上座に座っている老人 ゴードがゲイルに深々と頭を下げる。
すっかり白くなつた頭髪が、ぱさりと卓に垂れた。

「ふあ？ 何か言つたか、じいさん？」

「いやいや。それより、鳥の骨は残したほうが良いと思つんじや
が」

「そうなのか？」

そう言いながら、ゲイルは鳥の腿肉を骨^いじとぱりぱり食べる。野

生の熊のような豪快な食べっぷりを、『コードは田を細めて楽しそうに見ていた。

「ところでじいさん、あんた医者なんだって？ 医者が病気になつてりや世話をねえぜ」

「お恥ずかしいお話です。しかしこの年になると、体のあたりにガタがきて難儀しますなあ」

「年寄りなんだから、あんま無理すんなよ」

「それはどうもご親切に。ですが、わしは幸せ者です。こんな老いぼれのために、危険を冒して薬草を探りに行つてくれる孫があるのだから」

ふうん、とゲイルは氣のない返事をして、皿に残った最後の腿肉を頬張る。骨を噛み碎く音が、室内に響いた。

「こりうして見ると、本当にただの置物みたいね」

家の前で直立したまま微動だにしないサムを見て、サー・シャは独り言のようには言った。

暗くなつた外に、ぽつんと立つ巨大な鎧がひとつ。水晶のような瞳は、まつすぐ何かを見つめているようで、そのくせ何も映していないようにも見える。本当に置物か彫像のようだ。知らない人が見たら、魔除けか何かと思うに違いない。こんなちっぽけな家の前に立たせるよりは、村の入り口に立たせたほうがきっと似合つだろうし、『利益もありそうだ』

「何か用ですか、サー・シャ？」

金属を軋ませ、サムが振り向く。

「サム、本当に中に入らないの？」

「いえ、ここで結構です。私の体重では家の床が抜けてしまいますので」

「そり……。じゃあこれ、あなたの分」

そう言ってサー・シャは、手に持つていた盆をサムに差し出す。盆の上には、大きな椀に盛られたシチューとパン、そして焼かれた肉

の塊が乗っていた。

「足りなかつたら遠慮なく言つてね。じゃんじゃん作るから」「すみませんサーチャ」

サムが謝罪すると、サーチャは慌てて首を横に振った。

「あ、いいのよ。別に文句を言つてるわけじゃないんだから。うちは女一人におじいちゃんだけでしょ？ 大量の食事を作る事なんて滅多にないから、お母さん張り切っちゃって」

「いいえ、そうではありません」

「え？ どういう事？」

「私には食事が必要ないのです。ですからこれはゲイルに『えてください』

「食欲が無いつてこと？」

「簡単に言えば、そういう事です」

「意外と小食なんだ。よくそこまで大きくなれたわね」

「私は生まれた時からこういう体なんですよ」

サムのまったく冗談つけのない声に、サーチャは吹き出した。盆が揺れ、椀のシチューが波打つ。

「ゲイルもそうだけど、あなたも変わった人ね」

「初めて言されましたよ」

「ふふつ、同じこと言つてる」

「相棒ですから」

「あんなのが相棒じゃ、あなたも苦労が絶えないわね」

「慣っていますので。けれどサーチャ、ゲイルを悪く思わないでください。彼は、その

言いよどむサムに、サーチャはどうしたのと訊ねる。

「彼が人や自分の言つた事を忘れてしまうのは、理由があるのです」

「知つてゐるわ。馬鹿だからでしょ？」

「え、そういう意味では……」

「冗談よ。たしかにあいつは馬鹿で下品で子供みたいな奴だけど、

あたしはああいう馬鹿つて嫌いじゃないわ

一人で納得してにこりと微笑むサー・シャ。

そうですか、とサムは納得したのか説明するのを諦めたのか判らないが、そのまま黙つてしまつた。

家中から、サー・シャを呼ぶリネアの声がした。料理の追加ができたのだが、盛り付ける皿が足りないから洗ってくれと頼んでいる。

「あたし行かなくっちゃ。本当に食べなくて平氣?」

「問題ありません」

「そう……。じゃあ食欲が出たりこつでも言ひて。もつとも、材料が残つてたらの話だけど」

おどけたように笑うサー・シャに、サムはお氣遣いどうもと応えた。

「あ、それとね、サム」

「何でしよう?」

「まだ……お礼言つてなかつたわよね。助けてくれて、ありがと

う

今さらという感が否めず、サー・シャは少し恥ずかしくなる。けれど怪物に襲われたりゲイルとサムのような奇天烈な人物と出会つたせいで、そこまで頭が回らなかつたのだ。

「貴方を助けたのはゲイルです。お礼なら彼に言つてあげてください」

「やう……。でも一応ね」

「そうですか。では一応、どういたしましてと言つておきましょ

う

サムの律儀な返答が、妙におかしかつた。これでよくあんなちやらんぽらんな男と一緒にいられるものだと思つ。

それじゃ、とサー・シャが家に戻るうとした時、家々の明かりに混じつて小さな灯りがゆらゆらと動いているのが見えた。灯りはゆつくりとこちらに近づき、やがてそれは誰かが手に持つた松明だと判る。

松明はひょひょこと波打つように上下に揺れ、サー・シャの家か

ら漏れる明かりに照らされると、一人の杖をついた老人の姿が現れた。

「こんばんは、村長さん」

「はいこんばんは、サーチャ」

サーチャが挨拶をすると、老人はにっこりと笑った。深い皺がびっしりと刻まれた皮膚が、剥がれ落ちてしまいそうな笑みだ。頭は禿げ上がっているが、代わりに白い髪が豊かに生えており、背筋は曲がっているが杖を持つ手はしつかりとしている。

「村長さん、また腰が痛くなったの？ お薬はまだ残ってると思つたけど」

「違うんだサーチャ。今日は患者ではなく、村長として来たんだよ」

サーチャはちらりとサムのほうを見たが、サムの目は松明の光を反射させていた。反射させていただけだった。

村長はゲイルの向かいに座り、観察するよつじ、じつと見つめている。

ゲイルは食事を中断されたのが気に入らないのか、むすつとした顔を台所に向けている。台所ではサー・シャが、村長が何の用かと緊張した面持ちで覗いていた。娘の背後ではリネアが、できあがった料理を運べず冷めてしまうのではないかと困っている。

「それで、いったい俺に何の用だよ？」

不機嫌さを隠さない声で、ゲイルが村長に言つ。礼儀も何もない物言いだが、村長は気にしてふつもなく真剣な眼差しをゲイルに向けている。

「実は、おりいつて」相談がありまして、じつじてお話をさせてもらいました」

丁寧が過ぎる話し方に、ゲイルは舌打ちする。肩書きのある人間や目上の者がこういう話し方をする時は、どうせ禄でもない話だろうという感情がありありと出ていた。

「森の怪物を、貴方が倒されたと孫から聞きました。やだや名のある武芸者だとお見受け」

「能書きはいいからさつたと本題に入れ。俺はメシを邪魔されるのが、不味いメシの次に嫌いなんだよ。そしてその次に嫌いなのが、メシが冷める事だ」

「これは……知らぬとはい、お食事を邪魔して申し訳ありません。では」

村長は卓の上で手の指を組むと、大きく息を吐いた。言いたくない事を仕方なく言わなければならぬような、そんな溜め息にも似た吐息だった。

「貴方にこの村に留まって、用心棒になつていただきたいのです」

「どうせそんなこつたううと思つたよ」

相手が用件を予想していた事に、村長の表情が明るくなる。

「そ、それでは」

「いやなこつた」

だが明るくなつた顔はすぐに曇つた。

「え…………？」

「俺たちにはそんな暇も、この村を守る理由も無い。だいたい、この村には自警団があるだろ。あいつらを鍛える。特にお前の孫を」

「し、しかし……怪物は城の騎士団ですら歯が立たないのです。そんなものに勝てるようになるまでには、いったいどれほどの月日がかかるか……」

「だいたい、森の化け物はもう居ないんだ。用心棒なんて必要ないだろ」

「それが、そうでもないのです…………」

どういう事だとゲイルが促すと、村長は訥々と語り始めた。

最初に怪物が現れたのは、やはり十年前。村の守り神である火山が活動を再開した直後だった。

だが怪物は知能があまり高くないのか、それともそういう性質なのか、縄張りの森からほとんど出なかつた。おかげで今まで村が無事だつたのだが、その怪物がいなくなつた今、空き物件となつた森に次の新たな怪物が住み着く可能性がある。それどころか下手をすると、新しい怪物は餌を求めて縄張りを広げる性質を持つているかもしれない。そうなれば森に近いこの村は、格好の餌場となるだろう。

つまりゲイルのした事は、いたずらにこの村の危険を増やしだけなのだ。一つの因子を排除すると、全体のバランスが崩れて思わぬ災害が起きる。自然とは、人間が手を加えて調整できるほど単純ではないのだ。

「こう言いたくはありませんが、貴方には責任をとつていただきたい。せめて安全が確認されるまで、しばらくこの村に留まつていただけないでしょうか？」

責任を問われ、ゲイルも無碍に断ることはできなくなつた。さすが村長である。下手に出でていながら追求すべきことはする。見かけに似合わぬ老獏さに、ゲイルは苦虫を噛み潰すよつた顔をした。

「わかつたよ……責任とつてやるよ」

ゲイルが観念したように言つて、「おお、それでは……」と今度こそ村長の顔が明るくなる。

「ただし、俺たちにも都合とつものがある。一週間で手を打とうじゃないか」

「ほほお、一ヶ月も滞在してくれますとな？」

「いや、一週間だつて」

「へ？ 最近耳が遠くなつて……。一年とはまた気前がいい」

「おい、じじい……」

「わかりました。まずは一週間といつ事で、よろしくお願ひします」

「長生きするぜ、クソじじい……」

「おかげさまで、今年九十歳になります」

平然としている村長に、ゲイルは苦笑いする。老人に手玉にとられたような気がするが、不思議と怒りは湧かなかつた。

「……で、何であんたがあたしの家に居候するのよ？」

「別に俺がそうしたいって言つたわけじゃねえよ」

寝耳に水な話に睡然とするサー・シャに、ゲイルは不機嫌そうな顔で悪態をついた。

「あら、お母さんは賛成よ。若い人がいると、元気やかになつていいじゃない」

「年頃の娘が居る家に、男を泊める母親がどこの問題なのよー」

「安心しろ。俺はお前を女だと思つていない」

「あんたは黙つて！」

村長が帰つた後、サー・シャの家ではゲイルを交えて家族会議が開催されていた。議題はもちろん、ゲイルをこの家に泊める事である。

サー・シャは頑なに拒否するが、意外にも反対するのは彼女だけだった。

「ゲイルさんはあなたの命の恩人なんだから、うちに泊まつてもうつのが筋というものでしょ？」

「それはそうだけど……。ちょっと、おじいちゃんも何か言ってよ……」

助けを求めて祖父を見やるが、ゴードーはにこにこと笑顔で賛成を表明している。サー・シャの知らぬ間に、家族はゲイルたちを家に泊めると決めていた。見ればリネアは、迷惑そうなゲイルに年はいくつだとか、年下の娘に興味はあるかなどとあれこれ質問している。これはもう自分に勝ち田は無いと悟ったサー・シャは、渋々ゲイルたちを泊める事を認可した。ここでゲイルたちは、晴れて当座の宿を確保したのだった。

納屋の扉を開けると、埃とカビの臭いがサー・シャの鼻をついた。くしゃみを連発し、涙目になりながら扉と部窓を全開にして換気をする。

納屋の中には今は使われていない農具や、薬を調合する乳鉢や薬研などが置かれていた。広さはそれほどでもないが、天井が高く入り口も広い。何より土間なので、サムの体重でも踏み抜くことがない。

「本当にここにでいいの？」

サー・シャが念を押して確認する。ゲイルは物珍しそうに納屋に放置された品々を眺めながら、上等上等と頷いた。

「いつも野宿ばかりだったからな。雨風さえ凌げればどこでもいいよ

「……あんたたちって、今までどんな生活してたのよ？」

「そうだな……。獲物を追つて東に西にって感じだ」

「狩人なの？」

「ま、そんなところかな

「ふうん……」

「この世界に手ぶらと全身鎧の狩人がいるのだろう。適当にほがらかされている気がしたが、サーチャはそれ以上余計な詮索はしなかつた。どうせしばらく我慢すれば、一人はこの村から去るのだ。あまり深く関わってもお互いに得はない。」

「明日はここを片付けて、それから村の中を案内してあげるね」ゲイルに毛布を渡すと、サーチャは一人におやすみと言つて家中に戻った。

サーチャが家の中に入るを見届けると、ゲイルは納屋の中のがらくたを隅に追いやる。どうにか一人分のスペースを確保すると、さつさと毛布を敷いて横になつた。

「本当にこの村に滞在するのですか？」

ずしん、とサムがゲイルの横に座る。納屋の壁にもたれかかると、板がみしみしと悲鳴を上げたのですぐに壁から背を浮かす。

「仕方ねえだろ、責任取れとか言われちゃ……。それにキヤサリンのサーチが終わるまではしばらくかかるんだ。野宿するより、屋根があつて美味しいメシが出るほうがいいだろ」

「ですが、良いのですか？ 滞在するといつ事は、少なかりすこの村の人間と関わりを持つ事になりますよ？」

「寝泊りするだけなら大丈夫だろ。それよりあのおふくろさんのメシ、美味かつたなあ」

寝返りをうち、腕を頭の後ろで組むゲイル。夕食の味を反芻しているのか、口元がゆるんでいる。

「味なんてわからないでしょう」「元

「だがせつかく食える体なんだ。食えない奴の分まで食つてやりたくなるじゃないか」

「昔の習慣が抜けないのも考え方ですね」

「そうだな。寝ないで済むなら、ずっとお前の相手をしてやれるんだが……」

「仕方ありません。任務中は待機モードにできませんからね。け

「どうも慣れました」

ゲイルは「そうか」大きな欠伸をする。昼間あれだけ暴れたのだ。満腹も重なつて、眠気もピークを迎えている。怪物を素手で屠るゲイルも、睡魔には勝てないのだろう。

目を閉じ無言になると、やがて規則正しい呼吸音が聞こえてきた。サムはゲイルの寝息を聞きながら、ずっと納屋の奥の暗闇を見つめていた。

ぼんやりとした視界の先に、淡く光る天井が見える。天井全体が有機ELで光り、下着一枚のゲイルを照らしている。

横たえた体は手足や胴体、首にいたるまで拘束されていた。頭もぼうつとして動かない。かるうじて動く目だけを使って、ゲイルは辺りを見回した。

白い天井。白い壁。窓も扉も見えない、ただ白い部屋。そうだ、ここはキャサリンの研究室に似ている。彼女はステロタイプな人間で、研究室は白で統一しているのだ。

しばらく体をよじつたりしていると、首の拘束に少し余裕ができる。だが頭を少し持ち上げるだけで、拘束具が首を締める。苦労して首を巡らせると、やはりここが彼女の研究室だという事が判った。頸を精一杯上げて後ろを見ると、心電図や数台の医療機器が並んでいるのが見えた。心電図のモニター画面では、緑の線が波を描いている。他の機械から伸びたコードが、ゲイルの体のあちこちに繋がっていた。

さらに首を巡らすと、自分の足の向こうに人影があった。いや、それは人ではなく、物言わぬ巨大な機械であった。

人の体を模して作られた作業機械は、沈黙とともに起立している。電源が入っていないのか、それとも待機モードに入っているのか。ゲイルと同じように無数のコードに繫がれた巨人は、主が声をかけるのを待っている忠実な犬のように、ただじっとしていた。

頭が痛い。頭の中に、ぽつかりと何かが欠けた空洞がある。欠けたものが何かは判らないが、確實に何かが欠けている事だけは実感できる。脳ミソがまるで、穴だらけのチーズのようだ。しかもその穴に、まったくそぐわない別の何かを挿入されている。繫がらない記憶。覚えのない知識。いつたいいつ、どこで自分はこんな経験をしたのか。だが確かに情報として自分の脳にある。とんでもない違

和感に気分が悪くなる。

ゲイルが目を覚ますのを見計らつたように、どかどかと大勢の人間が室内に入つて來た。無いと思っていたが、どうやら扉は機械類の先にあつたようだ。あつと言つ間にゲイルは白衣を着た集団に囲まれた。

声を上げようとするが、声が上手く出ない。掠れた声で誰だ何だと叫ぼうが、白衣を着た者たちは無言でモニターの数値を記録したり、操作盤をいじつたりしている。

また扉が開いて誰かが入つてくる。今度は白衣ではない。^{スメイカ}宇宙連邦治安維持局の制服を着た男が部屋に入つて来ると、白衣を着た連中に緊張が走つた。

白衣の一人が、制服の男に敬礼をする。白衣の男は、相手が明らかに自分より年下なのにも関わらず、恐縮した態度で接していた。

「ダラズ係長、被験者が目を覚ました」

「異常は？」

「ありません。肉体は今のところ順調です。ただ……」

「ただ、何だ？」

「脳に若干の後遺症が残ります。具体的には、変則的な記憶の欠如や性格の変化が出る可能性が高いかと……」

このまま作業を続けますかという問いに、ダラズはほんの僅かだけ考える姿勢を見せた。だがすぐに瑣末な問題だという結論に至る。

「作業を続ける。記憶の混乱に注意し、^{フィードバック}脳神経を形成、接続。人格や精神に障害が起こつたら直ちに対処。問題があるなら全て消去して、再インストールしてもいい。ボディは壊れても構わんが、データの保存を最優先しろ」

「りよ、了解しました……」

白衣の男はダラズに再び敬礼をすると、他の者たちに向けて指示を出す。部下たちは黙々と作業に取り掛かつた。

「さて……」

ダラズが神経質そうに、片手の小指で眼鏡の位置を直す。ゲイル

に近づきしげしげと彼の姿を眺めると、口の端を歪めてほくそ笑んだ。

「いい格好だな、ゲイル。気分はどうだ？」

ゲイルの気分は最悪に決まっている。だがそれ以前に、どうして自分が実験動物のような扱いを受けているのか見当がつかない。

「恋人を利用して連邦学術院からデータを盗み出し『ハッキング』、それを自分のものにするとは。なんて悪い奴なんだお前は」
ダラズの言葉は、ゲイルをますます混乱させる。まったく身に覚えのない話に、頭が痛みを増した。

連邦学術院は、この世のありとあらゆる技術や知識を研究するための機関である。宇宙の英知を集めたこの機関には、様々な研究者が集まる。ゲイルの恋人、キャサリンもその一人だ。

そして連邦学術院には、もう一つの役割がある。それは、個人や組織で所有するには、あまりにも危険な技術や知識を封印する事だ。機関の機密には、惑星はおろか宇宙そのものを破壊しかねない危険な技術^{テクノロジー}が数多く存在する。

「俺が……キャサリンを利用しただと？」

「そうだ。お前は研究員の彼女を使って、連邦学術院の機密を盗み出したんだ。これは極刑を免れない大罪だぞ」

「そ、そんな……」

自分が処刑される。しかもそれが身に覚えのない罪によつて。あまりにも理不尽な現実に、ゲイルは目の前が真っ暗になる。ダラズはゲイルの絶望した表情に、満足げに笑つた。

「だが運が良かつたな。お前も知つての通り、我々宇宙連邦治安維持局は、そういう技術や知識を持つ者を取り締まる機関だ。お前は今や、個人で持つにはあまりにも強大な力を有している。言い換えれば、お前はその辺の兵器よりも危険な存在なんだよ」

「危険な存在……俺が？」

「そうだ。お前の体には、連邦学術院に封印されていた数々の禁忌が詰め込まれている。よつてお前の身柄は今後、我々に管理され

る事になる」

殺されるよりはマシだろうと、ダラズは何の慰めにもならない事を言つ。宇宙連邦治安維持局に管理されるといつ事は、人間ではなく一つの兵器として管理されるのと同じだ。

「俺が……兵器……」

「そうだ。お前は我々が求めていた兵器だ。連邦学術院は、我々がいくら連邦宇宙軍を牽制するために武力が必要だと要請しても、一度封印したテクノロジーは決して表に出さなかつた。だが遂にその力を手にする事ができた。それがお前だ。お前は我々宇宙連邦治安維持局の いや、私のものだ。私の手足となつて働け」
ぎりぎりとゲイルが歯を軋ませる。ダラズの自分勝手な物言いに、怒りが込み上げてくる。何が私のものだ。何が私の手足だ。自分は物でも兵器でもない。人間だ。

「ああ、そうだ。一つ礼を言つておこう。お前を検挙する事で、私の手柄が一つ増える。これで昇進は間違いなしだ」

歯茎から血を滲ませるほど強く噛み締め、獣のようにゲイルは唸る。これほどまでに侮辱されたのは生まれて初めてだ。だが獣の如く繋がれた体は、彼の怒りがダラズに及ぶのを妨害していた。何より、硬化テクタイトで作られた戒めは、人の力で破れるものではない。

「どうした、悔しいのか？ ならば一つ良い一コースをやろう。お前の恋人……キヤサリンとか言つたか」

恋人の名を聞き、ゲイルの目に理性が戻る。自分の事で失念していたが、ここは彼女の研究室なのだ。なのに姿が見えない事に、どうして気づかなかつたのだろう。

「彼女も本来は極刑だったのだが、お前に騙され利用されたという事で、情状酌量となつた」

「それじゃあ、彼女は……」

助かるのか、という言葉は声にならなかつた。彼女が極刑を免れたというだけで、ゲイルは安堵のあまり声を失つていた。

「ただし、彼女は精神を電腦に移植後、我々が管理する。肉体は
冷凍保存だ」

ケイルは息を飲む。
それではただ殺されていないだけで、死んだ

「…………どうしてそんな事を…………？」

男は渋ややかな声で答へた。

人質がいるお前を和田に渡すせむかめのが上

たつたそれだけのために、たつたそれだけのために彼女の肉体から魂を抜き取り、あまつさえ肉体を氷漬けにしたのか。

怒りに身を任せゲイルは暴れる。枷が肉に食い込むのを無視し、我を忘れて暴れる。だが硬化テクタイト製の枷は、たとえ重機を使おうともびくともしない代物なのだ。

びし、とゲイルの両腕を拘束していた枷にビビが入る。次に両足、腰、首の枷にも次々と亀裂が入った。

「殺してやるッ！」

呪詛のような氣合とともに、遂にゲイルを繋いでいた枷が砕け散つた。背筋の力だけで天井まで飛び上がったゲイルは、身を翻して両足で天井を蹴る。

有機ELの天井に大穴が開く。天井を蹴つた勢いで、ゲイルはダラズに向かつて飛んだ。

「死ねえつ！」

必殺の念を込め、ゲイルは男に拳を振るう。硬化テクタイトをも引きちぎる筋力で振るわれた拳は、ダラズを原型留めぬ肉塊に変えようと襲いかかる。

「ぐあ……っ！」

突如、ゲイルの頭に激痛が走る。脳に直接溶けた鉄を流し込まれたような痛みにバランスを崩し、ダラズの側に転げ落ちた。

「あ……頭が、割れる……」

床で頭を抱えて悶絶するゲイルの顔を、ダラズが踏みつける。

「阿呆かお前は？ 銃にだつて安全装置があるだろ。お前のような凶悪なケダモノを、何の躊躇もせずに野放しにするตでも思つたか？」

ダラズは何度も足を捻り、ゲイルの顔を靴底で踏みにじる。

「お前があいたをしないように、頭の中を少々いじらせてもらつた。宇宙連邦治安維持局　いや、この私に邪な考えを抱くだけで、脳に激痛が走るようにな」

顔を踏む男の足よりも、脳を直接襲う激痛にゲイルは悶える。いかに強靭な肉体であるうと、脳を焼き焦がす内部からの苦痛には抗いようがない。

「あの女を生かすも殺すも、すべて私の気分一つだ。恋人が大事なら、大人しく私に従い手足となれ。そしてもつと私を出世させろ」痛みが増し、気が遠くなる。薄れゆく意識の中で、ゲイルは恋人の名を呴ぐ。だがその声は、ダラズの笑い声によつてかき消された。

「ゲイル、起きてください。ゲイル」

相棒の呼ぶ声で、ゲイルは目を覚ました。納屋の中は、まだ暗い。部窓から覗く夜空には、まだ星が輝いている。

「何だよサム……もう朝メシか？」

「通信が入りました」

まだ眠気が覚めないゲイルは、欠伸をしながら目をこする。夢見が悪かつたせいか、やけに喉が渴いていた。

「通信？ 定期報告はまだのはずだろ？」

「とにかく応答してください」

出します、とサムの両目が光ると、納屋の暗闇に一人の男性の姿が現れた。ホログラフ立体映像だ。

「貴様ら、仕事は万事順調か？」

通信相手の姿を見た瞬間、ゲイルは露骨に嫌な顔をして舌打ちをする。

「いつたい何時だと思ってるんだよ。今が朝に見えるようなら、眼鏡と時計を買い換えるんだなクソ野郎」

頭をかきながら、ゲイルは男に向かって悪態をつく。だが男は冷笑を浮かべるだけで、まるで気にした様子はなかつた。

「相変わらず口の利き方がなつてないな。ダラズ・ウェストパック特務捜査課長殿と呼べ」

「フン、誰のお陰で課長になれたと思つてやがる。お前が昇進できるのは、俺たち特務捜査官が挙げた功績を掠め取つてるからだろ」

「飼い犬が獲つて来た獲物を、主人が食つて何が悪い。貴様ら犬は黙つて私のために狩りをすれば良いのだ。それとも、恋人がどうなつても構わないのか？」

爬虫類じみた笑みを浮かべ、ダラズは片手で眼鏡の位置を正す。薄い色のついたレンズの奥の眼光は、彼が冗談や脅しで言つている

のではない事を証明している。

「てめえ……。ぐつ……」

ゲイルは敵意を剥き出しにするが、すぐに苦痛で顔を歪める。ダラズに怒りを覚えるだけで、脳に肅清の痛みが走るのだ。

「どうした？ また良からぬ事を考えたか？ 犬でも痛みを『え続ければ従順になる』というのに、貴様はいつまで経つても学習しないな。この犬以下め」

嘲笑するダラズの声が、ゲイルの痛みを増加させる。ダラズへの怒りの炎が燃えるほど、熱く脳を焼かれる。だがゲイルはダラズを憎む事をやめない。痛みに屈して服従するくらいなら、脳を焼かれて発狂する事を選ぶだろう。だがそれはできない事だ。

「まるで狂犬の目だな。噛みつきたくてウズウズしているようだ」

「よく解かつてゐじやねえか。それが立体映像じやなかつたら、今すぐ噛み殺してやるんだがな」

痛みを抑え込み、ゲイルはにやりと笑つて骨すら噛み碎く歯を見せつける。威嚇するようにがちがちと鳴らすと、完璧に安全だと判つているダラズですら、僅かにたじろいだ。

「無駄話はこれくらいにして、そろそろ本題に入つていただけませんか。ダラズ・ウェストパック課長殿」

「む……そ、そうだな……」

サムの言葉に、ダラズは冷静さを取り戻す。気を落ち着けるように眼鏡を正すと、先ほどまでの怯えた様子はどこにもなかった。

「それで、どういったご用件でしょうか？ 定期報告はまだだと思いますが」

「なに、キャサリンが稼動したのをこちらで確認したのでね。その理由を問い合わせに来たのだよ」

「チ、いちいち小言を言いにきやがつて。お前は小姑か」

「ゲイル、経費は無限じゃないのだよ。あれを稼動させるのにいつたいどれくらいのエネルギーを必要とするのか、知つてて言っているのかね？ 私が納得できる理由があるのなら、言ってみたまえ」

「私が報告します」と、サムが片手を上げる。

「我々は標的の位置を特定するサンプルを入手しました。そのデータを元に惑星全域をサーチする事で、検査の時間が短縮され、結果的に経費節約になると判断したのです」

ゲイルはポーチを探ると、蟻頭から抜き出した核を取り出した。

「こいつがそのサンプルだ」

ダラズはゲイルの手の上で光る核を見て、ふむと頷く。ぶつぶつと何か小声で呟いているのは、頭の中でソロバンを高速で弾いているのだろう。経費はかかるが短期間で検査を終えるのと、経費を安く抑えても検査が長引くのでは、どちらが自分の評価に良いか。ダラズは耳から煙が出そうな集中力で演算する。

「……まあ今回は大目に見てやる。ただし、今回だけだぞ。経費に見合った結果が出せなかつた時は、覚悟しておけ」

捨て台詞を残し、ダラズの姿は搔き消えた。どうやら彼の弾いたソロバンは、サムの判断を是としたようだ。

サムの両目から光りが消えると、納屋に再び暗闇が訪れる。部窓から入る僅かな星明かりだけが、うつすらと中のがらくたを浮かび上がらせていた。

「フン、覚悟するのはてめえだ

ゲイルはダラズが立っていた場所に唾を吐く。立体映像だろうが、彼が立っていたというだけでその地面が汚染されたかのような反応だ。

「管理職というのは、経費や部下の事で頭を悩ませるのが仕事ですからね」

「フン。あんな奴、上司でも何でもねえ。ただの敵だ」

「気持ちは解かりますが、彼しかキヤサリンを助けられないという事を忘れないでくださいね」

「わあつてるよ。それに、俺たちは直接あいつを攻撃できない。何とか上手い手を考えないとな……」

う、と眉間に皺を寄せるゲイル。だがそれは知恵を絞つて考えて

いるせいではない。恋人を奪つた憎き相手に怒りを覚えるだけで、彼の脳には耐え難い苦痛が走るのだ。だがその痛みが脳改造手術の後遺症で記憶障害を持つ彼に、キヤサリンを助けたいという思いと、ダラズたちを憎む気持ちを深く刻み込んでくれるのだ。

だから彼は、この脳が焼け付く痛みをあえて受ける。この思いを決して忘れないように。

「幸い、我々には時間だけはあります。焦らずにじっくりと策を練りましょう」

「……そうだな。こればっかりは焦りは禁物だ。失敗は許されないからな」

ダラズ一人を殺すくらいなら、方法などいくらでもあるだろ？。だが冷凍刑にされたキヤサリンを解凍し、精神を電腦から肉体に再移植する権限を持つダラズにとって、彼女は人質というよりは保険だ。無論、ダラズもそれを計算に入れているはずである。

苛立つ気持ちを抑えつつ、ゲイルは再び横になる。今度は目が冴えて、なかなか寝付けなかつた。

翌朝、サーチャが勢い良く納屋の扉を開けると、ゲイルの奇妙な姿に意表を衝かれた。

「きやあつ！」

驚いて悲鳴を上げる。それもそのはず、ゲイルは目を開けて眠っていたのだ。しかも手足が全てばらばらの方向を向いている。いつたいどういう寝方をすれば、こんな格好になるのか見当もつかない。寝相が悪いことこのレヴェルを遙かに超えていた。

「おはようございます、サーチャ」

「お、おはようサム……」

「どうかしましたか？ 顔がひきつりますよ？」

朝から珍妙なものを見たとこ、顔をするサーチャに、サムが体育座りのまま訊ねる。サーチャは、こんな格好をして寝ている奴の隣にいて平気なサムのほうがどうかしていると思った。

「あ、あのセサム。こいつって、いつもこんなに寝相が悪いの？」
サーチャの問いかけに、サムはふむ、と改めて相棒の寝姿を見る。

「今日はいくらかマシなほうですね。酷い時には三點倒立をしていたりしますから」

「どうこう寝返りを打つたら、そんな体勢になるのよ……」

「さて……私には答えかねます」とサムは小首をかしげた。

見ればゲイルはレム睡眠中なのか、眼球がぴくぴく動いていた。
痙攣するような黒目の振動に、サーチャは「ひいっ」と小さく悲鳴を上げる。

「ああもう、気持ち悪い！」

あまりの氣味の悪さに、サーチャはゲイルの毛布を引っぺがす。
ゲイルは「ごんごん」と床を寝転がると、壁に勢い良く顔面からぶち当たる。

「…………」

「ほら、いつまで寝てるの？ もうお天道様はとっくに昇つてるわよ！」

サー・シャが腰に手を当てて怒ると、ゲイルは勢い良く起き上がった。

「何て起こし方しやがる。お前は俺の幼馴染か？」

「なにワケのわからない事言つてるので。さっさと起きないあんたが悪いのよ」

打ち付けた鼻をさすつて喚くゲイルを軽くあしらい、サー・シャはすました顔で毛布を置む。態度の悪い客の扱いに慣れた旅館の女将のようだ。

「朝ごはんが片付かないから、早く顔洗つてきてよね」

「朝メシか……。フン、今日はこのくらいで勘弁してやろう」

鼻を鳴らすと、ゲイルは意味不明な捨て台詞を残して納屋から出た。井戸を使って水を汲み、顔を洗う。

「ゲイルの扱いかたを心得てますね。お見事です」

「馬鹿は扱うのが簡単で助かるわ」

サー・シャは得意げに胸を反らすが、ふとサムの鎧姿を見て僅かに眉をひそめた。

「……あなた、もしかしてその格好で寝てたの？」

「同じ姿勢という意味でなら肯定ですが、睡眠という部分は否定します」

体育座りのまま、しつと答えるサム。そういう意味で訊いたわけではないのだが、あまり深く追求してはいけないような気がしたので、サー・シャは「ふ、ふうん……」と微妙な相槌を打つにとどめた。

朝食が済むと、サー・シャはゲイルとサムを連れて村を案内した。

村には大小様々な家が建ち並んでいる。人口はせいぜい三百人といつたところか。家と家の間隔がまちまちなのは、あちこちに置かれてある岩を避けて建てられているせいだろう。天気のいい朝なので、

庭には干された洗濯物が見える。

村人の多くは朝日とともに農地に赴き、外を歩いているのは散歩をする老人か遊んでいる子供だけだった。サー・シャを目にすると挨拶をしようとするが、ゲイルとサムの姿を見ると皆一様に不審な顔をする。老人は精一杯の早足で家に帰り、子供たちはサムの巨大さに目を丸くする。

「みんなサムを珍獸みたいな目で見て『行くぜ』

村人の反応を、面白そうに笑うゲイル。

「あんたも珍獸の仲間じゃない」

「失礼な事を言つたな」

「なに『心外だ』みたいな顔してるのよ。存在そのものが失礼な珍獸のくせに」

「そう……なのか……」

地面上にがつくりと膝をつくゲイルを無視し、サー・シャとサムは歩き出した。

奇妙な事に、村には若者の姿がまるでない。仕事に出かけている事を差し引いても、異常と思えるくらい目にする事がまったくなかつた。

「今はみんな、見回りに出ているのよ」

ゲイルの疑問に、サー・シャが答える。村の若い男は全員自警団に身を置き、この時間は村の近隣を見回っているのだそうだ。男が村を守っている間、女は田畠を耕す。怪物が出没し始めてからのシステムらしい。

「とは言つても、今まで一度も怪物を退治した事ないんだけどね」

「そりや素人の寄せ集めじゃあな」

「刈り入れの時期だけは、人手が必要だから見回りも減るんだけど、それ以外はいつも見回りや訓練ばかりやつてるわ」

兵隊にでもなつたつもりなのかしら、とサー・シャは愚痴を漏らす。どうして男という生き物は、いくつになつても戦争や兵隊に子供っぽい憧れを抱くのだろう。理解に苦しむ。兵として戦に出れば、死

ぬかもしれないのだ。

サー・シャは父の事を思い出すと、今でも胸が痛くなる。祖父も母も、きっとそうだろう。

「おい、どうした?」

ゲイルに声をかけられ、サー・シャはほつと顔を上げる。いつの間にか俯いて歩いていたようだ。

「別に。何でもないわ」

「そうか? 前を向いて歩かないと、躊躇して転ぶぞ」

「なによ、子供扱いしないでよ」

「すまん、悪かった」

思いがけずゲイルが素直に謝ったので、サー・シャは強く言つてしまつた事を後悔した。

「え、いや、その……」

考えてみれば、これまでゲイルへの態度が少しきつかつたように思える。助けてもらつたお礼もまだはつきりと言つていなし、このままざるすると引き延ばしにするのは気分が悪い。やはりけじめはきちんとつけておかなければ。

「あ、あのね……今さらだけど、助けてくれて」

「胸がまつたいらだから、ガキかと思つちましたよ。紛らわしいんで今度から、年齢と?」つちが胸です?つて書いた札を首から下げしてくれ

両手を叩いて大笑いするゲイル。最初に出会った時、彼を物語の勇者と思い込んだのは絶対に氣の迷いだったのだ。心の中で昨日の自分を叱りつつ、サー・シャはゲイルの尻に容赦のない蹴りを入れた。

村の中央に来ると、ちらほらと店が見え始めた。町とまでは言わないが、そこそこの数の店が並んでいる。そもそも、食料はほぼ自給自足している。だから必然的に農具を直す鍛冶屋や金物屋、布屋や仕立て屋など生活に密着した専門店が田に付く。

「フン、生意気に貨幣が流通してやがる」

「ん？ 何か言つた？」

「いや、別に。ところで、あれは何だ？」

ゲイルは、少し離れた小高い丘を指差した。丘の上には丸太で組んだ格子状の柵が建てられ、中には巨大な黒い岩が納まっている。丘は勾配の差が激しく、村の近くは緩やかだが、中ごろになると急激に高くなっている。

岩の向こうには林があり、木のてっぺんが見えた。木の高さから想像すると、岩はとんでもない大きさだった。

「あの大岩はね、昔からこの村にあったの。なんか大昔、火山が噴火した時に降ってきたんだって」

「随分大きい岩ですね。あの火山からここまで飛んで来たのですか？」

「そうよ。村にある岩は、全部その時に降ってきたものらしいわ」「そういうえば、村のあちこちに岩が置かれてましたが、そういう事ですか」

三人の立っている場所からでも、岩の大きさや重さが見てとれる。近くで見れば圧倒されるだろう。岩の放つ存在感が、当時の噴火の凄まじさを物語っている。

「森の怪物の倍以上はデカいな。もししあれが村に転がって来たら、大惨事だろうぜ」

「ゲイル、冗談でも不謹慎ですよ」

「冗談めかして笑うゲイルを、サムが注意する。

「大丈夫よ。ああやつて困いをしてあるし、最近何度も地震があつたけど、びくともしなかつたんだから」

「しかし、万が一という事が」

突然サムが黙る。直後、地面が揺れ始め、あたかもゲイルの冗談が現実になつたかと思われた。

「うおっ、マジかよ？」

「やだ。あんたが不吉な事を言つからよ…」

「俺のせいいか？ 俺は預言者か？」

「二人とも落ち着いてください」

揺れはそれほど大きくなかつたが、用心のために商店から店主や客が外に出てくる。道を歩く人たちも、慌てず騒がず地面に伏せたりそれぞれ避難行動をとつていた。

地震は一分ほど続いた。揺れが完全に止ると、人々は何事もなかつたように店に戻つたり散歩の続きを再開する。

「……やつと止まつたか」

地面に伏せた状態で、ゲイルは辺りを見回す。他の人々は皆もとの日常に戻つており、地面に伏せているのは彼らだけであった。

「やれやれ、みんな慣れたもんだな」

ゲイルとサー・シャは、手や服についた土を払いながら立ち上がる。

「良かつた、小さくて。それじゃ、次に行きましょう」

「ああ、とつとと済ませてメシにしようぜ。俺ハラ減つちまつたよ」

「あれだけ朝ごはん食べて、まだ食べるつもりなの？」

「あれ？ 僕朝メシ食つたっけ？」

「あんた胃と脳ミソに穴が開いてるんじゃないの……？」

漫才のようなやりとりをしながら、一人は並んで歩き出す。ゲイルが後ろを振り返ると、サムはまだしゃがみ込んで両手を地面に着けていた。

「どうしたサム。腰が抜けたか？」

「いえ、少し気になる事が……」

「早く来い。置いて行くぞ」

「あ……」

サムが言い終わる前に、ゲイルは背を向けた。サー・シャは立ち上がりないサムを心配そうに見ていく。サムは数瞬考えて、結局何も言わずに立ち上がった。

太陽が高くなり、陽射しが強さを増す。初夏の田畠を撫でる風は、青々とした臭いをふんだんに孕んでおり、鼻腔いっぱいに広がる草の臭いは、森で感じたそれよりも乾いていて心地良い。

三人が風に吹かれてあぜ道を歩いていると、畑で作業をしている人々が見えた。

人々は額に汗を滲ませながらも、実に楽しそうな顔で働いていた。見回りや訓練が終わつたのか、男たちの姿も見受けられる。サーシャは作業をしている人に逐一声をかけて回り、先の地震でケガをしていないか、ケガをした人はいかないか訊ねて回つた。

そのうち年配のご婦人たちに囲まれ、今度はサーシャが質問される側になつた。ご婦人たちがちらちらとゲイルたちを盗み見るたびに、サーシャは真っ赤になつて両手を振つていた。

「彼女は善い子ですね。ご近所の人気者といった感じでしょうか？」

「フン、ただのお調子者だろ。あの凶暴さは看板娘つてガラジやねえぞ」

ゲイルはサーシャに蹴られた尻をさする。素人とは思えない綺麗なフォームで入つた中段蹴りは、的確にゲイルの尾てい骨にヒットしていた。ダメージの軽減される尻肉を狙わないところに、天性の素質を感じる。

「それはゲイルが彼女の嫌がる事を言つからでしょう。身体的特徴を侮辱されれば、誰だつて怒りますよ」

「けどよお……」

反論しようとしたゲイルに、誰かが「おい」と声をかけた。

声の主を見ると、グレンが数人の若い男たちを連れて前に立つていた。総数五人。その全員が手にそれぞれ武器を持っていた。どう

やら見回つの帰りのようだ。

グレンは愛用の釘バットを肩に担ぎ、いかにも威嚇するような顔で立っている。その後ろに立つ他の連中は、サムの巨体見るのが初めてなのか、驚きを隠せていなかつた。

「うちのじじいから話は聞いたぜ。あんたら、この村の用心棒になつたんだって？」

「耳が早いな。ま、そういう事なんで、ガキは大人しく家の手伝いでもしてろ」

「何だとテメエ！」

「よせ。手を出すな」

ゲイルの挑発に腹を立てた若者を、グレンが片手を出して抑える。

「今日は挨拶だけだがいいか、よおく覚えておけ。この村は俺たちの村だ。俺たちが守る。よそ者のあんたらはすつこんでな」
行くぞ、と他の連中に声をかけ、グレンは踵を返した。他の若者たちは、大将があつさり引き上げた事に不満顔だったが、すぐに彼の後を追つた。

「何がありや？ チンピラと大差ないな」

「若さゆえでしょう。温かく見守つてあげましょ」

「俺はあいつらの保護者か？ 冗談じゃない。ガキのお守りなんてまつぴら」免だ」

ゲイルが肩をすくめていると、グレンが引き返して來た。何となくばつが悪そうな顔をしている。

「どうした。道に迷つたのか？」

「ンなわけあるか！ 言い忘れた事があつたんだよ

そう言つとグレンは、咳払いを一つ挟む。言い難そうに口を開きよろきよろさせたり、口をむにむに動かしたりと明らかに拳動不審だ。

「おい、用があるならさつさと言えよ

「うつせえ。えつと……お前、その……昨日はサー・シャの家に泊まつたんだよな……？」

「それがどうした？」

「お前……サー・シャに何もしてねえだらうな?」「……はあ?」

「サー・シャに手え出したら、ぶつ殺すからな」

恥ずかしさを堪え精一杯強がる姿に、ゲイルは思わず吹き出した。

「ぶわっはっはっは。お前、あいつの事が好きなのか?」

「わ、笑うな! それより、何もしてねえだらうな!」

「するか! あんな貧乳、俺の趣味じゃねえよ。それに俺たちは納屋に寝泊りしてるから、余計な心配すんな」

「そうか……。ならいいんだ」

「しかし、ぶふつ……お前がねえ。あいつを……」

全身の筋肉を隆起させて赤面しているグレンの姿に、ゲイルは再び笑いが込み上がる。

「あんな奴のどこがいいのか俺にはまったくもって解からないが、お前もいい趣味してるぜ」

「うるさい! とにかく話はそれだけだ。あと、この事はサー・シャには絶対言うなよ」

「へえへえ。解かつたから、とっとと帰つて釘バットの手入れでもして」

手をひらひらと振るゲイルに、グレンは何か言いたそうな素振りを見せるが、結局「チツ」と舌打ちを残して仲間の所に戻つた。

「見てて微笑ましいほど青春してますね」

「だがあいつも苦労するぜ。なんたつて惚れた相手があいつだからな」

「そりでしうか? 彼女の器量なら彼を尻に敷いて上手く扱うでしょ?」

「? 胸の薄い女は幸も薄い? って言つだろ」

「……その返言は誰が言つたんですか?」

「俺だつ」

ゲイルは得意げに親指で自分を指差す。サムが呆れるのを通り越してフリーズしていると、ようやく「婦人方から解放されたサー・シ

ヤが戻ってきた。

「やれやれ……お待たせ。ねえ、グレンと何を話してたの？」

「いや、大した話じやない。それよりぼちぼち帰ろうぜ」

「腹が減つたって言いたいんでしょ？ もう、あんたつてワンパ
ターンなのよ」

「いいものはいつまでも変わらないんだよ」

「馬鹿は死ななきや治らない、とも言つわね」

ゲイルとサー・シャが額を突きつけあつて睨み合つていると、突然
サムが一人の頭を抑え込んだ。

「皆さん、伏せてください！」

直後、轟音とともに大地が波打つた。人々は、いとも簡単に地面
に投げ出される。

地震はさつきとは比べ物にならないほど強く、長く続いた。その
間人々は悲鳴や叫び声を上げながら、ただ地面にしがみつく事しか
できなかつた。

天変地異かと思われるほどの揺れが治まるど、ようやく人々の間に安堵の声が漏れ始めた。地面を転がつて草まみれになつた人。強く地面にしがみついていたために、顔や体中に泥がついた人。皆自分たちの現状を気にする余裕などなく、近くの者と無事を喜び合つ事に夢中になつてゐる。

「クソッ、さつき地震があつたばかりだつてのに、何だつてこんなに早く次が来るんだ！」

ゲイルが忌々しげに立ち上がると、服についた土がぱらぱらと落ちる。

「あれば前震です。恐らく、これまでにあつた地震もこれの前触れのようなものでしよう」

「つて事は余震もあるのか？『冗談じやないぜ』

「それより被害は？ ケガ人が出ているかも知れないじゃない！ ああもう、薬箱を持つてくれば良かつた……」

「サム、余震がいつ来るか判るか？」

「データが少な過ぎて予測不可能です。先ほどは、一瞬早く足の裏のセンサーがP波をキャッチできましたが、直下型の地震だとそれも間に合いません」

「チツ、未開惑星はこれだから困る。せめて震源地くらいは特定できないのか？」

「それならば可能です」

サムが太い指で村の外を示す。

「火山か……。妥当過ぎる場所だぜ」

「震源地はあの火山の麓、地下千メートル以内でしょう。これ以上精密な計測は、私のセンサーでは困難です」

「いや、それだけ判れば上等だ。噴火の兆候は無いな？」

「残念ながらそれもデータ不足です。ですが、火山内部には大し

た乱れを感じられません」

「断定はできないが、とりあえず今すぐ噴火するつてわけじゃないんだな？」

「肯定です。ですが次にもつと大きな規模の地震が起これば、あるいは……」

「やれやれ……化け物の次は火山か。難儀な村だぜ」

ゲイルは頭を搔き龜る。一人が密談している間にも、サー・シャは人々の間を走り回り、できる限りの治療を施している。幸いかすり傷程度のケガばかりで、重傷者はこの場にいなかつた。耕地で土が軟らかいのが良かつたのだろう。

「あたし、村の様子を見てくる！」

一通り治療を終えたサー・シャは、居ても立つてもいられなくなり、居住区に向かつて駆け出す。だが彼女の向かうその先から、一人の若者が走ってきた。

「グレン？」

グレンは息を切らせ、サー・シャの許へ駆け寄る。恐らく全速力でここまで走ってきたのだろう。汗を滝のように流し、息切れで何を言つているのか判らない。きっと「サー・シャ、無事だつたのか」とでも言つているのだろう。地震の際取り落としたのか、愛用の釘バットは手にしていなかつた。それよりも、まず彼女の許へ馳せ参じたのだろう。

「馬鹿！ 何であたしなんかを探し回つてるのよ。あんた自警団のリーダーでしょ？ こういう時こそしつかり仕事しなさいよ！」

「し、しかし……俺はお前が心配で……」

「子供じやないんだから、いちいち心配しないでつて言つてるでしょ！ それともあんた、あたしが独りでは何もできないつて思つてるんじゃないでしょうか？」

サー・シャの剣幕にグレンはたじろぐ。グレンは自分の愛が溢れる行動で、サー・シャが感動して抱きついてくる妄想でもしていたのだろうか。だが現実は厳しく、むしろ彼女を激昂させていく。

「彼、わかつてませんね。色々と」

「幼馴染のくせに、まだあいつの性格が解かつてねえのかよ……。見てて可哀相になつてくるぜ」

「泣けますね。涙は出ませんが

ゲイルとサムが一人のやり取りを見物していると、大変だという叫び声が聞こえた。見ると、居住区のほうから若い男が一人、こちらにやつてくる。

「グレン、こんな所にいたのか！」

青年は一目散にグレンに駆け寄る。ここに走つてきた時のグレンよりも汗を流し、肩で息をしている。

「おい、どうした？」

青年の必死の形相に、グレンがただ事でない事を察する。喘ぐようにはかを伝えようとする青年の肩を、グレンが乱暴に両手で掴んだ。

「大変だ。岩が……大岩の足元が地震で崩れ、今にも転がり落ちそなんだ！」

「何だつて……！」

大岩は、確かに頑丈な柵で囲まれていた。だが土台となる地面が崩れてしまつては元も子もない。あれだけ巨大な岩が村に転がり落ちたら、どれだけの被害がでるか予想もつかない。

「急いで行つてくれ。今他の連中が柵の補強に当たつている。俺はもつと人手を集めてくるから、グレンはみんなの指揮を頼んだぞ！」

「あ、おい……！」

青年はそう言つと、震える足を再び動かして走り出した。

「サー・シャは万が一に備えて、村のみんなに避難するように伝えてくれ」

「わ、わかつた……。あんたはどうするのよ？」

「俺はみんなを指揮しなきやならない。それより早く、みんなにこの事を伝えるんだ」

サー・シャは神妙に頷く。グレンは次に、ゲイルたちの方へ向き直つた。

「あんたたちも手を貸してくれ。人手が足りないんだ」

「何で俺が手伝わなきゃならないんだよ？」

「何でもクソもあるか！　あんた村の用心棒だろ？　村を守るのに手を貸してくれよ！」

「ゲイルお願い。みんなを手伝つてあげて」

「人はすぐるような顔で、ゲイルに頼み込む。だがゲイルはそ知らぬ顔をするだけだ。

「俺が頼まれたのは、化け物から村を守る事だけだ。岩は契約にない」

「何だとテメエ、屁理屈こねやがつて。それでも人間か？」

非情な態度に、とうとうグレンが我慢の限界を超える。力任せに胸座を掴み上げるが、ゲイルの態度に変わりはない。

「そんな大人げない……。手伝つてあげましょうよ」

相棒が提案しても、ゲイルは一向に首を縦に振らない。こうしている間にも、村の危機は刻一刻と迫つている。

「クソッ、もう頼まねえよ！」

とうとう痺れを切らし、グレンは掴んでいたゲイルの胸座を乱暴に離す。憎しみすら籠つた一警をくれると、大岩へと向かつて走つて行つた。

「フン、人をあてにするな。自分の村くらい自分でまも」

乾いた音がゲイルの頬から鳴る。サー・シャが力一杯ゲイルを叩いていた。

「何すんだよ？」

サー・シャは無言だつた。大きな目につぱい涙を浮かべ、悔しそうに歯を食いしばり、今にも泣き出しそうな顔でゲイルを睨んでいる。

「あんた……最っ低の人間だわ」

「だからどうした。俺は都合のいいヒーローじゃない」

「だから手を貸さないって言うの？ あんたって血も涙もない人ね」

「そんなもん、とつぐの昔にねえよ」

「馬鹿っ！」と大声で言い残して、サーチャは居住区へと駆けていった。後に残されたのはゲイルと、相棒に無機質な視線を注ぐサムだけだ。

「……何だよ？ 言いたい事があるなら言えよ」

「余計な事に関わっている余裕などないことは、私だつて解かっています。ですが困っている人を助けられるだけの力を持っているのに、どうしてそれを使わないのですか？ 他人を見捨てても、恋人を助けたいのですか？」

「…………」

「今の貴方を見たら、キヤサリンは悲しむでしょうね……」

言い終わるとサムは、ゲイルに背中を向ける。巨体を揺らし歩き出す相棒に、ゲイルは驚いて声をかけた。

「おい、どこへ行くんだよ？」

「彼らを手伝いに行きます。貴方はどうぞ、そこで日向ぼっこでもしていてください」

「おいおい冗談だろ？ ちょっと待てよ！」

何度ゲイルが呼んでも、サムは振り返る事はなかつた。やがて完全に見えなくなる。相棒に見捨てられたゲイルは、独り取り残された。

「クソッ、勝手にしろ！」

言いようのない苛立ちに、ゲイルは足元にあつた石を思い切り蹴る。

石は、村の遙か外まで飛んで行つて見えなくなつた。

村の男たちは老若を問わず、今にも倒れそうな大岩を相手に奮闘していた。

「じつそりと沈下した岩の足元へ、次々と土が投げ込まれる。岩に綱をかけ数人で引っ張っているが、それもどれだけ効果があるか。それだけ巨大な岩が、今まさに村に向かつて転がり落ちんとしている。誰もが死に物狂いになっていた。

綱を引く連中の中に、グレンの姿があつた。掛け声をかけては指示を出し、指示を出しては掛け声をかける。彼の声に合わせて皆が綱を引くが、岩はびくともせすむしろ徐々に倒れようとしている。

「みんな頑張れ！」ここで踏ん張らなきゃ、俺たちの村がペしゃんこになるんだぞ！」

喉が張り裂けんばかりに叫ぶグレン。皆もそれに応じて掛け声をかけ、綱を引く腕に力を込める。

彼らの手は擦り切れ、綱を赤く染めていた。それでも彼らは綱を引く手を緩めない。そうでないと自分たちの住む家が、家族が、生まれ故郷がどんな事になるか想像がつくからだ。その恐怖が、彼らに綱を引く力を与える。

男たちは必死で綱を引いた。だが無情にも岩はぐいぐいと男たちを引きずる。

もう駄目だ　誰もがそう思いかけた時、急に綱が軽くなった。岩が転がったかと思いきや、そうではなかつた。

「あ、あんた、来てくれたのか！」

グレンが歓喜の声を上げる。

「今のうちに岩の下に土を詰めてください」

サムだ。サムは数本の綱を両手で持ち、一十メートルはゆうにある岩が倒れるのをぴたりと止めていた。

サムは村の男たち全員を集めた以上の力で岩を引いてくれた。おかげで岩が倒れるのが止まり、このまま土を詰め込めば岩は安定するかと思われた。

だが

ばつん、という音がして、岩にかけていた綱が千切れ。一本が切れるごとに、ばつんばつんと連鎖的に他の綱も切れ、遂に岩はもう止められないくらい傾いた。

「倒れるぞ。みんな逃げろおつ！」

グレンの叫び声に、岩の前で土を盛っていた男たちが一斉に逃げ出す。蜘蛛の子を散らすように男たちが逃げると、岩が倒れて柵を打ち壊した。

ばらばらになつた柵の破片が辺りに飛ぶ。逃げた男たちは、悲鳴を上げながらそれらからも逃げる。頭を抱えて逃げ惑う男のすぐ側に丸太が突き刺さつた。

巨岩が丘を転がり始め、男たちの顔に絶望が浮かぶ。家族はもう避難しちゃうか。せめて自分の家を避けて転がってくれ。様々な想いや願いが浮かんだが、口から出たのは「もうおしまいだ」という言葉だった。

だがグレンは見た。転がる岩の前に立つ男を。そんな馬鹿な。馬鹿かあいつは。馬鹿だろ？ 男は逃げも恐れもせず、仏頂面で立っていた。

「何やつてんだ！ 早く逃げろ！」

グレンは叫ぶ。だが男はまるで聞いちゃいない。拳を握り、まるでその拳で岩を碎かんとばかりに構える。

「馬鹿野郎！ 無茶だ。やめろ！」

男はグレンの声に、初めて反応した。

「馬鹿だと？ 誰に向かつて言つてやがる」

「お前だよお前。死にたいのか！」

「フン、この程度で死にやあしねえよ。それよりこいつはサービ

スだ。釣りはいらねえから取つとけよ！」

男はにやりと笑うと、大岩に直ら向かって行つた。

「砕けろおおおおおおおおおおお！」

気合とともに、男が岩に拳を打ち込む。

火山が噴火したような轟音に、一瞬岩が破壊された錯覚する。だがみな男が岩の下敷きになつたと確信していた。

「な……何い……」

誰かが驚きの声を漏らす。

「嘘だ、ろ……？」

信じられないものを見た。そんな顔がずらりと並んでいた。あの大岩が、ぴたりと止まっている。そんなはずがあるわけがない。

「かつてえ……。さすがにこれだけデカいと一発じやぶつ壊せねえな」

岩の陰から男の声が聞こえる。幻聴 否、それは明らかにあの男の声。

踏み込んだ足は膝まで埋まり、打ち込んだ拳は肩まで岩に突き刺さっている。だがそれでも岩は砕けない。膨大な重量が男にかかり、足がさらに埋まる。このままでは、男が岩に押し潰されるは明らかだ。

「サム、ぼくと見てないで手伝え！」

男が声をかけると、丘の上から銀の鎧を身にまとつた、二メートルの巨体が現れた。

鎧が男の姿を認めた時、鉄仮面から空気が漏れる。それはゲイルがいつもやる「フン」という鼻で笑うよつな空気の音だった。

「やはり来てくれましたか、ゲイル」

「フン、別に気が咎めたから来たんじゃねえぞ。村がぶつ壊れたら、美味しいメシが食えなくなるから来ただけだからな！」

「素直じゃないですね。実に貴方らしい」

「う、うるせえ！ 無駄口叩いてないで、さつさとこっちに来い。一人でやるぞ！」

「了解しました」

相棒の許へ駆け出すサム。仮面のよつや顔は、嬉しそうに笑つて
いるようだつた。

巨体とは思えない速度で、サムは丘を下る。

「サム、岩の固有振動数をサーチ。次に岩の中核を割り出せ！」

「了解」

走りながら、サムは命令を実行する。

「終了。目標の固有振動数、及び中核座標を共有」

ゲイルは岩から腕を抜くと、体全体を使って岩を受け止める。岩に抱きついた瞬間、足が太ももまで地面に埋まる。

すぐさまサムがゲイルの反対側から岩に抱きつき、一人で岩を挟みこむ。

「どおおおおおおおりやああああっ！」

ゲイルの掛け声とともに、一人が全身の力を込める。サムの足も膝まで埋まつた。二人がさらに力を込めると、巨大な岩がゆっくりと地面から浮き上がつた。

どよめきが起つた。村の男たちが総出でも動かせなかつた大岩を、たつた一人で持ち上げたのだ。男たちは我を忘れ、異様な光景に見入つた。

「では始めましょう」

「応よ」

次の瞬間、大岩が空高く放り上げられる。舞い上がつた岩は、小石ほどの大きさに見えるほど高く投げられた。

続いて二人は両腕を胸の高さに掲げ、上下左右に振り始めた。

ぶらぶらと大きく振つていた腕の動きが次第に小さく細かくなり、ぶうんと虫の羽音のような音が腕から聞こえだした。

音はどんどん大きくなり、人々は羽虫の大群が現れたかのような騒音に耳を塞ぐ。音が大きくなるに比例して腕の振りが治まつていき、やがて完全に止まつた。いや、止まつたように見えるだけで、一人の腕は高速で振動していた。腕の振動が空気を震わせ、虫の羽

音のような音を生み出しているのだ。

「行くぞ、サム。遅れるなよ！」

「ご冗談を。一万分の一秒の誤差もなく合わせてみせますよ」

相棒の自信満々の返事に、ゲイルは不敵な笑みを漏らす。

「上等。それでこそ俺の相棒だ」

二人は領きあうと一斉に飛び上がった。一気に上空の岩まで追いつくと、対照的に構える。ゲイルは両手を開いて腰に当て、サムは両手を開いて肩の高さで。

「必殺、超振動挟撃！」
ハイブリードショックブレス

ゲイルが叫ぶのと、一人が両手を岩に打ち込むのは同時だった。サムの宣言通り、一万分の一秒の誤差もない。まさに完璧と言つていいほど同時に、二人の両手は大岩に叩き込まれた。

一人が放った衝撃波は、正確に岩の中心で重なった。二方向からの波動は確実に岩の芯を捉え、混ざり合つて増幅され岩全体に広がる。

一人が両手を岩から離すと落下が始まった。落ちる一人と巨岩。このまま落下すれば、一人が無事で済まないどころか、再び岩が転がつて村が大惨事になるだろう。

「お、落ちてくるぞおおおお！」

人々が悲鳴を上げて逃げ惑う。だが彼らの上に、岩は落ちてこなかつた。

軽やかに降り立つゲイルと、地響きを上げて着地するサム。それだけだ。頭を抱えてうずくまっていた人々が顔を上げると、顔や頭に小石が当たる。それは、粉々に砕けた岩の破片だった。跡形も無く砕けた岩は、小石や砂となつて雨のように降り注いだ。

魔法のように岩が消えた。そうではない。彼らが岩を粉微塵にしたのだ。そう人々が理解した時、人々に歓喜の声を上げ始めた。

「うおおおおお！ や、やりやがったあああああ！」

「助かった。村が……村が助かつたんだ！」

「すげえっ！ すげえよ、あんたたち！」

「一週間だなんてとんでもねえ。あなたたち、ずっとこの村に残つてくれよ！」

人々が駆け寄り、ゲイルとサムを取り囲む。その時誰かがグレンとぶつかって、彼は尻餅をついた。

ゲイルの肩に腕を回す者。サムの足に抱きつく者。両手を振り上げて、体で喜びを表す者。感極まって泣き出す者。男たちは、これ以上ないほどの感謝と賛辞を一人に注いだ。ただ一人、グレンだけが放心したように固まっていた。

「どうですゲイル。たまには自ら人助けをするのも悪くないでしょう？」

「フン……男に感謝されても嬉しくとも何ともねえよ」

親指で鼻をこすり、ゲイルは唇を尖らせる。だがすぐに唇の端が持ち上がり、照れ臭いような、それでいて喜ぶ彼らを見て嬉しいような笑みを作る。

「ですが

男たちはまだ騒いでいる。とんでもないものを見た興奮と、村の危機が去った喜びが、彼らを子供のようにはしゃがせていた。

「別に碎かなくても、あのまま岩を村の外に放り投げたら良かつたのではないか？」

「あ…………

あれだけ騒いでいた男たちが、ぴたりと静まる。祭りの如き狂乱が、サムの何気ない一言で完全に止まった。

ゲイルとサムがサー・シャの家に戻ると、家の外にまで人が溢れていた。みな地震でケガをした者たちだ。列の中では幼い子供を連れた母親が、すりむいた膝の痛みに泣いている子供をあやしながら順番を待っている。

「やはりあれだけの震度ですと、被害ゼロというわけにはいきませんね」

「そうだな、大盛況だな」

家の窓からは、リネアとサー・シャが田まぐるしく動き回っているのが見える。コードも病気の体を押して患者の治療をしていた。今は頭から血を流した老婆に包帯を巻いている。

さながら野戦病院だ。子供の泣き声。妻や夫、恋人の安否を気遣う声。救いの手を差し伸べるどころか、声すら聞こえない姿なき神へ祈る声。

誰もが救いを求めている。だがゲイルが与えられるものは何もない。怪物を倒し、大岩を碎く事はできても、目の前で泣いている子供の涙を止める事はできない。自分ができるのは、破壊しかないのだ。

人の枠を超える力を持つていながら、今の自分の無力さにゲイルはやりきれなくなる。ここには、自分のできる事が何一つない。

「行こう。俺たちがいても邪魔になるだけだ」

ここは自分がいってはいけない場所だ。そう思つて立ち去ろうとした時、窓越しにサー・シャと目が合つた。

「あ……」

サー・シャはすぐに目を反らす。それもそうだ。彼女はあれからずつとここでケガ人たちを治療していたのだから、ゲイルが岩を碎いた事を知らないはずだ。彼女の中では、ゲイルは薄情な最低野郎のままなのだ。だから、なおさらここには居られない。居たくない

た。

サー・シャの姿が窓から消える。ゲイルに構っている暇などないと
いう感じだ。それでいいとゲイルは思った。そんな暇があるなら、
一人でも多くのケガ人の治療に当たればいいと。

「行くぞ」

ゲイルは踵を返す。その背中に、誰かが声をかけた

「ちょっと、どこに行くのよ?」

振り返ると、息を切らしたサー・シャが立っていた。服の上に、大きな白い布袋を被っている。頭と腕を通す所に穴を開けただけの、簡素な白衣だつた。ところどころ、血や薬品で汚れている。きっと患者ごとに換える暇もないのだろう。

「……どこに行こうが俺の勝手だろ」

ゲイルはサー・シャと目を合わせない。そしてサー・シャもゲイルと目を合わせない。お互に気まずくて目を合わせられない、と言つたほうが正しいだろう。

沈黙は、そう長くは続かなかつた。

「ああ、もうっ!」

サー・シャはつかつかと早足で歩くと、ゲイルの手を取つた。そのまま否応なく家まで引っ張ろうとする。

「お、おい、何するんだよ?」

「人手が足りないんだから、あんたたちも手伝いなさいよ

「手伝えって言われても、ケガ人の治療なんてできないぞ」

「消毒用のお湯を沸かすくらいできるでしょ? うちでは『働くざる者、食つべからず』なの。だから、食べる分はきつちり働いてもらひからね!」

「何だよそれ? だいたいな、俺はしつかり働いてきたんだぞ」
サー・シャの足が止まる。つられてゲイルも立ち止まつた。ゲイルの手を掴むサー・シャの手に、わずかに力が入る。俯いたまま向けた

背中が、彼女の顔を隠していた。

「知ってるわよ……患者さんから聞いたもん。でも、あれはサー

ビスだつたんでしょう？ だつたらチャラよ、チャラ。わかつたらつべこべ言わずに働きなさい！」

肩を上下させるたびに、ゲイルの手も激しく振られた。すべてを吐き出すように言い終わると、ずっとゲイルに背中を向けたまま、上げっぱなしになっていた肩がゆっくりと下がっていく。

「口は災いの元ですね。自分でタダだと言つたのですから、彼女の言い分はもつともです」

ゲイルは力が抜けて項垂れると、空いたほうの手を額に当てる。

「やれやれ……。で、俺は何をすればいいんだ？」

額から手を離し、ゲイルはサー・シャに訊ねる。口ぶりはいつもの調子だが、表情はどこか観念したような、それでいてほつとしたような顔だった。

振り向いたサー・シャが、よじやくゲイルに顔を向ける。疲れているはずだが、それをまったく見せない晴れ晴れとした笑顔だった。

「じゃあ、ゲイルは井戸から水を汲んで来て。サムは……中に入れないから、外でじょんじょん薪を割つてちょうどいい」

速やかにサー・シャが指示を出すと、一人はそれぞれの持ち場についた。

「さあ、まだまだ患者さんが待つてゐるんだから、一人ともきびきび働いてね。お昼ご飯はそれからよ」

「へいへい」

「了解しました」

結局、すべての患者の治療が終わったのは夕方だったが、ゲイルは一度もサー・シャに空腹を訴えなかつた。

ゲイルとサムが大岩から村を救つたという話は、瞬く間に広がった。何しろ現場には村の男衆がほとんどいたのだ。彼ら全員が証人だと言つても過言ではない。その日の晩には、二人は村の有名人になつていた。

事件の翌日から、村人たちのゲイルたちへの態度ががらりと変わつた。何しろ村を救つた英雄である。彼らは進んで一人に声をかけ、礼とばかりに畠で採れた野菜や果物をくれた。家畜を丸々一頭くれる気前の良い人もいた。村長も改めて一人を訪ね、礼を言いに来た。ただし、彼は手ぶらだった。

天気のいい昼下がり。ゲイルは丘の斜面で寝転がっていた。村を歩く人々からは死角になつていて、絶好の隠れ場所だ。

視線の先には林が広がっていた。林の中からは、斧が木を打つ音がする。村の建築資材は、この林が貰つているのだろう。斧の音が複数重なり、調子はずれのリズムを刻んでいる。

「あゝあ、有名なんてるもんじゃねえな」

口に咥えた草きれを揺らしながら、ゲイルは独りごちる。

何かと構いたがる村民から逃れるために丘まで來たが、初夏の陽射しが強いわ木を切る音がうるさいので昼寝もできない。おまけに丘のあちこちに岩の成れの果てが転がっていて、寝転んだら背中や尻がごつごつする。せっかくの草のベッドが台無しだ。自分がやつた事だが腹が立つ。

ゲイルの頭の先には、ついこの間まで大岩が鎮座していた。今では柵の残骸もすっかり撤去され、剥き出しになつた土だけが、かつてここに大岩があつた事を物語ついている。だがこの跡もいつかは周りと同じように草に隠れ、人々の記憶からも消えてしまうだろう。

岩を破壊してから三日経つた。あの日以来、掌を返したように村人が親切になり、その恩恵として食事が豪華になつた。心なしか、サー・シャの態度も前より若干優しくなつたような気がしないでもない。相変わらず貧乳と呼べば手や足が出るが、それ以外では以前とは比べ物にならないくらい好待遇だ。

「フン、気にいらねえ」

「何が気にいらないのですか?」

ゲイルの顔に影がさす。目を開けると、サムの巨体が陽射しを遮つていた。

「えらく」機嫌ななめですね。何かあつたのですか?」

サムは両肩に大量の木材を担いでいた。地震で倒壊や破損した家屋を修繕するためのものだろう。荷馬車でも一度で運びきれるかどうかの量を、一人で運んでいる。まさに馬車馬の如き働きをしている相棒の姿を見て、ゲイルは唇を歪めた。

「ずいぶん熱心に働いているな。お前は村一番の働き者か?」

「ゲイルこそそんな所でサボつていると、後でサー・シャに叱られますよ」

「フン、知つたこつちやねえよ」

ゲイルは両足を高く振り上げ、下ろす反動を利用して立ち上がる。尻を手で払うと、小石や砂がぱらぱらと落ちた。

「どうせキヤサリンのスキンが終わつたらこの村からおさらばするんだ。誰に何と思われようが、関係ないね」

もとよりこの惑星の住人と関わるつもりなどなかつたのだ。それがたまたま用心棒になつたり、村を岩から救つたりと予定外の事が重なつただけだ。だがそれもあとしばらくで終わる。仕事が片付けば、この星から去るのだ。

「その事ですがゲイル

「あんたたち、こんな所にいたのか」

サムの言葉が遮られる。二人に声をかけたのは、地震の時にグレンを呼びに来た若者 ルイスだった。今も走ってきたのか、全身

に汗をかき息を切らせていく。どうやら彼の担当は、足を使った伝令のようだ。

「この暑いのに走りこみか？」

「そんなわけないだろ。いや、そんな事よりも話があるんだ。二人とも、悪いがちょっと来てくれ」

ルイスは急いたようにゲイルとサムを促す。彼は一人の返事も聞かずに、こつちだとばかりに先に早足で歩き出した。仕方なく一人はそれに続く。

一人が着いたのは、村の入り口だった。門の向こうでは自警団の若者が一人、門番として立っている。だが一人はゲイルたちが最初に見た時に比べると、明らかに緊張感が欠けており、ルイスたちが来てもおしゃべりに夢中になっている。

「おい、しつかり見張れ。怪物が現れたらどうするつもりだ！」

ルイスが注意すると、二人は驚いて後ろを振り向く。だが注意してきたのがルイスだと判ると、再び談笑を始めた。

「完全に気がゆるんでやがるな」

「あれでは門番の意味がありませんね」

ゲイルとサムの辛辣な言葉に、ルイスは申し訳なさそうに「どうもすいません」と謝る。

「あんたたちが来てから、みんな危機感がどつかに飛んでしまつたんですよ。安心しきつてるつていうか、頼りきつてしまつているんです」

緊張感が欠けたのは、何も門番の一人だけではないだろう。村の住人全体がそんな感じなのだ。期日が限定されているとはいっても、いつ怪物が現れるかと戦々兢兢していた日々から解放されたのだ。多少なりとも浮き足立つの仕方のない事だろう。

「あまり我々を当てにされても困ります。何しろ、契約はあと四日しか残っていませんからね」

「解かってる。あんたたちにも都合つてもんがあるだろ？ だから、ず

つと村に残つてくれつて言うつもりはない。だが他のみんなは、心のどこかで勝手に期待してるんだ。それでみんな気がゆるんじまつて……」

「人間というのは、自分に都合の良い結果を信じたがるものですからね」

「フン、人をあてにする根性が氣にいらねえ」

ルイスはますます恐縮して俯いてしまつた。村人の浮かれぶりを、まるで自分の事のように恥じているようだ。

「それで、話というのは何でしよう?」

ルイスははつと顔を上げると、「ちょっと待つてくれ」と言つて見張り櫓へと走つた。大声で櫓の上に声をかけると、頂上の見張り台から一人の少年が顔を出した。

「あ、ルイスさん」

まだあどけなさの残る少年は、ゲイルとサムの二人を見ると嬉しそうに笑つた。

「二人が来てくれたぞ」

少年はわかつたと手を振ると、櫓の梯子を慣れた様子でするすると下りてきた。

「この少年は?」

「こいつはボーエン。村で一番眼がいいから、いつも櫓で見張らせているんです」

ルイスが二人に紹介すると、ボーエン少年は村を救つた英雄を間近で見た感動に、目をきらきら輝かせる。嬉しさのあまり大きく開け広げた口は、前の乳歯が一本抜けていた。

「さ、二人に話す事があるんだろ?」

ルイスが促すと、ボーエンは「あ、そうだった」と口元を引き締める。

「最近、怪物たちの様子がおかしいんだ」

「はあ?」とゲイルが怪訝な顔をする。

「だから、おかしいんだつて!」

興奮しているのか緊張しているのか、少年の話は要領を得ない。本人も話が頭の中で整理できていないのか、上手く言葉にできないもどかしさで頭をかいだり地団太を踏んだりしている。

「すいません……何しろまだガキなもんで……」

余計な手間をとらせて申し訳ないとばかりに、ルイスが一人に頭を下げる。

「違うよ！ そうじゃないって！」

思つたとおりに意思を伝えられない事が焦りや苛立ちを高め、ボーエンは癪癩を起こしたように暴れ喚きだした。両手で頭をかきむしる、短い栗毛がわさわさと乱れ、よく日に焼けた顔がみるみる赤みをおびていく。次第に涙目になり、泣き出す寸前までエキサイトしてしまっていた。

「時間の無駄だな。もう帰ろっぜ」と提案するゲイル。だがサムはそれを制して、少年の前に屈みこんだ。

「詳しく話していただけませんか、ボーエン」

小さく屈んだつもりでも、サムの巨体は少年には小山のように見えるだろ？ だがそれよりも、自分の話を聞いてくれるという姿勢が、少年を笑顔に戻した。

「では落ち着いたところで、貴方が伝えたい事を話してください」「えつと……ええつと……」

「焦らないで。ゆっくり考えてもいいんです。貴方は見た事、思つた事を素直に話すだけでいいのですから」

少年は頷くと、サムの言ったとおりゆっくりと語りだした。

「やけにガキの扱いが上手いな。保父にでもなつたらどうだ？」

「誰かさんのおかげで、子供を相手にするのは慣れますので」

「どういう意味だよ……？」

「さて、どういう意味でしょうね」

ボーエン少年の話では、昨日から怪物たちが何かに引き寄せられるように移動をしていて、彼が確認しただけでも、森を数十頭の怪物が同じ方角へ向かつて行つたそうだ。

「今日もたくさん見たよ。けど村に向かってるのはいなかつたから、誰かに言おうかどうか迷っちゃって……」

少年の声が尻すぼみになる。恐らく話したところで、誰も相手にしてくれないと思つたのだわい。それでも意を決してゲイルたちに相談してくれた。彼も村の事を案じているのだ。自警団の立派な一員と言えよう。

「よく話してくれましたね。大変貴重な情報です」

サムが大きな掌で頭を撫でると、ボーエンはえへへと嬉しそうに笑つた。

「ですが、みんなを不安にさせないためにも、この事は秘密にしておいてください。怪物が村に近づいた時だけ、私たちにそつと教えてください。結構です」

「うん、わかったよ！」

力強く頷くと、少年はいそいそと櫓の上に登つていった。すっかりサムに懐いたようで、何かあればきっと真つ先に教えてくれるだろ？

「おいサム。ガキを手懐けるのはいいが、これのどこが貴重な情報だよ？」

「それは後ほど説明しますよ」

サムは村の外を眺めながら、含みを持たせた声で言つた。

昼間の快晴とはうつて変わつて、夜空には雲が立ち込めてゐる。月明かりはあるか、星明りすらない。そして閉め切つた納屋の中は、真の闇に満たされていた。

「では、説明します」

サムの両目が光ると、暗闇の中に映像が浮かび上がる。立体的な球体には、大陸や海などの地形が再現されており、見る者が見ればこの惑星を表している事がわかるだらう。陸地は大小の差が激しく、最も大きいものを大陸とするなら、他の小さいものは島と呼んでいくらいの大きさだつた。

球体が回転すると、赤い点が打たれた箇所をゲイルたちに向けて止まる。

「これが、我々の現在地です」

赤い点は、大陸の中央よりやや左下にある。点を中心に、カメラが焦点を合わせるように映像が鮮明になると、山の稜線や街道が明確になる。ゲイルたちが蟻頭を倒しサー・シャと出会つた広大な森は火山の東側に展開し、村はその二つを結んだ線を底辺とする、二等辺三角形を逆さにした頂点のあたりに位置していた。

「それで、これがいつたい何なんだよ？」

ゲイルは壁にもたれながら、つまらない授業を受けている不良学生のように手を頭の後ろで組んで足を投げ出している。

「次に、この映像を見てください」

地図の上に、赤い点以外の黄色い点があちこちに表示された。数える気にならないほどの黄色い点は、大陸のいたるところに散らばつてゐる。だがその大多数は火山や森に散在しており、奇妙な偏りを見せていた。

「これが、約三十時間前にキヤサリンから送られてきたスキヤン結果です。黄色い点は、怪物から検出したエネルギーの波長と同一

のもの つまり同種の人工生命体だと考えて問題ないでしょう

サムの言葉に、ゲイルはもたれた壁から落ちる。

「おい待て！ とっくに結果が出てるなら、もっと早く言えよ…」

「これではこの惑星の怪物の生態分布図と同じで、目標の明確な場所を示しているとは言えません。ですから報告する必要はないと判断しました」

ずり落ちた体勢のまま、ゲイルは「なるほど」と唸つた。

「次に、約二十時間前の映像です」

映像を早送りするように、地図に変化が起こる。黄色い点がわらわらと動き、大陸の中央を目指して集まる。

「怪物が一斉に移動しています。ボーイエン少年の証言も同じです。少年の言ったとおり、黄色い点が確実に同じ地点を目指して集まっている。速度はまちまちだが、まるで赤い点に引き寄せられているように見えた。

「まるでこの村を取り囲むように集まっているな」

「いえ、そうではありません。怪物たちは、命令を受けて集まっているのでしょうか。恐らくは自分たちを作った主 我々の目標を守るために」

「どうしてそう思うんだ？」

ゲイルの問いに、サムは順を追つて説明しましょうと、映像を巻き戻し始めた。

「これが最初の、約三十時間前の映像です。これより以前のデータがないのであくまで推測ですが、この頃から怪物たちに指令が与えられたのでしょうか」

「だから、その根拠は何だつて訊いてるんだよ」

「森の怪物ですよ」

ゲイルは森で倒した蟻頭の事を思い出す。たしかあの時自分たちは、森の東端から西に移動していた。そして蟻頭も森を東から西に移動していた。サーチャは運悪く、その通り道に入ってしまったのだ。

「怪物がもし、我々がこの惑星に到着した時点で命令を受けていたのなら、東から森に入った我々を迎撃するために、西から東に移動していないといけません。ですが実際は逆。なのでこの時点では目標は我々の存在に気づいていなかつたのでしょうか？」

「じゃあ、どの時点で気がついたんだ？」

「これも推測ですが、ゲイルが怪物を倒すために内燃氣環を発動した時点です」

「ゲ……俺のせいか……」

「この惑星では、怪物以外にありえないエネルギー量ですからね。目標が科学的なエネルギー波長を計測する事によって怪物の分布を管理しているなら、当然異質な波長も検出されているでしょう」

「クソ、調子に乗つて暴れたせいで、わざわざ相手に存在をバラしちまつたか……。軽く凹むぜ」

ゲイルはばつが悪そうに、頭をかきむしる。

「サー・シャを助けるように頼んだのは私ですから、あまり気にしないでください。それに今回は、それが功を奏したようですね」

「どうこう事だ？」

「ゲイルがこの惑星で内燃氣環を使ったのは、あれ一度きりです。もし目標が我々の位置を常に把握しているのなら、この村に怪物を送り込まないはずがない。ですが怪物はまだ一度も来ていません。それはどうしてでしょう？」

「そうか。向こうは俺たちの存在を捕捉できただけで、今どこにいるかまでは把握していないのか」

「正解です。この村に我々が滞在している事を目標が検知できなかつたのは、大岩を破壊する際には内燃氣環が使われなかつたからです。敵が現れたのはわかつた。だがどこにいるのかはわからぬ。だから慌てて怪物たち集結させているのでしよう」

そう言つとサムは、二つの地図を重ね合わせる。一方は約三十時

間前もので、もう片方は約二十時間前のものだ。

「この十時間の間に、怪物たちは主からの指令を受けて、一箇所

に集まつとしています。これはボーエン少年も証言しています
「一つの時間の地図を重ねてみると、一目瞭然だ。黄色い点が、明
らかに地図の中央目がけて集合している。

そして一つの地図を重ねて初めてわかつたが、十時間の間に黄色
い点が増えているような気がする。怪物は、ある一点から湧き出し
ていた。

「そしてこの一つの地図から予測される、黄色い点の集結地点が
」

地図上の黄色い点が、みるみる一箇所に集まる。中には赤い点を
通過していくものもあつた。数え切れない黄色い点が集まつた地点
は、黄色い塊になつて煌々と輝く。

地図の縮尺が小さくなつていぐ。黄色い塊にピントを合わせ、ど
んどん近くに寄る。

闇に浮かび上がつた立体映像には、村人たちから『神の住む山』
と崇められている火山が明るく光つていた。

「火山、か……。野郎、ここでの化け物を大量生産してやがつ
たんだな」

「間違いなくここに、怪物たちを生み出し操つている張本人がい
るはずです。ここまでは理解できましたか?」

「まあ……何とかな。だが、一つ解からないことがある。今回の
目標が怪物たちを操つているのは間違いないとして、どうしてわざ
わざ自分の居場所を晒すような真似をするんだ?」

「もし火山に標的が居ると仮定しましよう。標的は自分が隠れて
いるすぐそばで我々を発見し、しかも見失つたとします。だとすると
と、我々がいつ迫つてくるかとびくびくし、なりふり構わず守りを
固めるのではないのでしょうか?」

「つまり、向こうが勝手に勘違いして墓穴を掘つたってわけだ」
ゲイルが楽しそうにがぱっと起き上がると、サムは静かに、だが
力強く「そうです」と肯定した。

「フン、ようやく見つけたぜ。首を洗つて待つてろよ」

ゲイルは舌で唇を舐める。獲物を見つけた獵犬のような笑みだった。

「そこでゲイル、一つお願ひがあるのですが……」

目標の位置を特定して高揚するゲイル。上がった士気に水を差すようで気がひけたが、それでもあえてサムは声をかける。だがゲイルはサムの言葉を、片手を上げて遮った。

「どうせ村を通る怪物を退治してくれ、とか言うんだろ?」

鼻を鳴らすゲイルに、サムは静かに頷く。期待はしていない。きっと反対するだろう。何しろ時間が経つほど、それだけ怪物の数が増えるのだ。危険も手間も増えるし、標的が逃走する可能性だつてある。何より、二人にとつて怪物の駆除は任務外である。速やかに標的を検挙または処理する。それが彼ら、宇宙連邦治安維持局特務捜査官の任務なのだ。

そして任務を遂行する事こそ、キヤサリンを助ける唯一の方法なのだ。ゲイルが賛成する可能性は極めてゼロに近い。だが残された村人の事を考えると、無駄だと思いつつ提案せずにはいられなかつた。

「いいぜ」

「そうですか。では私一人で、ええつ?」

「聞こえなかつたのか? 僕は構わないって言つたんだ」

まったく予想だにしなかつた返事に、サムの電腦が聴覚にエラーを出す。すぐさま再起動。記憶野から先の発言を脳内再生。またもやエラー。

「おい、なに固まつてんだよ?」

「いえ……ちょっと聴覚デバイスの調子が悪いよつて、幻聴が……」

「待てコラ。それじゃあまるで、俺がありえない事を言つたみたいじゃないか」

はい、とサムは素直に言つ。何しろサムは、どうゲイルを説得するかという事しか考えていなかった。考えたパターンは、ゆうに數

百通り。だがそれが無駄になつた。サムがゲイルの行動パターンを読み違えたのは、初めての事だった。

まだ信じられずに呆然としているサムに、ゲイルは不満げな顔をする。

「勘違いするなよ。別にこの村の奴らに情が湧いたり、目的を忘れたんじゃない。ただ用心棒としての仕事を果たすだけだ。それに

」

「それに？」

「こいつらが村に来てから俺たちが倒したら、また目立つ事になるからな。面倒を増やすのはこれつきりにしたい」

「理由はどうあれ、協力に感謝します」

刺すようなゲイルの視線を真っ向から受け止め、サムは神妙に頷く。

「それで、この村に直撃する怪物は何体いるんだ？」

「計算では、七十一体です」

ゲイルは軽く口笛を吹く。蟻頭を基準とすれば、一体でも充分に村を全滅できるのにそれが七十一体。充分過ぎて、お釣りのほうが多い。

「だが大丈夫か？ 仮にそいつら全部ぶつ倒しても、他の怪物が村に向かつてきたりキリがねえぜ」

「その心配はありません。怪物たちは目的地に向かう事を最優先しているようで、可能な限り最短距離を移動しています。なので命令の変更がない限り、進路を変える可能性は低いでしょう」

「なるほど……。ならとつとと行くか」

ゲイルは壁から背を離して立ち上がる。

「今からですか？」

「朝までに終わらせるぞ。村に進路をとっている奴以外は、全部集まつてから火山の麓で一網打尽にすればいい」

「なるほど」

ゲイルとサムは納屋の外に出る。涼やかな音色を奏でる虫たち以

外、動くものは彼ら一人しかいない。村人たちは、陽が昇るまでぐつすり寝ているだろう。

ここからは時間との勝負だ。朝までに七十一体すべてを片付けて、何事も無かつたかのように戻らなければならぬ。そうしないと、村人たちに余計な不安を与える事になるからだ。

「それじゃ、深夜の虫退治としやれ込むか

「長い夜になりそうですね」

「やれやれ、夜勤手当が欲しいくらいだぜ」

二人は地面を蹴り、高く跳ねる。月も星も出ていない闇夜の空に、二人の姿が消えていった。

いつもと同じように、サー・シャは夜明けとともに田を覚ました。窓の外は、昇り来る朝日が眩しい。空には雲一つなく、今日も良い天気になりそうだ。天気が良いと、無性に洗濯がしたくなる。だがシーツは昨日洗つたし、続けて洗濯できるほどサー・シャは衣装持ちではない。

さてどうしたものか、と思案しながら大量の朝食を調理していると、この家に来てまだ一度も服を洗濯していない人物の顔が思い浮かんだ。

扉にかけた手を一旦止めて、サー・シャは覚悟を決める。これから何を見ても驚かないという覚悟だ。だが彼女が何度も覚悟を決めて、それを打ち碎くほどの惨状が納屋の中に待っている。「近所では、朝のサー・シャの悲鳴が一番鳥の代わりになつていて」と評判だ。そんな汚名を返上するために、今日は一際覚悟を固める。

「……よし」

氣を引き締めて勢いよく扉を開けると、朝陽が納屋に射し込んで埃をきらきらと輝かせる。覚悟が僅かも揺るがぬうちに、サー・シャは納屋の中に踏み込んだ。

「ここまで寝てるの？ わたと起き」

ここ数日繰り返してきた台詞が止まる。これまで、いつもここでゲイルの奇妙な寝姿に驚いて悲鳴を上げていたのだ。

だが今日は違う。扉から届く光の中で、ゲイルのぴつたりと揃つた両足が見える。まともだ。驚くほどまとなぐらい、ゲイルはうつ伏せに寝ていた。

「なんだ……普通に寝てる時もあるんじゃない……」

ほつと胸を撫で下ろす。これまで獵奇殺人事件の死体のような寝

相のゲイルを見るたびに、サーチャは心臓が止まるような思いをしてきたのだ。しかし今日は違う。普通に寝ているのなら、何を恐れる必要があるうか。サーチャは余裕をもってゲイルに近づいた。

扉から少し離れた壁側に、ケイルは気をつけをした状態で横たわっている。ゆっくりと近づくと、暗くて見えなかつたゲイルの尻から上が露になる。

朝日の影響が目に残っているせいなのか、何だかゲイルの服が緑がかっているような気がする。そして首から上を見た瞬間、サーシャは息を飲んだ。

すつかり気を抜いていたサー・シャは、やはり今日も悲鳴を上げた。うつ伏せに寝ていると思い込んでいたが、ゲイルの顔は天井を向いていた。首が百八十度後ろに回った状態で、白目を剥いて寝ている。しかも丘に上がった魚のようにぱくぱくと唇が開閉しているので、まるで死してなお憎悪の言葉を吐き出すゾンビのようだ。

そして今日も、いつものように尻餅をついているサー・シャに向けて、心なしか緑色なサムが爽やかな朝の挨拶をするのであった。

ゲイルは眠たそうに目をこすりながらも、皿を山のように積み上げている。寝起きというより、まだ半分寝ているようだ。何度も見て、も圧倒される食欲だ。細身の体のどこに、これほど大量の食料が入っているのだろう。それ以前に、これだけ食べてるのにどうして太らないんだろう。なんだかずるいとサー・シャは思つた。

行き場のない怒りをぐつと堪える。それよりもやらなければならない事があつた。

「ねえ、ゲイル」

「んあ？ デザートか？」

「ないわよ、そんなもの。そうじゃなくて！」

「何だよ？」

「何よその服？あんたいつの間にこんなに汚したの？」

さも汚いものを触るように、サー・シャはゲイルの服を指の先でつまむ。出会った頃にあちこちあつた焼け焦げが見えなくなるほど、何か得たいの知れない縁の汁で染められていた。

「どうしたらこんなに縁に染まるの？草むらに一日中寝転がつてたって、こんなにならないわよ？」

「気にするな。そのうち綺麗になる」

「なるわけないでしょ！そもそもあんたたち、ここに来てから一度も着替えてないじゃなし」

「だつて着替えなんか持つてねえもん」

ゲイルは寝ぼけたように言つ。そうだ。そもそも出会った時から、ゲイルたちは手ぶらだったのだ。荷物も何もないのだから、着替えを持っているはずがない。ずっと着の身着のままで旅をしてきたのだろうか。それ以前に手ぶらで旅をする事ができるのか。

「じゃあ、今までずっと同じ服を着ていたの？」

ああ、とゲイルはさも当たり前だという顔をした。

「うわ、不潔……。最低……」

汚いものを見る目でサー・シャが言つと、ゲイルはふふんと小馬鹿にするような笑みを漏らす。

「この田舎者め。いいか、この服にはナノマシンが組み込まれていて、汚れようが破れようが自動的に元に戻る優れものなんだ」

「え、なに？何言つてるかさっぱりわかんない」

サー・シャが顎に指を当てて首をかしげると、ゲイルは面倒臭そうに頭をかぐ。

「つまり、着替えたり洗う必要がないんだよ

「へへ、そなんだ。凄いね」

感嘆して拍手するサー・シャに、ゲイルは満足そうに「どうだ解かつたか」と胸を反らす。

「じゃ、やつさと脱いで

「お前、人の話聞いてたか？」

「聞いてたわよ、あなたの寝言を。だいたいそんな便利な服があったら、この世の服屋さんはみんな廃業よ。子供みたいなこと言つてないで、いいからそれ脱ぎなさい！」

サー・シャは問答無用とばかりに、追いまさきも泣いて帰る速度でゲイルに襲いかかる。

「嘘じやねえよ。お、ちょっと、待て。引っ張るな」

「こうなつたら実力行使よ。あれ……これどうせつたら脱げるのよ？」

「馬鹿、やめろ……あ……」

「あ、なんかこりこりしてて。これかな？」

「ちが……それは俺の乳首だ！」

ゲイルの体をあちこちまさぐるが、どこを探してもボタンはおろか、縫い目も繋ぎ目も見つからない。おまけに服が体にぴったりと密着しているので、まるでゲイルの体を直接触っているようだ。だが手に伝わる感触は、サー・シャがこれまで触ったどの生地とも違う。例えるなら、もの凄く細い鋼線を編んだような、しなやかで硬い奇妙な手触りだつた。

サー・シャがゲイルの服を脱がせようと悪戦苦闘していると、台所で洗い物をしていたリネアが、騒ぎを聞きつけてひょっこりと顔を出した。暴漢のようにゲイルの服を剥ぎ取ろうとしていた娘と母の目が合つた。

「あらあら、サー・シャったら大胆ね。でもお母さん、そういう事はもつと暗くなつてからのほうがいいと思つの」

リネアはそう言つてこいつにこり微笑むと、何事もなかつたように引つ込んだ。

「あ、ちょ……っ、お母さん……違つて。誤解よ。って言つが、

それが母親の言つ口詞なの？」

慌ててゲイルから離れ、弁解するサー・シャ。その隙を逃さず、ゲイルは「今だ！」と逃げ出した。

「あ、『ラリ！』

すぐさまサーチャはゲイルの後を追いかける。ぱたぱたと慌しい足音が過ぎると、リネアはくすりと笑つて洗い物に戻った。

庭でサムが水を蒔いていると、ゲイルが玄関から血相を変えて飛び出してきた。危うくぶつかりそうになるが、ゲイルが咄嗟に体を捻り、何とか衝突は回避できた。

「ゲイル、朝から何を慌てているのですか？」

「逃げるサム。この家には痴女がいるぞ！」

「はあ？」

ゲイルはたらを踏んでいた体勢を立て直すと、一目散に走つていった。サムはわけが判らず呆然とその場に立ち尽くす。

何かに追われるよう走つていったゲイルの背中が、瞬く間に小さくなる。とても徹夜で怪物を相手に格闘したとは思えないほどのみ事なスプリントだつた。

「待ちなさいゲイル！」

ゲイルの姿が見えなくなつた直後、今度はサーチャが走つてきた。振り返つたサムは、彼女の鬼のような形相に思わずかける言葉を失う。

「サム、ゲイルは……あの馬鹿はどうちに行つたの？」

ゲイルがまた何か彼女を怒らせるような事をしたんだろうと、サムは瞬時に状況を理解する。理解するといつよりも、もう飽きるほど見た状況だ。これは下手にじまかしたり、ゲイルを庇うような真似はしないほうが吉だろうと、彼の優れた頭脳は瞬時に判断した。

「さつきあつちに走つていきましたよ」と、サムが指を指示するが、ゲイルの姿はとつくに見えなくなつていた。

「もう、逃げ足と食べるのだけは速いんだから

サーチャは悔しそうに地団太を踏む。力強く地面を蹴る足を止めると、彼女はゆっくりとサムに向き直つた。

「サム」

「何でしょう？」

じろじろと頭の先から爪先までサーシャに見られ、サムは思わずたじろぐ。

「貴方もそうとう汚れてるわね。ちゅうどこいわ。洗つてあげるからその鎧、脱いで」

どうやら、全身に浴びた怪物の体液をそのままにしておいたのがまずかったようだ。だがすべての怪物を倒し終わつた時にはすでに夜明けが迫つていたため、洗い落とす暇がなかつたのだ。

こんな説明をサーシャにできるわけがなく、サムはどう適当な理由をつけて断ろうかと思案する。しかし、ただでさえゲイルを取り逃がして気が立つてゐるであらう彼女の機嫌を、これ以上損ねるのはまずい。なるべく当たり障りのない断り方をしなければ。

「お心遣い感謝します。ですが寝泊りさせてもらつている上に、これ以上の迷惑はかけられませんよ」

「あら、気を遣わなくていいのよ。それよりも、そんなに鎧が汚れていたら気持ち悪いでしょ？」

「いえいえそれには及びません。旅慣れた身ですので、多少の汚れは気にしませんよ。どうぞ私の事など構わずに、貴方の仕事をしてください」

やんわり拒否しようとしても、なぜかサーシャは食い下がつくる。ここまで執拗にされると、親切というよりむしろ怖い。

「いいから遠慮しないで。サムが気にしなくても、あたしが気にするんだから」

「ですが……」婦人の前で裸になるのはちょっと……

「恥ずかしがらなくてもいいのよ。患者さんの清拭で、男の人の裸なんて見慣れてるんだから」

「ああ、そうですか……」

もうこれ以上こまかすのは無理のようだ。あまり断り続けるのも不自然だが、彼女の要求にはとても応えられない。窮地に追いやりれたサムの電子頭脳は、もっとも原始的かつ効率的な解答をはじき

出した。

つまり、逃げるが勝ちである。

サムは、そもそも今思いついたかのよつて「あ～」と声を上げると、ぽんと手を叩いた。

「そういうえばゲイルにようじがあるのでおもいだしました」
サムは言つや否や、サーチャに背を向けて駆け足を始める。大根役者も裸足で逃げ出す棒読みの上、動きもかなりぎこちない。突如始まつたサムの奇妙な言動に、サーチャは度肝を抜かれて呆然となる。

「ついでにみずあびでもしてきますそれでは」きがんよう「終始棒読みでサーチャに手を振ると、サムは鎧ををがしゃがしゃ鳴らしながらゲイルの消えた方向に走つていった。

意外に軽快な足取りでサムが去つていくと、よつやくサーチャは正気を取り戻した。

「…………はつ。いない！」

慌ててサーチャは当たりを見回すが、サムの姿はとつぶになくなつていた。

ゲイルの次はサムにも逃げられ、一人の服を洗濯しようとサーシャの予定は、脆くも崩れ去った。

「ちえつ、サムにも逃げられちゃつた」

足元の小石を蹴る。小石は庭を転々と転がり、井戸に淵に当たる。石を積み上げた淵には、大きなたらいが立てかけてあった。今田このたらいを使うはずだったのに、今は自分と同じで予定が空いてしまっている。

サーシャはとぼとぼとたらいに近づくと、井戸野淵に腰かけた。

「あと三日か……」

ゲイルとサムがこの村に来てから、今日で四日目になる。用心棒として滞在するのが一週間だから、残すと三日あと一人との別れが来るので。

「それまでに、ちゃんとお礼言わないとねつ」

サーシャは立ち上がり、スカートを叩いて払う。すると老婆が一人、こちらにやって来るのが見えた。

「おはようサーシャ」

「おはようございます。おばあちゃん、今日はどうしたの？」

今日は休診日だ。だがコードは患者が来れば診療するので、休診日はあつてないようなものになっている。

だが老婆はにこりと首を振ると、持っていた籠をサーシャに差し出した。

「これね、ウチで採れた野菜。あの一人に食べさせてあげて」

そう言ってサーシャに籠を渡すと、老婆はそれじゃあと帰つていった。

籠はずしりと重い。きつとこの重さが、老婆の感謝の表れなのだろづ。

「それじゃ、今日はこれで何か作りますか」

洗濯の予定はなくなつたが、代わりに料理の予定ができた。ただでさえゲイルは馬車馬のように食べる。これはなかなかやり応えのある仕事になりそうだ。

サー・シャは籠を両手に持ち直すと、家の中に戻つていった。

巨体を揺らしてサムは走つていたが、サー・シャが追いかけてくる気配がないので、スピードを緩めて徒步に切り替える。

朝の散歩をしている人が挨拶をしてくれた。手を上げて返礼する。外を駆け回る子供も、サムを見て逃げなくなつた。むしろ近寄つて話しかけてくることもある。

絵に描いたような平和な村の様子を眺めながら歩いていると、背後から足音が聞こえた。足音の距離はまだ遠く、サムにしか聞こえない。

足音から相手の体重と歩幅を計算し、歩幅から身長を割り出す。算出したデータを脳内の人物データベースと照合すると、一人の人物がヒットした。この村の住人。危険度ゼロ。武装している様子はない。

足音を察知してから、相手の特定まで一秒とかからない。そしてサムは、あえて相手の接近に気づかないふりをして歩き続けた。

「サムさん

まだ声変わりの気配も見当たらない、純粋なボーカルの声がサムを呼ぶ。

ここに初めて相手に気づいたようにサムが振り向くと、ボーエン

少年がこちらに手を振りながら走つてくるのが見えた。

「おはようございます、ボーエン」

「おはよう、サムさん」

ボーエンは息を弾ませながら、挨拶を返す。相変わらず田舎らしさと輝いており、多感な時期の少年特有の、憧憬と羨望の籠つた眼差しを惜しげもなくサムに投げかけている。

「これから見張りですか？」

少年は元気よく「うん！」と答える。

「感心ですね。今日も暑くなりそうですから、体に気をつけてくださいね」

「ありがと、氣をつけよ。あ、そいつ、さつきゲイルさんが丘のほうへ慌てて走つて行つたけど、何かあつたの？」

「何でもありませんよ。怖いお姉さんから逃げてるだけですから」

「なんだ」とさつきまで心配そうにしていた少年の顔が笑顔になる。

「あのね、サムさん……」

「なんですか？」

「のこと、ちゃんと秘密にしてるからね」

「それはじつも。助かります」

「えへへっ。だつてサムさんと僕だけの秘密の約束だもん。絶対誰にも話さないよ」

少年は意思の固そうな顔をする。サムが頭を撫でると、少年は目を細めてくすぐったそうに笑つた。

「それじゃ僕、見張りに行かなきゃいけないから。またね」

「はい。頑張つてください」

少年は駆け出すと、上半身を捻つてサムに手を振つた。そのままずっと走り続けているので、転ぶのではないかとサムは心配したが、どうにか転ばずに走つて行つた。

ボーイエン少年の背中を見送ると、サムは方向転換をして丘へと向かつた。

愛用の釘バットがいつになく重い。肩に担ぐ気力もなく、引きずるよつにしてグレンは歩いていた。

見回り帰り。いや、見回り中止の帰り道。

の一人 ゲイルとサムがこの村の用心棒になつて以来、見回りや訓練の集まりが悪くなつた。皆の一人におんぶにだつて、

自分たちが村を守るのだという気概がすっかり抜けていた。

詰め所の集まりもどんどん悪くなり、今朝はついにルイスしか居なかつた。だからグレンは見回りを中止にして帰路についているのだ。この調子では、恐らく門番もいなうだろう。

「クソ、胸糞悪い！」

忌々しいあの一人の顔を思い浮かべ、全力で釘バットを木に叩きつける。太い釘が木の幹に食い込み、樹皮を引き裂いた。

だが、それだけだ。いかに屈強なグレンといえど、一振りで木をなぎ倒すような非常識な真似はできない。

あの一人なら、素手の一振りで木の一本や二本は軽くへし折つてしまふだろう。何せあの大岩を一人で持ち上げ、あまつさえ粉々に砕いたのだから。

そして二人は大岩と同時に、グレンのこれまで築いた自警団のリーダーとしての地位やプライドまで砕いた。あの日から他の団員はもとより、村人の自分に対する態度ががらりと変わつた。まるであの一人がいてくれれば、グレンは用なしとばかりに。

いつそこの手で二人を叩きのめし、がた落ちになつた自分の権威を復活させようと思つた事もある。だがそれは無理だ。最初ハナつから勝負にならない。大人と子供の勝負どころか、怪物と人の勝負だ。怪物を倒せるような奴相手に、自分のような凡人が勝てるわけがない。しかしそれほどの力を持つているからこそ、村人たちは彼らの滞在を歓迎しているのもまた事実である。

「あんな奴らに尻尾振りやがつて……」

村の連中がよそ者になびくのが気に入らなかつた。ただ強いというだけで何の権力も地位もない奴が、村長の孫であり自警団のリーダーでもある自分よりもちやほやされているのが我慢ならない。

そして彼らがサー・シャの家で寝泊りしているのが、最も気に入らなかつた。

グレンとサー・シャは幼い頃からの知り合いで、言わば幼馴染である。彼は小さい頃から、サー・シャの長い赤毛と少し強気な性格に魅

かれていた。慎ましい胸も良いと思っている。

昔はケンカで自分よりも強かつた彼女が、涙に暮れていた時期があつた。彼女の父親が怪物に殺された時だ。あの頃のサー・シャは、グレンに改めて彼女がか弱い少女だという事を再認識させた。そして、彼女と村を守るために強くなるうと決意した。

だがそれがどうだ。グレンは自分が大事にしているものを、ゲイルたちに横からかっさらわれたのだ。

村人たちの羨望も貰贊も。

そしてサー・シャも。

あのどこの馬の骨ともわからぬ、とっぽいチンピラ野郎がサー・シャの家で暮らしている。ゲイルは彼女に手を出してなどいないし、その気すらないと言うが、あんな奴のいう事など信用できるものか。もし、ゲイルがサー・シャに そう考えるだけで腸が煮えくり返る。一刻も早くあの害虫をサー・シャの家から、いや、この村から追い出さなければ。

だが具体的にどうすればいいのか、グレンにはまったくわからなかつた。体は鍛えてあるし、ケンカならこの村で自分に敵う者はいない。だがケンカでは絶対にあの一人に勝てない。

ではどうすれば良いのか。例えば、あの二人の信用を落とすといふのはどうだろうか。思えば、あの大岩の件さえなければ村人たちもよそ者の一人をあんなに信用する事はなかつた。怪物より強いといふが、それはサー・シャが一人で言つてゐる事で何の証拠もない。信用さえ落ちれば、村人たちもきっと自分と同じようにあの一人の胡散臭さに気がつき、彼らに対する態度も以前に戻るに違ひない。いや、上手くすればこの村から追い出せるかもしれない。

これだ、とグレンは思った。何か、彼らの信用を落とす方法はないだろうか。あの一人がこの村を守る英雄などではなく、ただの疫病神だという事に気づかせる方法を。

(待てよ。疫病神か……)

あの大岩が転落した事を、あの一人のせいにできないだろうか。

98

岩はこれまで何度もあつた地震にもびくともしなかつたのだ。それがあの二人が来た途端、これまでにないほどの大地震が来て転落した。偶然かもしれないが、これを上手くこじつけられないだろうか。

(いや、こんな強引な話じゃ無理だ)

何かもう一つくらい二人を貶める材料がないと、今の村人たちの目は覚めないだろう。中途半端な中傷だと、反って自分が彼らをやつかんでいると思われかねない。

だがこれは案外名案かもしれない。村人たちが一人を信用しているほど、それが裏切られた時の反応は大きいだろう。そして信用というものは、いとも簡単に壊れる。

(いいぜ……。これはいいぜ。あの二人の信用をがた落ちにして、
村から追い出してやる)

グレンがにやにやしながら歩いていると、道の向こうをボーエンが走っているのが見えた。きっと今日も見張り櫓に行くのだろう。ルイスと最年少の彼だけが、喜んで仕事をしている。他は皆、ゲイルとサムの存在にかこつけてサボっているのだ。たった二人、しかも一人はまだ年端もいかぬ少年だ。それだけしか自分についてこなかつた事が、グレンの自尊心をいたく傷つけている。

「よう、ボーエン」

グレンが声をかけると、少年はあつという顔をした。たぶんこんな時間に自分が村を歩いているとは思わなかつたのだろう。それもそうだ。本来なら、見回りの時間だ。

「おはようござります、グレンさん……」

今まで楽しそうだつた少年の顔が、急に暗くなる。嫌なヤツに会つたという顔だ。グレンは自分が少年に好かれていらない事は、とつくに知つていて。何しろ少年が自警団に入りたいと言つたのを子供だからと却下したのは自分だ。それを人の良いルイスがとりなしたから、渋々見張り櫓に置いてやつている。嫌われて当然と言えるだろう。

「今日も櫓に行くのか？」

少年は小さく頷く。俯いたまま顔を上げないのは、顔も見たくなりという意思表示だろうか。ずいぶん嫌われたものだ、とグレンは苦笑する。

「お前、しばらく櫻に行かなくていいぞ」

どうせ怪物が来たつて、あの一人が何とかしてくれのだ。それなら余計な時間を使わせるより、さっさと帰らせて家の手伝いでもさせたほうがいい。そう考えての言葉だったのだが。

「そ、そんな。行かせてよ。お願いします！」

少年が勢いよく顔を上げる。てっきり仕事から解放されて喜ぶと思っていたグレンは、少年の必死の懇願に意表をつかれた。

「お願ひつて、お前……行つてどうするんだよ？」

すると少年は急に黙り込む。何か言えない事を口の中に押し込めているように、唇を固く閉じている。

（怪しいな……。）コイツ、何か隠してやがる

少年の不自然な言動は、明らかに何かを隠している事をグレンに感じさせた。ついさっきまで少年に感じていた情が、急激に怒りに変わる。

「お前、何か隠してるだろ？」

「何も……隠してなんかないよ……」

おどおどする態度が、ますます怪しい。知られてはまずい事が、何かあるのだろうか。いや、それよりも、このガキが自分に隠し事をするという事自体が気に食わない。

こんな子供にまでなめられているのかという思いが、グレンの怒りをますます大きくする。鬱積した怒りに新たな薪をくべられ、炎がさらに大きくなる。怒りの炎は、火力が上がるごとに色が変わるように変質した。

「言えよ」

胸座を掴みぐいと持ち上げると、少年の足は易々と地面から離れた。圧倒的な力の差が少年の顔に怯えの色が加え、グレンの嗜虐心を刺激する。

少年に対する労いや同情といったものは、今やすっかり消え失せている。代わりにどんな手段を使ってでも秘密を喋らせようという歪んだ感情だけが、グレンの心を支配していた。

目に涙をいっぱい溜めながらも、必死で首を横に振るボーエン。泣き喚きたいだろうが、恐怖のあまり声も出ないようだ。少年にも想像がつくのだろう。これから自分が何をされるのか。どれだけ痛い思いをしなければならないのか。それを如実に想像させる顔が、少年のすぐ目の前にあるのだから。

だがそれでも口を割らない少年にグレンは舌打ちを一つすると、軽々と草むらに放り投げた。往来では人目についてできない事をするためだ。

叱られた子供がいつも同じ場所に隠れるように、ゲイルは昨日と同じ丘の斜面に寝そべっていた。

ただこうしているだけでは何も解決しないのはわかっている。だが他にする事もなかつたので、仕方なくここで寝転んで時が過ぎるのが待つている。

「参ったぜ」

ゲイルは自分の服をつまむ。相変わらず緑色に染まった服は、今朝から何も変わっていない。いや、思い返せばこの村に来た頃から変化していないように思えた。

「まさかぶつ壊れるとはなあ……」

よく見れば、服のあちこちにできた焼き焦げも残っている。森で蟻頭と戦っている時にできたものだ。体温調節機能を切つた時はまだちゃんと機能していたから、恐らく蟻頭に叩き潰された時に故障したのだろう。

「まあいいぞ……。このまま戻つたら、今度こそあいつに丸裸にされる……」

「それ以前にもっと心配する事があるでしょう」

「うおっ、びっくりした！」

いつの間にか、ゲイルを覗き込むようにサムが立っていた。常々疑問に思うが、あの巨体でどうやれば、気づかれずに背後に立てるのだろう。

「ただ単に貴方が鈍いだけですよ。それより」

サムは周りの草と同化しているような相棒を見て、「ふむ」と呟いた。

「ナノマシンの制御装置が故障していますが、これなら修理可能です」

「ほ、本当か？」

サムの診断に、ゲイルの顔がぱつと明るくなる。

「良かつたですね。官給品を破損させたら、始末書ものですから
「まゝたあのハゲにクソ長い小言を聞かされるとこりだつたぜ。
お前は俺の上司かつての」

「全然ハゲてないし、彼は一応我々の上司ですが……」

「うつせえ！　いやーしかし良かつた良かつた。一時はどうなる
事かと思つたぜ」

ゲイルは嬉しそうに服を撫で回す。

「あ、でも今すぐ修理は無理ですよ。一度船に帰還しないと、道具
も何もありませんからね」

「なあ～にい～？　それじゃあ意味ねえじゃねえか～……」

へなへなとゲイルの体から力が抜ける。ぬか喜びもいいところだ。
「始末書と小言が回避できるじやないですか」

「ぐぬう……。けどこの汚れを落とさないと、あいつがまた俺の
磨きぬかれた肉体を貪ろうと服を剥ぎ取りに来る……」

「どうしてそう歪んだ表現をするんですか……。ただ単に洗濯し
たいだけでしょう」

「お前はどうなんだよ？　うつせあいつから逃げてきたんだろ」「
まあまあ。私の事より、まずはその服をどうにかしないと」

「……お前も逃げてきたな」

「一キロほど向こうに小川がありましたよ。あそこなら、人目に
触れずに服を洗えるでしょう。なのに、この陽気ならすぐに乾きま
すよ」

「この仕事が終わつたら、速攻でお前の脳を分解掃除してやる」
「はつはつは、面白い冗談ですね。さて、私も手伝つてあげます
から、早く行きましょう」

サムはぐいぐいとゲイルの背中を押す。ゲイルは喚きながら抵抗
するが、重量差はどうにもならない。こうしてゲイルは、倉庫の荷
物のように林の中に押し込まれた。

日が暮れる頃、ゲイルとサムが朝より少しだけ小ぎれいになつて帰ってきた。どうだとばかりに仁王立ちするゲイルに、明日こそは二人の服と鎧を洗つてやろうと予定していたサー・シャは複雑な気分になる。

「これで文句ないだろ」

得意顔で胸を張るゲイルに向けて、サー・シャは小さく「チツ」と舌打ちした。

「おい、今チツって言つたろ？ 舌打ちしたよな？」

「してないわよ。馬鹿なこと言つてないで、さつさと手を洗つてきし。夕飯にするから」

「いや、言つたよな、『チツ』つて。何だよ、何か文句あるのかよ？」

「だからしてないつて言つてるでしょ。変な言いがかりつけると、盛りを減らすわよ」

食事の盛りを人質にすると、ゲイルは渋々手を洗いに行つた。サー・シャは溜め息をつく。これでまた明日の予定が空いてしまつた事よりも、こんな調子ではいつになつたらゲイルに助けてもらつた礼を言えるのかと思ったら、つい溜め息が出てしまつた。どうしてもつと素直に、普通にありがとうと言えないのだろう。たつた一言。それだけを言うために、自分はどれだけの遠回りをしているのか。また溜め息が出た。

野菜をメインにした料理が、もりもりゲイルの胃袋に納められていく。この野菜はもちろん、朝サー・シャが会つた老婆から貰つたものだ。ゲイルは知つているのだろうか。今だけでない。大岩を碎いて村を救つた日から、食事はずつと村人たちから謝礼として貰つた食材で調理されていた事を。

サムは相変わらず何も口に入れない。食事を持って行つても「ゲイルにやつてくれ」の一点張りだ。今日も手付かずの料理が乗つた盆は、ゲイルの前に置くとあつという間に空になつた。

ゲイルはサムが何も食べない事を知つてか知らずか、まるでサムの分まで平らげんばかりの食欲を見せつける。よくあれだけ食べるものだとサー・シャが感心していると、外からサムが窓をノックした。

サー・シャが窓から外を覗くと、たくさんの松明の灯りがこちらに向かってくるのが見えた。灯りの数は尋常ではなく、村人のほとんどが加わっているのではないかと思われた。

慌ててサー・シャが外に出ると、すでに集団の先頭は庭に足を踏み入れていた。ざわざわとした声が徐々に大きくなる。

距離が近くなると、先頭を歩いている人物がグレンだとわかった。彼は騒然とする集団を率いて、まるで行進のようにこちらに向かって歩いてくる。

「なに、あの集団は？」

「わかりません。ですが、何か様子がおかしいです。危険なので、貴方は家の中に入つていてください」

そう言われても、集団が目指しているのは自分の家だ。他人事のような顔をして家の中に引っ込むわけにはいかない。

「ちょっとグレン、いったいこの騒ぎは何！？」

サー・シャが大声を出すと、グレンが片手を上げる。集団はその場で停止し、口々に話していた声も止む。集まつた村人の数はかなり多く、庭に全員入りきれずに後ろのほうは垣根より外に出ていた。

「よう、サー・シャ。今すぐあの野郎を出せ」

今日のグレンは、やけに自信に溢れている。だがいつもの根拠のない尊大さではなく、自信を裏打ちさせる何かを持っている。そんな傲慢な態度に、サー・シャはどこか不安を覚えた。

「……ゲイルのこと？ 彼なら

「おいおい、何だよこの人ごみは？ 今日パー・ティーがあるなんて聞いてないぜ」

中にはいる。そう言おうとする前に、玄関から食事を中断させられて虫の居所が悪そうなゲイルが現れた。

「よくも俺たちを騙してくれやがったな。この疫病神が」

グレンの不遜な態度は、相手がゲイルでも変わらない。相手にやつて態度を変える男ではないが、それにしてはやけに強気だ。

「疫病神？ なに言つてんだお前。脳ミソにシワ足りてるか？」

「そうよ。二人は村を救つてくれたじゃない。騙すなんて言いがかりだわ」

サー・シャが文句を言い返すと、グレンは地面に唾を吐く。まるで彼らに村を救われた事を、不愉快に思つてゐるようだ。

「目を覚ませ。それがあいつらの手口だつたんだよ」

「手口？ いつたい何の話よ？」

「こいつらが村に来てから、碌な事がありやしない。でかい地震が起るわ、そのせいで大岩が転落するわ。まるでこいつらが災厄を運んできたみたいじゃないか」

そんのはただの偶然だ。こじつけや後づけなどいくらでもできる。靴を放り投げて明日の天気を予測するのと同じで、何の根拠もない。

だがグレンを始め、彼の後ろにいる村人たちは口々にそうだそุดと離したてる。彼の言つた仮定ですらないものを、眞実だと信じて疑つていない。

「そうやって自分たちが引き寄せた事件を解決して、こいつらはまんまと俺たちの信用を得やがつたのさ。怪物を村に手引きするためにな。こいつらはハナつからこの村を滅ぼすためにやつてきた、怪物の手先なんだよ！」

グレンの力説に、何という事だ、ああ恐ろしいと村人たちが騒然となり、人々の目が恐怖と嫌悪に染まっていく。

「アホかこいつは……」

突拍子もないわ言に、ゲイルは心底呆れて溜め息を吐く。くだらない茶番をさつさと終わらせて、早く食事に戻りたいという顔だ。

「ちょっと待つてよ。一人は怪物からあたしを助けてくれたのよ。

その彼らがどうして怪物の手先なのよ？ 理屈がおかしいわ！」

「じゃあサー・シャはこいつらが怪物を倒す瞬間を、その目で見たのかよ？」

「そ、それは……見てないけど……」

たしかに、サー・シャはゲイルが怪物を倒すところを見たショックで氣絶してしまい、目が覚めたらすべてが終わっていた。人が怪物を倒すなんて信じがたい事だけに、目撃者がいない点をつかれるとどうの音も出ない。

「そもそも、ただの人間が怪物を倒せるわけがないんだ。ましてやたった一人で丘の大岩を持ち上げたり、素手で破壊するなんて非常識にもほどがある。要するに、こいつらは人の皮を被った怪物なんだよ。化け物だから、あんな真似ができるんだ」

グレンがゲイルとサムを指さすと、村人たちから悲鳴が上がった。聴衆は完全にグレンの話を鵜呑みにしている。こうなるともう彼らに冷静な判断は期待できない。

「皆さん、落ち着いてください。まずは話し合いましょう」

とことん冷静かつ紳士的なサムが、牧師のような穏やかな口調で両手を広げる。自分には争う気はないという意思表示だろうが、巨体の彼がすると熊が立ち上がり威嚇しているよう逆効果に見える。

「あんたも黙つてないで、何か言い返しなさいよ。自分たちが疑われてるのよ！」

「フン、化け物か……。まあ、間違っちゃいねえわな」

サー・シャは当事者の一人であるゲイルに反論を促すが、彼は困惑と皮肉の混じった複雑な表情を浮かべているだけだ。

サムの必死の説得も虚しく、村人たちから再度野次が飛ぶ。つい昨日まであれほど二人に感謝していたはずの村人たちは、ついに足元の石を拾つて二人に投げ始めた。サムはすかさず一步前に出て、ゲイルとサー・シャを石つぶてから守る。

「おい、やめろ！ サー・シャに当たる」

グレンが彼らを制しても、一人また一人と投石する人が増える。

サムの鋼の体に石が当たり、はね返る音が人々の罵声の中に飲み込まれた。

サー・シャは彼らの中に、今朝野菜をくれた老婆の姿を見つけて愕然とした。今朝まであんなに一人に感謝していた彼女が、何故この場にいるのだ。何があつたら、こんなに短時間で感謝が嫌悪に変わるので。それとも人間というのは、ここまで容易に態度を変えられるものなのだろうか。人とは、かくも醜いものなのか。

集団に紛れ、しゃがれた声を精一杯張り上げて罵倒し石を投げる老婆の姿を見て、サー・シャは涙がこぼれそうになる。

悲しかつた。一人が村人たちに憎まれているのもそうだが、何より人がこんなにも醜いと思えてしまう事が悲しかつた。生まれてからずつと同じ村で暮らしてきた人たちの中身が、こんなに汚らしくて卑しいものだつたなんて。それとも、自分では気がつかないだけで、自分も彼らと同じなのではないだろうか。立場が違えば、自分も一人を責めたてるために集団に加わっていたかもしれない。だから彼女は、ただ悲しかつた。

庭の田ぼしい石を投げ尽くしたのか、ようやく投石が終わつた。

「我々は貴方たちに危害を加える気は毛頭ありません。それよりもむしろ、貴方たちを助けたいのです。ですからどうか皆さん、我々を信用してください！」

荒ぶる群衆を前に、果敢に説得を続けるサム。だが興奮した村人たちには「嘘をつけ！」だの「黙れ！」などと叫んで聞く耳を持たない。それを待つていたかのように、グレンが隣の村人に松明を渡して前に出る。

「だいたいその団体が怪しいんだよ。悔しかつたら鎧を脱いで顔を見せやがれ」

「それは……無理です」

「ホラ見ろ！ 見せられないようなモンが中に詰まつてゐに決まつてる。お前の中身は怪物だ！」

サムが答えに窮すると、グレンは鬼の首を取つたかのように喜々とする。まるで主徳と関係のない事を取り沙汰して、そもそもそれが証拠だとばかりにはしゃいでいる。完全に揚げ足取りだ。

だがサムも負けではない。少なくとも、彼はグレンよりも聰明で弁も立つ。口ゲンカや論争なら、決して負けはしないだろう。無論ケンカになつても負けはしないが。

「待ってください。百歩譲つてもし我々が怪物の手先、あるいは怪物そのものだとしても、その目的はいつたい何なのですか？」

「決まつてゐる。俺たちを油断させて、中から村を襲うつもりだ」

間髪入れないグレンの答えを、サムは鼻で笑う。まるで子供の幼稚な想像だと言わんばかりだ。

「私が怪物だつたら、そんなまだつこしい事はしません。そもそも、怪物がどうして村人を懷柔しなければならないのです？ そんな事をしなくとも、このような小さな村などあつさりと全滅させ

る事ができるはずです。つまり、貴方の仮定は根本から間違っている

「グレンが「ぐ……」と唸ると、村人たちからも「やつ言えばそうだ」などとぞわめきが起ころ。

「そんな手間をかけてこの村に潜入するメリットが、どこにあるのですか。この村のどこにそんな価値があるというのです」

冷静になつて聞くと失礼な言い方だが、まさにサムの言つ通りだとサー・シャは思った。怪物が餌を欲しさに村を襲うのなら話は解かるが、わざわざ村人を騙して潜入する理由などこの村にはない。またもやグレンは唸る事しかできなかつた。

扇動されて興奮していた民衆は、指導者の論破される姿によつやく冷静さを取り戻しつつあつた。ひそひそと話し合い、自分たちの行いが本当に正しかつたのか疑問を持つている。

あと一押しすれば、彼らの誤解はすべて解ける。そう感じたのかサムが遂にどどめの一撃を放つ。

「それなら貴方がたには、我々を怪物の手先だという証拠があるのですか？」

決定打ともいえる一言。そんなものあるわけがない。グレンの下らない言いがかりも、これですべて打ち砕けたかに見えた。

だがグレンはやりと笑う。その余裕の笑みに、サー・シャは嫌な予感がした。

「二人が怪物の仲間だつていう証拠なら、ここにあるぜー！」

そう言つとグレンは、何やらボロ布の塊のようなものを一人の前に放り投げた。それはどさりと地面に落ちると、ぐぐもつた呻き声を上げる。

松明の頼りない灯りの中、もぞもぞとボロ布の塊がうごめく。やがて塊から泥に汚れた顔や手足が伸び、ボロだと思っていたものが、小さな子供の姿へと形を変える。闇夜を見通す目を持つサムは、真っ先にその人物に気づき驚愕の声を漏らした。

「ボーエン…………」

サムの掠れる声に、サーチャははつと息を飲む。ボーエンは地面を引きずり回されたよつとあちこち泥にまみれ、顔や手足は傷だらけだった。

「お前らはこのガキに、怪物たちが移動している事を口止めしていたそうだな。何故口止めする必要がある？ まるで知られたら困るみたいじゃないか。怪物の情報を隠蔽した事が、お前らが怪しいという証拠だよ！」

劇的な逆転を果たしたように、グレンが高らかに笑う。そして村人たちもまた、再び一人に向けた疑惑や憎悪を復活させていた。

「ひどい…………」

少年の有り様に、サーチャが悲痛な声を漏らす。

誰よりも早く、サムが少年の許に駆けつけた。屈みこみ、大きな手で小さな体をそつとすくい上げると、少年は傷の痛みに小さな呻き声を漏らす。

「ボーエン、しつかりしてください…………」

恐る恐る声をかけると、少年は体をぴくりと震わせ、ゆづくりと目を開いた。だが片方の瞼が大きく腫れあがつており、その痛みに声を上げる。

「や、サムさん…………」

少年はサムの顔を見ると、ぼろぼろと涙を流し始めた。だがそれは痛みや安堵の涙ではなく、悔しそうに歯を食いしばり嗚咽を漏らす、無念の涙だった。

「ごめんなさい…………。約束したのに僕、僕…………」

傷の痛みよりも、約束を守れなかつた悔しさで流れる少年の涙に、サムはようやくすべての事情を察した。グレンは暴力をもつてボーエンに喋らせた秘密を、ゲイルとサムを貶めるために用いたのだ。サムの掌の中で、ボーエンが嗚咽している。暴力に負けてしまつた事に悔いて泣いている。サムは自分との約束を守るために傷だらけになつた少年の涙に、回路が焼きつくような後悔の痛みを感じた。

こんな幼い子供を、己の権力を守るために痛めつけたグレンも許せないが、こうなる事を予期できなかつた、あの時の自分を殴り飛ばしたい。何て浅慮な事をしたのだと、過去に戻れるなら今すぐそうしたかつた。

「すみません、ボーエン……。私のせいです……」

サムは自分が置かれている立場を忘れ、ただ少年のために後悔と懲愧の念に埋もれていた。

見ているだけで辛くなるサムの悲しそうな背中に、サー・シャは思わず隣に立つゲイルの袖を掴んだ。何か言つて欲しくて袖を引っ張るが、ゲイルは何も言わず、ただ腕を組んで見ている。まるで興味がないと言わんばかりの態度に、袖を掴んだ手から力が抜け垂れ下がつた。

胸が裂けそうな痛みに耐え切れず、下げる手を胸の前で組む。胸の奥が軋む音が、手を伝つて聞こえそうな中、隣で奇妙な音が聞こえた。

ぱりぱりという音のするほつと目を向けると、ゲイルが憤怒の形相で歯を食いしばっている。サー・シャが聞いたのは、彼が怒りを噛み殺す音だったのだ。

「野郎……何でコトしやがる……」

「ゲイル……」

腕を組み、歯がすべて折れそうなほど歯を食いしばるゲイルに、サー・シャは驚いて声を失った。村人たちに罵倒されても、まったく動じないよう見えた彼が、組んだ腕に指がめり込み、ともすれば血が噴き出しそうな激しい怒りを必死に抑えている。

サー・シャはこれまで、ゲイルは血も涙もない冷血漢だとばかり思っていた。だが自分の事を悪く言われるより、小さな子供が傷つけられた事に怒りを覚えている。今にもグレンに飛びかかりそうな自分を必死で抑えていた姿は、とても冷たい人間には見えない。

本当は彼も感情を露にし、涙を流したり怒りを誰かにぶつけたいのかもしれない。けれどそれをしないのは、何か深い考えがあるからか。地震の時の冷酷な態度と、今の熱い血潮をひた隠しにする姿。そのどちらが本当の彼なのか、サー・シャには見分けがつかなくなってしまった。

怒りを堪えるゲイルと、悲しみに暮れるサム。二人の姿を見て、

サー・シャはいたたまれなくなつた。人を信じ、裏切られ、厚意を憎悪で返された彼らの心が、どれだけ傷ついたのかは想像できない。きっと今の二人には何を言っても慰めにはならないだろう。

では、いったい自分に何ができるのか。そもそも自分が森にさえ入らなければ、怪物に襲われさえしなければこんな事にはならなかつたはずだ。そうすればきっと、今頃彼らは目的に向かつて旅をし続けていただろつ。責任の一端は自分にあるという想いが、サーシャの胸をさらに締めつける。

同時に、痛みの強さだけ怒りが湧いてきた。二人をこの村に連れてきてしまった原因が自分だとしたら、二人をこんなに苦しめている原因は何だろう。

考えるまでもない。今日の前で楽しそうに笑つてゐる下衆野郎だ
こいつは村長の孫という以外は、何の取り得も知恵もないただの筋
肉馬鹿だ。小さい頃、よくケンカで泣かせてたらムキになつて鍛え
たらしく、体だけは強くなつた。だが頭の中はあの頃のまんまだ。
どうせお山の大将の地位が危なくなつたので、ゲイルたちに逆恨み
をしたのだろう。

そんな事で

そんなくだらない事のために

一直線に目標に迫る。

グーレン！」

グレンはサー・シャに名を呼ばれ、愉悦から冷める。見れば、彼女が自分の名を呼びながら、こちらに走つてくるではないか。きっと今頃になつて間違いに気づいたのだろう。恐ろしい怪物の近くにいるのが怖くなつて、もつとも頼れる自分にすがりに来たのだ。そうグレンは想像し、サー・シャを抱きとめようと両手を広げる。

「おお、サービス……」

「一の馬鹿つ！」

恍惚とした表情のグレンの股間に、サーシャは全力で蹴りを入れ

た。幸せの絶頂にいたグレンの顔が見る見る苦痛に歪み、脂汗が滝のように流れ。少女の容赦も手加減も微塵もない一撃に、ゲイルを始めその場に居た男たちは全員同時に自分の股間を押さえて「あ……」と苦悶の声を上げる。

「なんて事やらかしてくれてんのよ！」

サー・シャは、白目をむいて倒れているグレンの前で、仁王立ちになつて叫ぶ。

「あんた自警団のリーダーでしょ！ 村と村人を守るのが仕事でしょ！？ それがなんでみんなの不安を煽るようなこと言つてんのよ！ まったく、あんたはいつもいつも考えが足りないんだから！ グレンから返事はない。代わりに口から泡が出てきた。これはかなり危険な状態かもしれない。それでも構わずにサー・シャは熱弁を振るう。

「二人は何も悪いことしてないじゃない。それをよつてたかって石を投げたりするなんて、人として恥ずかしいわ。それともみんな、二人に助けてもらつた恩を忘れちゃったの？」

「た、たしかにこいつらは村を守ってくれた。だがなサー・シャ、俺たちに隠し事をしていたのも確かなんだ。何か疚しいことがあるからとは思わないのか？」

集団の中から一人の男性が声を上げると、他のみんなもそつとうだと相槌を打つ。

「だつたらどうして二人に直接理由を訊かないのよ。大勢で押しかけたりしないで、もっと穩便に済ませられる方法を考えなかつたの？ そもそも小さな子供をあんな目にあわせるような奴の言う事なんて、よくもまあ信じられるわね！」

「し、仕方がなかつたんだよ……」

サー・シャが青筋立ててどやしつけると男性は気圧され、言い訳するような言葉も尻すぼみになる。他の連中も俯いたり、前の人の背中に隠れたりしている。

「何が仕方ないのよ！ 自分たちが助かるためなら、何をやって

もいいと思つてゐるの？ 人としての誇りや尊厳つてものはないの？」

「うるさい、お前に何がわかる！」

それまで大人しかつた男性が、突然感情を爆発させたように反論した。

「俺たちだつてな、やりたくてやつたんぢゃないんだ。家族を、村を守るために仕方なくやつたんだ！」

集団からも、男性に同意するように「そうだそうだ」「仕方なかつたんだ」と声がする。その悲痛な声に、サー・シャはこれ以上彼らを責める事ができなくなつた。

「怖いんだよ……怪物が……」

最後に男性は、噛み締めた歯の間から絞り出すような声を出した。男性の悔しくて辛そうな顔に、サー・シャはようやく思い知つた。男性たちの世代はかつて徴兵に遭い、怪物討伐に狩り出された世代なのだ。

彼らは実際に怪物と戦つた経験があるから 怪物への恐怖がその身に、その心に染みついているから 怖くて仕方がないのだ。命からがら生き延びて、ようやく得た今の平和な生活は、何が何でも手放したくない。そんな切実な思いが彼らを動かしていた。それに気づいてしまつたサー・シャに、何が言えるだろう。徴兵で父親を失つたとはいえ、サー・シャは後の平和な時代しか知らない。戦わなかつた者が、戦つてきた者を責められるわけがない。彼らの行いを、彼女が裁けるはずがない。

お前に何がわかる。仕方なかつたんだ 言葉の重みが、サー・シャの心にずしりとのしかかる。

彼らの怪物を恐れる気持ちは責める事はできない。だが人としての心を失つた彼らの蛮行は、責めずにはいられなかつた。

「あたしだつてねえ……」

「え……？」

「あたしだつて怪物は怖いわよつ！ この間森で怪物に襲われた時は、そりやあもう死ぬほど怖かつたわよ！ 一人が助けてくれな

かつたら、今こうしてあたしは生きていなかつた。だから一人には感謝してもしきれないくらいよ。そりやあちょっと馬鹿で無神経で不潔で大飯食らいだけど、そんなこと関係ない。あたしは一人の事を信じてる。だつて、彼らはあたしだけじゃなく、この村も救つてくれたんだもの。一度ならず二度も救つてくれた人を、あたしは絶対疑わないし疑いたくなんかない！だから彼らの無実はあたしが保証するわ。文句があるなら順番にかかってきなさいよ！」

サー・シャは息継ぎもせず一気に喋りきつた。息を乱す彼女の姿に、村人たちが圧倒され呆然としている。

「さあ、どうするの？ あたしと、そこでのびてる馬鹿野郎のどつちを信じるの？」

サー・シャが腕をまくつて一步前へ踏み出すると、村人たちが彼女の迫力に圧されて二歩下がる。

仁王立ちするサー・シャの前で、村人たちの会議が始まった。ようやく意見がまとまり、一人の男性が代表で発表する。

「……まずは一人の話を聞いてみよう。信用するかどうかは、その後だ」

随分消極的な意見だ。しかし話し合いをしようという気になつてくれたのは大躍進だろう。とにかく今はお互い話し合つて、誤解を解くのが最優先だ。

「じゃああたしはこの手の手助けをしてくるナビ、あなたたちはちゃんとみんなと話しあっておくわよ」

「ボーホンの事、よろしくお願ひします」

「あ、おこ……」

少年をおぶつて家に向かつて歩き出さうとしたサーチャを、ゲイルが呼び止める。

「なに?」

「あのゲス野郎をのしてくれてありがとうよ。おかげでスカつとしちゃんとみんなと話しあつておくわよ」

「……あれは、あたしも頭に来たからやつただけよ。お礼を言われる事じゃないわ」

「……そつか」

「それにお礼を言つのはあたしが先。森で助けてもらつたお礼、まだ言つてなかつたもん」

ありがとう、とサーチャが笑顔に感謝を込めて礼を言つと、ゲイルがぽかんと口を開けて見つめていた。

「……なによ?」

「いや……別に……」

「変なの」

そう言つてまた笑うと、サーチャは家に向かつて歩き出した。こんな状況だが、思わず小さくガツツポーズをとつてしまつ。何故なら、よひやくゲイルにお礼を言えたからだ。

サーチャが家中に戻るのを見届けると、ゲイルは肅々と整列した村人たちに向かつてフン、と鼻を鳴らした。

「まあ、その……なんだ。俺たちも、良かれと思って黙つてたんだが……誤解を招いたようで悪かったな」

ぶつきらぼうなゲイルの謝罪に、村人たちが一斉に「おお……」と感嘆の声が漏らす。よもやこの男から、こんな殊勝な言葉が出るとは思いもしなかったに違いない。

「だからまあ、こつからはお互にぞひくばらんに行けりや。」
ゲイルが顎で促すと、サムは自分の役目とばかりに前に出て朗々と語りだした。もちろん怪物たちが実は何者かに作られたものである事や、自分たちはその何者かを捕らえに来た事。そして自分たちが宇宙連邦治安維持局の特務捜査官で、この惑星の人間ではないといつ点は伏せてだ。

ケガをしたボーエン少年をコードに預けたサー・シャが戻つてみると、家庭がちょっととした村の集会場みたいになっていた。

「ま……話し合つのはいい事よね」

とは言つものの、どうやらお互に平行線のようすで、喧々囂々とした雰囲気に先が思いやられる。

「ちよつとちよつと、何をそんなにもめてるのよ?」

見かねたサー・シャが集団の中に割り込むと、サムがちよつといい所に来たと言わんばかりに救いを求めた。

「それが実は……」

サムの説明によると、怪物たちが火山に移動しているのを隠していた事は、村人たちも一人が自分たちに余計な不安を与えないための配慮だからと納得してくれた。

だが問題は、集まつた怪物たちをどうするか、だ。そのまま放置しておけば、いつ大挙して村に押し寄せてくるかわかつたものではない。

「怪物たちは私たちが駆逐すると言つているのですが……」

「さすがに我々も、その言葉だけでは安心できない。きちんとしろた確約か保証がなければ、あんたたちをこの村から出すわけにはいかないんだ」

サムの言葉を遮るように、男性が口を挟む。どうやら彼が、臨時

の代表として一人と交渉しているようだ。

「ですが、こればかりは我々を信じてくれとしか言いようがない。」「だがそれで？ ハイそうですか、お願ひします？ つて見送れるわ

ません」

「だがそれで？ ハイそうですか、お願ひします？ つて見送れるわけないだろ」

彼の言つとおり、二人が逃げ出さないといつ保証はどこにもない。村人たちの主張は当然だが、これではいつまで経つても話は平行線だ。

「そういえば、グレンは？」

はたと思い出し、サーチャはグレンの姿を探す。だが泡を吹いて転がつていたはずの彼の姿は、どこにも見当たらなかつた。

「ああ、あの馬鹿なら縛り上げて、猿ぐつわかまして納屋に放り込んであるぜ」

「彼がいては、まとまる話もまとまらなくなりますからね」

「違ひねえ。だが、お前の金的がそつとう効いたみたいで、ありや朝まで目が覚めないだろ？ ゼ」

くつくとゲイルが笑うと、村人たちからも笑いが起つる。サーチャは自分が笑い者にされているみたいで、何だか恥ずかしくなつた。彼女もあの時は、一秒でも早くグレンを黙らせなければいけないと気が急いでいたので、緊急措置としてあんな真似をしたのだ。

「と、とにかく、問題はそこなのね」

「ええ。おかげでさつきから水掛け論です」

「なるほどね……」と話題を反らしてはみたものの、確かにこれは難問だ。

「火山に集まつた怪物たちが、村にやつてくるといつ可能性はあるの？」

「それはわかりませんが、少なくとも今のところ火山から離れる心配はないでしょう」

ふむ、とサーチャは腕を組む。今のところがどれくらいなのかは定かではないが、当座の安全はサムが保証している。かと言つてそ

のままにしておいて良いという事ではないが。

「じゃあさ、村の近くに来た怪物だけ倒して、徐々に数を減らしていくつていうのはどう? これならあんたたちも、またしばらく村に居られるじゃない」

「それは根本的な解決にはなりませんし、時間がかかり過ぎます。私が得た情報では、火山周辺に集結した怪物の具体的な数は、二万八千七百十三体。それを一体ずつ始末していくとなると、かかる時間がざつと

「あああ、ごめんなさい、今のナシ」

二万八千七百十三体。膨大な数と言つていたが、まさかそこまでの数がいるとは予想もしていなかつた。具体的な数字を知られた人々は、そのあまりに桁外れな数の怪物が、今こうしている間にも自分たちの住んでいる村の近くに集まり続いている事実に改めて恐怖した。

「我々が行かなれば、怪物はどうにか数を増やすでしょう。何故ならあの火山こそが、怪物の巣のようなものなのですから」

村人たちが、口々に唸り声を上げる。具体的な解決案が出ないまま、不安要素だけが増えていく。前に進むこともままならないまま、止まることもできない。こうしている間にも足元の崖はどんどん後ろから崩れて追い詰められていく。

焦りばかり募る。迫り来る恐怖が、人々の心を押し潰さんと圧力をかけている。こんな事なら、始めから何も知らずに安穩と過ごしていたほうがましだつたと、今になつて後悔する。一人もそれを予期して秘密にしていたのだろう。それでも、知つてしまつたからにはやれる事をやらなければならぬ。

「お前ら、しばらく村を離れたらどうだ?」

「無理だ。第一、他の村人たちに何と言つたらいいんだ? それに俺たちは、生まれ故郷のこの村を捨てる気にはなれない……」

感情論で否決され、ゲイルは面白くなさそうに頭をかきむしる。

今はまだそれほど危機的状況ではないにしろ、いづれはそんな悠長

な事を言つてゐる暇などなくなるのだ。しかし、今はまだそんな時期じゃないからこそ、村人たちの意見は尊重しなければならない。

なりふり構わず村を捨てて逃げるのは、最後の手段にしたかつた。

サー・シャもこの村を捨てるという案には賛成できない。住み慣れた村という事もあるが、それ以前にどこに行けばいいのかわからなかつた。それにこの村を捨てたとして、移り住んだ新しい場所に怪物が現れないという保証はどこにもない。

保証　またこの言葉か。神ならざる人の身で、誰がそんなものを与えられるのだろう。さつきから何度も出るこの言葉が、村人たちと二人の枷となつてゐる。この言葉がつきまとつ限り、話し合ひはこれ以上一步も進展しないだろう。

(つまり、二人がちゃんと怪物たちを退治しました、という明確な証拠があればいいのよね)

約束という目に見えないものでは駄目だ。もつとはつきりと、形ある何かを村人たちに提示できれば、彼らもきっと納得してくれるだろう。

証文。手形。どれも形となつてはいるが、お互いの信頼という無形のものがなければ成立しない。つまり村に戻つてくるとは限らない二人が相手では、この方法は意味がないのだ。

何か別の　たとえば一人が村に戻らなくとも、怪物がいなくなつたと村人に伝える方法があればあるいは……。

「そうだ！」

突然大声を張り上げたサー・シャに、全員の視線が集まる。

「あたし、いい事思いついた！」

自信満々の笑顔を向けるサー・シャだが、彼女を見る人々の目は、ただ啞然としていた。

昨夜はとうとう眠れなかつた。窓を開けると、朝日が日にしめる。サーチャはいっぱいに開いた窓から乗り出し、庭を眺める。ゲイルとサムを村から追い出そうと、村人たちがあそこに集まつたのはたつた一日前の事だが、随分昔の事のようにも思える。

「あたしが一人に同行して、結果をみんなに報告すればいいのよ」これは名案、という顔でサーチャが話を続けようとすると、横からサムが「ちょ、ちょっと待つてください」といかにも心配そうな素振りで待つたをかけた。

「危険です。とても賛成できません」

「お前がいたら足手まといだ。怪物の数を考えろ。とてもじやないが、お前を庇いながらどうにかできるってレヴェルじゃねえぞ」最後にアホかとつけ加え、ゲイルも反対の意を示す。最後の台詞が余計だが、二人とも自分の事を心配してくれているのは嬉しかつた。だが話はそこで終わりではない。

「まあまあ待ちなさいって。人の話は最後まで聞けって、ママに教わらなかつたの？」

「……誰のマネだよ？」

苦笑いするゲイルに、サーチャは「へへー」とおどけて舌を出す。

「ま、それはおいといて。あたしだつて危ない事はイヤだし、二人の足を引っ張るつもりは毛頭ないわ。だから、同行つて言つてもただ一人についていくだけ。勿論、怪物と戦つている時はずっと遠くで隠れてるわ。で、すべてが終わつたら、それを確認して村に戻つてみんなに報告するの。そうすれば、みんなも納得安心できるでしょう？」

「どうだとばかりに腰に両手を当て胸を張ると、一同はおおと感心

する。サー・シャは人々の反応に、うんうんと頷いた。これなら危険はほとんどないし、村人たちの不安も解消できる。

「保証がないなら、保証人を立てればいいのよ」

「それは確かに名案ですが……どうして貴方が？」

「あたしには、あんたたちを村に招いた責任があるわ。誰が行く

かでもめるなんて時間の無駄だし、あたしが一番適任だと思うの」

「しかしだな、リネアとじいさんが何と言つか……」

ゲイルは一人がこの話を聞いたらどんな顔をするか、想像するだけで頭が痛いようだ。二人は今ボーエンの治療をしているのでこの場にいないが、早晚知る事になるだろう。

「おじいちゃんとお母さんにはあたしから話すわ。だからみんな、余計な事は言わないでちょうどいい」

真剣な面持ちでサー・シャが言つと、村人們は黙つて頷いた。彼らにしても、厄介ごとを進んで引き受けてくれたサー・シャの好きにさせたほうが良いと考えたのだろう。もし土壇場になつて心変わりを起こしたり、彼女の家族が反対すれば、いつたい誰がこんな危険な役目をやりたがるというのか。後はただ、当日までにサー・シャが上手く家族を説得してくれて、彼女の気が変わらない事を望むばかりである。

「なら話はこれで決まりね。あんたたち、出発はいつ？」

「三日後です。それまでには、怪物たちがすべて火山に集まるでしょう。そこを私とゲイルが叩きます」

「じゃあみんなはあたしが戻るまで、いつも通り過／＼すつて事でいいわね？」

村人たちがうんうんと首を縦に振る様子を満足そうに見回すと、サー・シャはそういえば、と思い出す。

「一番厄介なのが残つてたわね……」

と納屋のほうへ視線を向けると、みんながああそつだつた、と溜め息を漏らす。

「あの馬鹿をこのまま野放しにしたら、絶対に何もかもおじやん

にするに決まつてゐる。賭けてもいいわ」

「いつその事、彼も連れて行きますか？」

「勘弁しろよ。何の罰ゲームだ？」

「しかし彼を」のまま放置しておるのは、三歳児に一人で留守番

をさせるより不安ですからねえ」

三歳児だったら、寝かしつけておけば楽なんだけどね……」

「何気なし一言を放つた

アーチーの冒險

「何だよ、難しく考える必要なんてなかつたじやねえか。始末す

ねえせ

日記

にたりと笑いながら、ゲイルは手の指をぱきぱき鳴らす。その笑みは暴力よりも、何の罪悪感もなく捕まえた昆虫を解体する子供を連想させた。だが下手に邪氣がないだけに、サー・シャの脳裏に不吉な想像がよぎる。

「ちよつと待つて。こんなのも一応知り合いだから、あんまり
酷い事はしないでね」

一安心した、殺しあしねえよ。ちよいと向田が睨むのもううだ
ナだ

鹽檜山から

あ、いん、お手柔らかにね

一抹の不安を抱きながら、納屋の中へと消えていく一人を見送ると、すぐにグレンのくぐもった呻き声が漏れ聞こえてきた。

ぶううううううううううううううううううううん。

恐怖にひきつった悲鳴が、虫の羽音のような音にかき消される。やがて音がやみ、しんと静まり返った納屋から、一仕事やり終えたような顔をした一人が出てきた。

「ふう、これで数日は目を覚まさないだろ？
出てもいな額の汗を、手首で拭うゲイル。グレンはぐつたりとしたままサムの肩に担がれ、だらしなく涎を垂らしてぴくぴくと痙攣している。

ほんのわずかな時間で廃人と化した幼馴染の姿に、サー・シャは中でいつたい何があったのか不審に思つたが、とりあえ外傷はない生きているからまあいかといつ事にした。あとは適当に空いてるベッドに寝かせておいて、彼の面倒はリネアに任せればいい。

とにかくこれで懸案事項が一つ片付いた。気がつけば、夜もかなり更けている。村人たちには明日も仕事があるので、今日のところはこれで解散してもらつた。

ぞろぞろと帰つて行く村人たちを見送りながら、サー・シャは何事もなく無事に話し合ひが終わつた事に一安心する。そしてその一方で家族にどう説明しようかと思案するが、今は感情を爆発させた余韻が残つてゐるせいか、上手く頭が回つてくれなかつた。

一晩寝れば、頭も冷めて良い知恵が出てくるだろう。そう思つてその日は床についたサー・シャだつたが

あれから一日。サーチャはリネアと「コード」何も話せないまま、時間だけが過ぎてしまっていた。

村人たちを納得させた時のように、家族にも同じ事が言えると思つていた。だがいざ話そうとすると、サーチャの心に言いようのない違和感がよぎる。何かが引っかかり、二人に自分がゲイルとサムに同行すると言えなかつた。

一緒に行く事を後悔などしていない。ゲイルとサムを信用しているし、一人に同行する事に迷いはない。むしろ自分にしかできない、自分がやらなければならない事だと自負している。

だが心のどこかで自分に嘘をついていると感じたから、家族に話す事ができないのだ。

「はあ……」

思わず溜め息が出る。出発は明日なのだ。今日中に話をしておかないと、最悪の場合、家出少女よろしく置き手紙を残して出発するなんていう事になつてしまつ。

それこそ最悪の方法だ。そんな事をしたら、どれだけ家族が心配することか。下手をすると、心労で祖父が倒れる危険性もある。ただでさえ病床にある老体に、これ以上鞭を打つのはさすがにまずい。いつそ自分の代わりに、サムに説得してもらおうかとも考えた。彼なら一人の信頼も厚いし、何より口が達者だ。理論的かつ誠意をもつて一人を説得してくれるに違いない。

けどそれでは意味がない。やはりこついう事は、自分の口から言うべきだろう。だけど何が自分の中で引っかかっているのか、まったく見当がつかない状態では説得しようにも説得力がない。特にリネアは母親だけあって、嘘は通用しない。たとえわざかでもごまかそうとしたり、嘘をつこうとしたら即座に見破るだろう。とにかく何とかしないと。

解決の糸口も掴めないままだが、ここにじつして悩んでいても始まらない。明日の今頃には出発しているのだ。

サー・シヤは今日中に絶対何とかしないと、と心に決めながら朝食を作るために部屋を出た。

「とうとう明日出発ね。一週間つて早いわあ」

寂しくなるわね、といつリネアの言葉に、「コードも黙つて頷く。最後の晩餐となつた食卓では、しんみりとしたリネアとコードをよそに、ゲイルは相変わらずの食欲を見せつけていた。

ゲイルとサムが怪物退治に向かう事は、コードやリネアの耳にも入つているが、村人たちの情報規制によりサー・シヤが同行する事は知らされていなかつた。

「本当に、行くおつもりですか？」

自分たちの身を案じる「コードの低い声に、皿に伸ばしかけたゲイルの手が止まる。サー・シヤはゲイルが余計な事を言わないかどきりとして、下げるよと重ねていた皿の山をかちやりと鳴らした。

「死に行くつもりは毛頭ねえよ。それに、怪物退治はついでだ」ゲイルの声には、まるで氣負つたものがない。本当に怪物の事などついでの仕事みたいだ。コードのはあ、と拍子抜けしたような返事とともに、サー・シヤもはあ、と息をつく。まさかここで「お前の孫も連れて行くけどな」なんて暴露された田には、これまでどう切り出そうかと悩んでいたのが、すべて水の泡になつてしまつではないか。

危ない危ない、とサー・シヤがゲイルをじろりと睨むが、当人は何も気づかずに新たに到着した料理に手をつけている。

「ふう、ごっそさん」

「あら、もういいの？ まだまだたくさんあるわよ」

追加を作りに台所へ向かおうと腰を上げたりネアが、拍子抜けしたような声を出す。

「いや、明日に備えて今日はもう寝るわ。残りは明日の弁当にで

も詰めてくれ、「

いつもに比べるとかなりあつたりと食事を終え、ゲイルは席を立つた。

「はいはい。じゃあ明日はたくさんお弁当作るから、途中でお腹が空いたら食べてね」

「頼んだぜ。じゃあおやすみ」
「はい、おやすみなさい」

背中越しに手を振つて挨拶をすると、ゲイルは家の外に出た。リネアは皿を片付け始め、「コードは食後のお茶をすすっている。きつとゲイルはサーチャに家族と話をさせるために、早めに食事を切り上げたのだろう。無神経だと思つていたが、意外などいろいろあるものだとサーチャは少し感心する。

せつかくゲイルが気を利かせてくれたのだ。この機会を逃すわけにはいかない。このままずるずると引き延ばせるほど、時間は残されていないのだ。

「ねえ……お母さん」

「ん？ なあに？」

後片付けをしているリネアに、サーチャは意を決したように話しかける。緊張して唇が乾き、言葉が上手く出でこない。

「どうしたの？」

「あのね……あたし、あたしね……」

「あの二人と一緒に行きたいのね？」

「えっ、お母さん、どうしてそれを……？」

言おうとしていた事を先に言われ、サーチャは驚いて皿を丸くした。だがリネアは不思議な事は何もないといつぶつな顔で、娘の顔を見る。

「あなたの事なら、お母さん何でもお見通しよ。おじこちゃんだつてそり」

サーチャが祖父のほうを振り返ると、コードは黙つて頷いた。いつもと同じ柔軟な顔だが、細めた皿の奥には怜悧な光を秘めている。

「あの夜以来、お前の様子がいつもと違っていたからな。何か悩んでいるのだろう? というのは、すぐにわかった。昔からすぐ顔に出るたちだからね、お前は」

「あなたのそういう所は、あの人につくりね……」

気づいた素振りなどまったく見せずに、二人は待つていてくれたのだ。黙つて出て行く事はしないと信じて、サー・シャガ自分から話してくれる事を。

「お母さん……、おじいちゃん……」

二人に信頼されている事と、二人の信頼を裏切る事をしなくて良かったという安堵が、サー・シャの目頭を熱くする。

「それで、あなたはどうして一人について行きたいの?」

それは、とサー・シャは一度口をつぐむ。言葉を探すというより、深く暗い穴の中に手を入れて、本当に掴みたいものを探すみたいに自分の心の中を探る。だが穴の中は様々なものに溢れ、どれが本当に欲しいものかわからない。

「最初は命を助けてもらつた恩返しどか、一人を村に連れてきちゃつた責任感とか、そういう義務みたいなものだつて思つてた。けど

「けど、違つたの?」

リネアは優しく問い合わせるが、娘は小さく首を振る。

「わからないの。確かに義務感みたいなのはあるけれど、それが本当じやないような気もする。義務として割り切りたい、でもそうしたくないって気持ち。こんなのが、どう言えばいいかわからないよ」

答えが見つからず、サー・シャは頭を抱える。

「いいのよ、無理に言葉にしなくとも」

泣き出しそうな顔で俯く愛娘を、リネアはそつと抱きしめた。

「人の気持ちっていうのは、とても複雑なの。それを無理に言葉や形にすると、本当に大事な伝えたい事が壊れてしまう時があるわ。だからそういう時は無理をせずに、ただ思った通りに、自分の心がそうしなさいと命じるまになさい。そうすればきっと、あなたの

気持ちがそのまま相手に伝わるわ

母の柔らかいぬくもりに包まれていると、サーチャの中で固く凝り固まつたしこりのようなものがふわりとほどけていく。そして綻びのようほじけたものの中に、自分が本当に探していたものが見つかつたような気がした。

「お母さん……」

「大切なのは、あなたが自分で決めること。あなたが本当にそうしたいのなら、お母さんたちは反対しないわ」

「ありがとう……」

サーチャは母の背に手を回し、強く抱きしめた。リネアも娘を抱く腕に力が入る。お互いにしっかりと抱き合つた母娘を、ゴードは目を細めて見ていた。

ほんの一週間前に通つた道が、がらりと様相をえていた。

村からほとんど出ないサー・シャだが、それでも年に数回は通る街道。それがまるで、これから新たな町を建設するかのように開拓されている。

怪物がこぞつて移動しただけでこのありさまだ。もし意思をもつて村や町を襲いだしたら、誰が止められるというのだろう。

「あ、いた……」

サー・シャは目の前を歩くゲイルとサムの背中に向けて呟く。

一人は飄々としたのっぽの優男ふうで、とても荒事に向いているとは思えない。どちらかと言うと、町のいかがわしい酒場で客引きをしているほうが似合っている。

もう片方はいかにもと言つか、もう荒事以外の仕事が似つかわしくないといった風貌。全身鋼の鎧で身を固めた、雲つくような大男だ。背はサー・シャの倍近くあり、手足の太さは三倍以上ある。体重にいたつては比較したくないほどの巨躯。

この一見正体不明の凸凹コンビが、これから数万の怪物たちと戦に行くという話を、いつたい誰が信じるだろう。大道芸の一座から逃げ出したとしか見えない二人が、この国を救う救世主だと、誰が想像つくだろう。

だがサー・シャだけは知つていて、一人が誰よりも、何よりも強いという事を。

この一人なら、幾千万の怪物を相手にしても引けを取らない事を。だからサー・シャは一人に「気をつけて」なんて言わない。これら死地に赴こうとしているというのに、まるで散歩しているような足取りで歩く一人の背中に、そんな台詞は野暮というものだ。

小高い丘の上で、一行は立ち止まつた。山頂しか見えなかつた火山が、ここからだと一望できる。

火山へと続く大地は、すでに数多の怪物に踏み荒らされ、ただでさえ荒涼とした地面がでたらめに均されている。草木一本どころか蟻の一匹もいない。巨大なこてを引きずつたような跡が、何千何万と伸びている。そしてその先には、遠目で見てもわかるほど怪物たちがひしめき合つてゐる。腐つた倒木の皮を引っ張りげすと、びつりと張り付いている得体の知れない虫のように、おびただしい数の怪物たちが二人を今か今かと待ち受けている。

何という数だ。これだけ距離があるというのにはつきりと分かる。小さな虫がうごめいていると錯覚しそうだが、あれら一つ一つが森にいた怪物と同じくらいの大きさなのだ。小山のような怪物たちが群れて集まり、火山の麓を埋め尽くしている。

「うひやー、いるわいるわ。いつたい何匹いやがるんだ？」

「最新の観測データですと、二万八千」

「あゝわかつたわかつた。だいたい三万つてどこか。ノルマが一人一万五千。こりや結構な肉体労働だぜ」

ゲイルはフンと鼻を鳴らし、手を額に当てて麓にできた怪物の海を眺める。

「キヤサリンからの後方支援はないのか？ なんかこう、ビーム兵器でざーっと一掃するみたいな氣の利いたやつ」

「残念ながら。下手に爆撃などで地殻に刺激を与えると、火山が噴火する恐れがありますので」

「なにい。じゃあこれだけの数を素手で相手するのか？ 時間がいくらあつても足りやしねえぞ」

やつてられんとばかりに髪をかきむしるゲイルに向けて、サムは右手の人差し指を立てて左右に振る。

「落ち着いてください。すでに手配はしています」

さて、とサムは着けてもいない腕時計を見る仕草をすると、どこからか口笛のような音が聞こえてきた。

「なに、この音……？」

空気を切り裂く音はじょじょに大きくなり、三人の真上を通過したかと思うと、突然巨大な何かが空から落下してきた。

「きやあっ！」

「うおっ！ 何だあ？」

いきなり轟音とともに巨大なコンテナが目の前に落下し、大量の土砂が三人に降り注ぐ。ゲイルとサー・シャは衝撃で転び、頭から土を被つた。

「なに？ なんなの？」

「ペッペッ……口ん中に土が……」

落下の衝撃で舞い上がった土煙が晴れると、まだ大気の摩擦で煙を上げているコンテナの前で、サムが満足そうに仁王立ちしていた。

「ふむ、座標ぴったり。さすがキヤサリン。いい仕事をしますね」コンテナをバンバンと叩くサム。一边の長さがサムの身長とほぼ同じくらいあり、コンテナというよりはむしろちょっとした小屋だ。家具や機材さえあれば、中に入れるだろう。

「馬鹿野郎！ 衛星軌道からコンテナを投下するなら、もっと離れた場所に落とせ！」

「あまり離れた場所に落とすと、中のものを取り出す前に敵がこちらに向かってくる危険性があります。なので極力至近距離に投下するのが適切だと判断しました」

言いながらサムは、コンテナの側面にあるパネルを操作する。ごつい指で器用にボタンを押すと、ばしゃんと中の空気が吐き出される音がしてコンテナの上部が開く。観音開きになつたコンテナに手を入れると、サムは中に収納されていたものを無造作に取り出した。

「使い方はわかりますね？」

取り出した黒くて長い鉄の塊をゲイルに放り投げる。常人なら持つことすらままならない大きな鉄塊を、ゲイルは棒切れのように受け取つた。

鉄の塊は、形だけは銃に見える。だが大きさが比較にならない。

「メートルはゆうにある砲身は太さが大人の腕ほどもあり、銃口の大きさは子猫が中を通つて遊べるくらいだ。そして本体の下部に接続された弾倉は、どう軽く見積もつても百キロはあるように見える。銃本体と合わせると、総重量がいくらになるか見当もつかない。

「フン、誰に言つてやがる」

ゲイルは新しいおもちゃを渡された子供のような笑顔で、軽々と銃を構える。ずしりと手に伝わる重量感。陽光を受け黒光りするボディ。そして染み込んだグリスと油と火薬の混じった臭いが実際に頼もしい。

「どちらが多く仕留めるか競争するか?」

「いいですね。でもどうせなら、何か賭けませんか?」

「当然。そのほうが盛り上がる」

コンテナから新たにサムが取り出したものは、先にゲイルに渡した銃の倍以上の大きさがあった。そして同じものをもう一つ取り出す。

「で、何を賭けます?」

「……いきなりイカサマかよ」

恐竜でも一秒で挽肉ミンチにできそうな巨大ガトリング砲を二丁拳銃にするサムに、ゲイルは舌打ちをする。

「やめだやめ。こんなんじゃ勝負になりやしねえ。そんな事よりそろそろ始めるぞ!」

「了解 つとその前に」

サムがコンテナの中身をすべて外に放り出ると、お手玉のよつて予備の弾倉が宙を舞い、次々と地面に突き刺さる。

「失礼」

「きやつ……」

サムはひょいとサーチャを抱えると、すっかり空になつたコンテナの中にそつと下ろした。

「ちょっと、何するのよ?」

「この中なら安全ですので、しばらくここで大人しくしておいて

ください」

「あ、ちょっと待つて」

「御機嫌よう、サーチャ。また後でお会いしましょう」

サーチャがぴょんぴょん跳ねて文句を言うが、構わずサムはコントナの蓋を閉める。完全密閉しなければ窒息することはないし、強度については先ほどの衛星軌道からの投下で実証済みだ。大気圏突入にも耐えるコントナの内部は、間違いなくこの惑星で最も安全なシェルターだろう。

「お待たせしました。では参りましょう」

すっかり待ちくたびれたゲイルは、への字口を笑みの形に曲げる。

「フン。お前、最初からあいつをあれに入れる気だつたな？」

「『』明察。あれなら誤つて火山が噴火しても、充分耐えられますからね」

「ま、あれなら怪物が踏んでもびくともしねえだろ」

「耐久性能だけはお墨付きですからね」

違ひない、とゲイルは笑つて背を向ける。サムもすぐに後に続き、二人は火山に向けてゆっくりと歩み始めた。

待ち構えるは、約三万の怪物。それに一步、また一步と近づく二人の間には、さぞ張り詰めた空気が流れているかと思いきや

「ところでサム。こんな骨董品、いつたいどこから調達して来たんだ？ たしか特務^{うち}捜査課の武器庫には、こんなのなかつただろ」肩に担いだ銃をひょいと持ち上げるゲイルに、サムは含み笑いをして「知りたいですか？」ともつた言ひ方をする。

「なんだよ、言えよ」

「ダラズ・ウェストパック課長殿の個人的な蒐集物^{コレクション}から、無断で失敬してきたんですよ」

サムがとんでもない事を暴露するや否や、ゲイルは高らかに笑い出した。

「あいつの私物をちよろまかして來たのか？ おまえ最高だな！」

愉快痛快極まりないといった感じで、ゲイルはサムの背中をバシバシ叩く。

いくらゲイルたちには骨董品でも、この惑星の科学力では明らかに過剰技術^{オーバーテクノロジー}だ。本来任務で使用する火器や道具を已む無く破棄する場合は、原型を留めないほど破壊しなければならない。そうしないと原住民に身の丈以上の技術を与える可能性があるからだ。しかしいくら緊急事態とは言え、装備や武器を破棄すると始末書^{ペナルティ}が下るのだが、今回は話が違う。むしろここで使い潰して、粗大ゴミにしてしまつていいのだ。

「しかも押収した証拠品の横流しですから、盗難にあっても表沙汰にできませんしね。まあ彼のような蒐集家^{マニア}の手元で埃を被るより、我々が有効活用してあげたほうが銃も喜ぶでしょう」

「そうだな。最後に使って供養してやるのが、せめてもの情けつてやつだ」

「物は使つてこそですか、らね」

「違うねえ。だがお前も手癖が悪いな」

「貴方の相棒ですから」

「ハツ、それも違うねえ」

思い切りピクニック気分で楽しく雑談していた。

いくら並外れた破壊力の武器を装備しているとはいっても、この余裕はいつたいどこから湧いてくるのだろうか。

圧倒的な数の怪物を相手にするという恐怖や、絶望的な現実が彼らに現実逃避をさせているわけではない。彼らはこれまでも、こんな感じで飄々と気軽に、まるで近所にふらつと散歩に行く感覚で戦場を渡り歩いてきた。そしてこれからも、彼らが本来の目的を果たすまで、こうやって鼻歌まじりに死地を歩いていくだらう。何故なら、彼らは知っているからだ。

この程度の修羅場など、修羅場と呼ぶに値しない事を。

彼らが行く先には、こんな怪物たちなど比較にならない悪鬼羅刹が待っている事を。

そして自分たちがそんなものになど負けない、この宇宙で最強の存在だという事を。

その搖るぎない自信と覚悟があるから、たとえ視界が埋め尽くされるほどの怪物が、今まさに自分たちに向かつて来ていようが、まったく焦りも怯みもなく、あたかも自分の家の玄関から外に出るようの一歩を踏み出せる。

ゲイルが肩に担いだ銃を構える。安全装置セイフティを解除し、設定は勿論フルオート。秒間十発の咆哮を上げる野獸の鎖を解き放つ。

「サム、火器管制解除《FCIS》。目標の左翼を集中攻撃。俺は右翼を叩く」

「了解」

サムが応答すると同時に、両手に持ったガトリング砲の砲身が勢いよく回転を始める。

毎分六千発の、鉛弾という死の宣告を届ける死神が一門。荒野を

血の海に変える地獄の使徒が、唸りを上げて引き金を引かれるのを待ちわびる。

「やあ、害虫駆除の始まりだ」

我 最強なり。

地響きを鳴らして迫る畜物たちの怒涛に、ゲイルの声がかき消される。

それはまるで、この戦いの幕開けを告げるブザーのようだった。

三つの銃が火花を咲かせると、次々と怪物たちが爆ぜる。前の者が倒れれば、その屍の上を新たな怪物が踏み越える。もはや掃討戦とも呼べない、一方的な虐殺が展開している。

大量生産される死骸と、垂れ流される体液。辺りには異臭と硝煙の混ざった臭いが立ち込め、銃声と雄叫びが耳をつんざく。ここがどこだと訊かれたら、人は単純な一言を発するだろう。

地獄　と。

地獄絵図という言葉が具象化したものが、今まさに田の前に存在していた。

蟻頭はその大きさのせいで、移動速度が極端に遅い。いかに数が圧倒的とはいえ、距離をとつて狙い撃ちするだけなら子供でもできそうだ。もつとも、これだけ巨大な銃が子供に扱えたの話だが。

「つたく、のろまを力壬撃ちするのはいいが、次から次へと湧いてきてキリがねえぜ」

砲身から撃ちだされる弾丸が、連続で蟻の頭を破壊していく。埋め尽くす怪物の多さに、流れ弾でさえどれかに当たる。これなら田をつむつても当たるだろう。

「今度は本当に目をつむらないでくださいね」

「わあってるよ。クソ、古い話を持ち出すな」

腹に数発の弾丸を受け、怪物は狂ったように吼える。生命力の高い怪物は、緑色の体液をぶちまけながらもなおこちらに向かつて來た。

「馬鹿野郎！ 弾がもつたといないから頭を狙え！」

ゲイルの怒気の籠つた指示に、サムは銃口を上げる。焼けた火の玉が怪物の頭に真っ直ぐ伸び、熟れた果実のように瑞々しい音とと

もに弾けた。それきり怪物は動かなくなるが、次の怪物が押しのけるようにしてまた前に現れる。

夜店の射的のように、次々と怪物の頭を吹き飛ばす。まるで何かのまじないのように、頭のない怪物が奇妙なオブジェを作つていった。一人の足元には空になつた薬莢が数え切れないくらい散らばり、ゴミのように弾倉が転がっている。

それでも怪物の押し寄せる勢いはいささかも衰えず、ゲイルとサムの銃身は焼けて熱をもつてなお火花を上げざるを得ない。だが目標を両翼に分けた一斉射撃は、怪物の波を三等分していた。

「山」という字を逆さにしたように、中央を除いた両翼の怪物たちが見る見る数を減らしていく。だが山の字が1の字に変わる前に、銃の弾が切れた。

頬を伝う汗を拭う事も忘れて、男は食い入るようにモニター画面を見つめていた。

画面には、レーダーのように無数の青い点が表示されているが、それが瞬きする間も与えないくらいの速度で消滅していく。かつては画面を埋め尽くさんほどにあつた点は、今ではその数を半分近く減らしている。このままのペースで減少していけば、あと一時間もせずにするべくが消えるだろう。

「何だこれは……」

その問いに答えられる者は、この場にはいない。それ以前に、言葉を話せる者は彼以外いないので。

だがこの場にいるのが彼一人というわけではない。彼の背後では数人が機械の調節をしたり、制御板を操作している。しかし彼らは皆、首から上がどう見ても人間のものではない。人の体に蜘蛛の頭部を強引に乗せた奇妙な生物が、科学的な装置を黙々と操作している。八つの目がどこを見ているのかわからないが、モニターを注視している主人の指示に従つて立ち働いていた。

彼らがいる部屋は、その人数にしては馬鹿みたいに広く、薄暗い

部屋にはいくつもの巨大なパイプが天地を貫いてそびえ立っている。パイプたちが「うんうん」と呻き、反響した音は高い天井へと広がり、そして明かりが届かない闇へと吸い込まれていく。

パイプの根元には何かの装置があり、蜘蛛頭がせつせと操作盤をいじっている。今ゲイルたちと戦っている怪物たちは一線を画した、高い知能を持つているタイプのようだ。その分体のサイズが人間に近く、頭の事をえ意識しなければ科学者のように見えなくもない。

男が蜘蛛頭たちの作業を急がせると、パイプの唸る音が大きくなる。まるで大地からすべてを吸い尽くすように、天地を貫くパイプたちが「う」めぐ。

こうしている間にも、画面の中の青い点はもの凄い速さで減っていく。早くしなければ。男の焦りが募るが、あまり事を急いでまた同じ過ちを繰り返してしまう。慎重に、だが急いで作業をしなければ。

男が再度画面を見ると、もう青い点は最初の半分ほどになっていた。

「チツ、さすがに数が多くすぎる」

銃身が真っ赤に焼けた銃を手放し、ゲイルが舌打ちをする。地面上に落ちた銃は、飛び散った怪物の体液に触れ、じゅっと焦げた音と臭い煙を上げる。

「こちらも弾切れです。ですがこのまま連続射撃をしていたら、いずれ砲身が詰まつて爆発していただしよう。潮時というやつです」サムも両手から銃を離すと、ずしんと音を立てて銃口から煙が上がる。最後に咲かせる一花としては充分なほど活躍した、満足して吐く溜め息のような煙だった。

「あとは肉弾戦か。銃も嫌いじゃないが、俺にはやつぱロッヂのが性に合ってるぜ」

ゲイルは両の拳を打ち合わせる。だがいくら銃撃で数を減らした

とはいって、やうに半数は残っている。ざつと一万五千の敵が、ゆつくりとは言えもう田の前に迫っていた。

「よつやつと折り返しかよ。数が多くてうんざりするぜ」

「このまま残った敵を蹴散らすだけなら簡単ですが、それだとちよつと面白みが足りませんね」

生真面目なサムにしては珍しく、戦闘に遊び心を求める提案にゲイルは思わず笑みをこぼす。

「何かおかしな事を言いましたか？」

「いや……お前からそんな言葉が出るとはな。ここ数日で随分丸くなつたもんだ」

「お忘れですか？　こつ見えても私は貴方の分身。つまり一心同体なんですよ」

「忘れちゃいないさ。俺たちは一人で一人、つまり一コイチだ。そこで相棒、一つ提案がある」

ゲイルは不審な顔をする相棒に向けて、いたずらを思いついた子供のような笑顔を向ける。絶対ろくでもない事を考えているに違いない笑みに、サムはおざなりに「はあ……」と答えた。

「残るは中央の団体さんだけだ。ここで最も有効な戦略は何だと思つ？」

「それは」

「そう、前後からの挟撃だ」

「……え？　いや、まだ何も」

「つまり、お前が敵の後方に回り込み、俺と挟み撃ちするんだよ」

「はあ……」

答えなど最初からどうでもいいのか、ゲイルは勝手に話を進める。どうせこんな事だろうと思っていたサムは、余計な冗句を入れて話の腰を折つてもゲイルがヘソを曲げるだけだと正しい判断をし、仕方なく話を合わせる。

「ですが、どうやって敵の後方へ回り込むのですか？　さすがに飛ぶには距離がありますよ」

「いい質問だ。俺もそれを思案していたんだが」「

当然の疑問だという感じで頷き、ゲイルはサムの背後に回る。

「今さつき、いい方法を思いついた」

ゲイルはやおらサムの足元にしゃがみ込み、彼の右足を掴む。

「俺がお前を投げる」

「え？」

言つが早いかゲイルはサムを持ち上げると、その場で回転を始めた。

「うおおおおおおお！」

体重一トンのサムが遠心力で加速し、軸となつたゲイルの足が地面に穴を掘る。

「必殺、相棒投げ『サム・トルネード』！」

できたらほやほやの技名を叫びながら、ゲイルはハンマー投げの要領でサムを投げた。

ゲイルの手を離れたサムの巨体は、砲弾の如く怪物の群れに向かって飛ぶ。

（やれやれ。どうせこんな事だと思いましたよ……）

空気を切り裂く速度で地面と水平に飛びながら、サムは諦めたようになじめ息をついた。だが猛烈な勢いで迫る怪物の姿に、すぐさま思考を切り替える。今考えるのはゲイルを責める事ではない。どれだけ効率よく敵を殲滅するかだ。

（だとすると、このまま敵陣を通過するだけでは芸がありませんね）

サムが両手を横に振ると、手の甲から超振動ブレードが飛び出す。

「必殺、流血の輪舞」フランティロンド

両腕を広げたまま体を高速できりもみさせ、鋭利な刃を持つ巨大なプロペラと化したサムは、怪物を切り刻みながら敵陣を一気に通過する。

回転をやめ、地面を十数メートルほど削りながら着地を決めると、

一拍の間を置いてサムが通過した直線上にいた怪物たちが一斉に体液を撒き散らして倒れた。

「あの野郎、俺よりかつこいい名前つけるたあ味な真似を……」

遙か後方で、お株を奪われたゲイルが歯噛みをしている。普段なら必殺だの秘技だの恥ずかしい台詞は言わないサムだが、ゲイルの悔しそうな顔を見ると、たまには相棒の真似をしてみるのも悪くない気がした。

「センスの差が出てしましたね」

すぐさま踵を返すと、サムは敵陣後方に向けて速攻をかける。サムの突然の登場に気づいたものの、方向転換の遅い怪物たちは対応できない。のろのろと巨体を引きずる怪物たちを、サムは両腕のブレードで次々となます切りにしていく。

怪物の体液が飛び散り体を濡らす。せっかく洗った装甲が汚れた不快感に、サムは無い眉をひそめた。

その時、背後から急接近する物体の存在を知らせる警報アラームがサムの中に響いた。これまでにない識別反応だ。

（速い！）

攻撃の気配にサムが身をかわすと、間一髪のところで怪物の爪が空を切った。

すぐさま体勢を立て直し、攻撃してきた相手を探す。すると目の前に、自分と同じくらいのサイズの怪物がファイティングポーズをとっていた。

今まで蟻頭クラスの巨大な怪物ばかりに気を取られていたが、どうやら怪物は一種類ではなく、サイズや体型のバリエーションが何種類があるようだ。目の前の怪物は、蟻頭とはサイズも体型もまるで違う。頭が昆虫に近いのは仕様だろうが、これは蟻よりも蜂に似ている。胴体や手足がかなり人間に近く、恐らくは機動性や汎用性を重視したタイプなのだろう。筋骨隆々の外観だが、装甲のような外骨格は高い防御力を持っていると推測できる。きっと二人の撃つた銃弾さえも耐え凌ぐに違いない。いや、きっと効果がなかつたか

ら、今こうしてサムと対峙しているのだ。

(やれやれ、これは思ったより樂をさせてくれそうにありませんね)

サムは内心で溜め息をつくと、両腕のブレードを収める。試してはいなが、この怪物の装甲にはあまり効果がないだろう。余計なエネルギーをブレードに回すよりは、少しでも運動エネルギーに使う方が良策だ。

蜂頭はサムを威嚇するように、顎をきちきちと鳴らす。氣のせいか蟻の頭よりも蜂の頭のほうが凶暴に見える。そして蟻頭よりも戦闘に特化しているのは、先の奇襲から容易に窺えた。

(疙り合ひはゲイルのほうが似合つているのですが……)

銃や剣のようにスマートな戦いが好みのサムにとって、ゲイルのように徒手空拳で戦うのはあまり趣味じやない。だが好き嫌いを言える場合ではないので、仕方なくもつとも原始的な戦闘に移行する。先に動いたのは蜂頭だった。しゅんと風を切るような音とともに、一瞬でサムとの間合ひを詰める。そして鋭い爪のついた手を振るうが、いつも簡単にサムに受け止められた。

「まあ、好みじゃないからといって、苦手とは限らないのですがね」

サムに掴まれた蜂頭の手が、ぎちぎちと軋む。プレス機よりも強い力で締めつけられ、指が枯れ枝のように折れた。

苦痛の悲鳴を上げる蜂頭。すかさずサムはその頭を両手で掴み、飛びかかりざまに右の膝蹴りを入れる。

山を搖るがすほどの強烈な膝蹴りに、蜂頭の顔面にヒビが入る。だが生命力も虫並みなのか、まだ絶命には至らない。

「刺突モード」

次の瞬間、どん、といつ音とともにサムの膝から杭が飛び出す。圧縮空気によつて射出されたパイルバンカーの先端が、蜂の顔を突き破つて後頭部から出た。

だがまだ蜂頭は倒れず、顔に刺さつた杭を抜こうと手をかけた。

何といつ生命力だ。しかしサムは、やつはせせじとせりて置みかけ
る。

「スラフ 削撃モード」

蜂頭に刺さった杭の表面がばくんと避ける。杭はドリルに変形し
て高速回転を始め、蜂の頭を掘削する。

ドリルとなつたパイルバンカー 略してドリルバンカーが唸り
を上げ、蜂頭の外殻が卵の殻を剥くように弾け飛ぶ。顔をほじられ、
蜂頭は痙攣しながらいろんな色の体液を飛ばした。

杭の回転が止まると、蜂の頭にはすっかり空洞ができる、向こうが
見えるようになつた。すかすかになつた顔から杭を抜き、サムが着
地する頃、ようやく蜂頭は生命活動を停止させた。

まずは一匹、と一息つく間もなく、サムの周囲に同種の蜂頭が集
まる。周りをぐるりと囲んだ蜂頭が舌なめずりをするように顎を鳴
らす。

「何だか笑われているようで不愉快ですね。たつたそれだけの数
で取り囲んだくらいで、もう勝つた気になつていてるのですか?」

サムの言葉が理解できるのかいないのか、蜂頭たちは顎を鳴らし
ながらゆつくりとサムに近づき聞合ひを詰める。

ふう、とサムは呆れたように息を吐く。

「やれやれ……舐められたものです。では教えてさしあげましょ
う

すると、サムの左膝から右膝と同じ杭が飛び出す。

次に両腕を軽く曲げると、両肘からも杭が飛び出す。

計四本のドリルバンカーが回転し、獲物を早く貰きたくて堪らな
いと吠える。

「 ゲイルに必殺の技があるよつこ、私には色々と奥の手があ
るといつ事を」

怪物たちが何者かに破竹の勢いで倒されている事は、モニター画面に表示された青い点を見ればわかる。だがその正体がわからないこんな事なら、怪物の位置を把握するためのエネルギー観測装置だけでなく、監視用のカメラを研究所の外に仕掛けなければ良かつたと男は後悔する。

この部屋にはエネルギーに関する装置しかないので、外の様子はまったくわからない。せいぜい二つの何かが自分の作った怪物たちと戦っているというのがわかるくらいだ。

二つの何かは、今も怪物たちを次々と倒していく。

まさかこの惑星の兵器ではあるまい。この星程度の科学力で、怪物たちが倒せるわけがない。かつて何度か軍隊らしきものが戦いを挑みに来たが、圧勝だったではないか。
だとしたら 。

モニターの画面を切り替える。怪物を示す青い点の他に、二つの赤い点が表示された。すなわちこれが敵だ。キーを操作すると、二つの赤い点にそれぞれグラフが数本つく。見る見る数値が増えるグラフに、男は愕然とした。間違いない。赤い点はこの惑星のものではない。何故なら、このグラフは科学的なエネルギーしか測定しないし、数日前に一度観測したデータも残っている。

だがグラフが表す数値が尋常ではない。まるで戦車、いや、戦艦だ。それも連邦宇宙軍の突撃艦クラスのエネルギー量が計測されていた。しかも数値はまだ増え続け、赤い点一つで艦隊クラスのエネルギーになろうとしている。

まさか連邦宇宙軍か、と思ったがそれも色々と解せない事が多い。赤い点の正体が戦艦だとしたら、もっと早く存在を感知できたはずだ。

それに戦艦による攻撃だとしたら、怪物の減り方が少ないようと思える。爆雷にしろ砲撃にしろ、戦艦が攻撃を開始したらいかに数万の怪物といえど、ほぼ一瞬で消滅してしまつ。

男はまたキーを操作し、青い点と赤い点を同時に表示する。そして一種類の点の動きを、リアルタイムで表示するように操作した。

「い、これは……」

思わず男は呻く。モニターには、一つの赤い点が目まぐるしく動き回つて青い点を消滅させている。これではまるで

「まるで各個撃破じゃないか……」

一つの何かが、一体ずつ怪物を倒している。しかも恐るべきペースで。そんな馬鹿な話があるか。効率が悪すぎる。何故一斉掃射や絨毯爆撃をしない。何の戦略や目的があつてそんな面倒な真似をする。

理解できない事だらけの状況に男は混乱する。理解できない事は、男にとって耐え難い事だ。

いつしか男は自分が置かれた状況を忘れ、モニターに見入つていた。理解できないなら、この目で直接見ればいい。そして手に取り、分析し、研究したい。科学者としての抗えない性に、男は身悶えした。

男が狂氣と苦悩に身をよじる背後の空間で、天地を貫くパイプたちがごうんごうんと唸る。

早く。早く。早く。早く。早く。もつと早く抽出せねば。そうすれば、一つの何かなど恐るるに足らなくなる。倒し捕まえ解体し、その謎を心ゆくまで、構成分子の隅々まで研究してやるつ。

パイプの唸りが激しくなる。男が蜘蛛頭に指示を出し、作業の速度を上げさせたからだ。

もう慎重さも過去の失敗も男の中には無い。あるのはただ、早くこの不可解な一つの何かを研究したいという欲求だけだった。

ゲイルが超振動をまとった掌を蟻頭の腹に叩きつけると、腹の反

対側がぶくぶくと泡立つて爆ぜた。

蟻頭の腹の中には、体液がなみなみと詰まっている。そこに固有振動を与えてやれば、体液の分子が振動によりこすれ合つて沸騰する。電子レンジと同じ要領である。

ぐつぐつと煮えたぎる体液を噴出しながら、蟻頭の巨体が倒れる。それを見送る暇も惜しむように、ゲイルは次の獲物に掌底を叩き込んだ。

蟻頭に関するデータは、すでに何度も戦っているので充分過ぎるほど揃っている。怪獣大百科に蟻頭の項を作れと言われても困らないほどのデータは、かつて夜の狩りの時にサムが採取したものだ。それがあるからこそ、ゲイルは最速で蟻頭を倒す事ができる。

戦場の中で精神は限界を超えて高揚し、内燃氣環はいつになく絶好調。絶える事なく湧き出る無限のエネルギーが、ゲイルの体内で荒れ狂う怒涛となつている。今のゲイルなら、惑星でも破壊できるだろう。

「しかし楽なのはいいが、少々退屈だな」

難易度の低いゲームをやつているようで、いささか物足りなさを感じていたゲイルは、見た事もないタイプの怪物に囮まれて孤軍奮闘している相棒を羨む。

サムは同じ体格の蜂頭数体と同時に戦っていた。両手両足から生えたドリルバンカーは、サムの持つ近接格闘用装備のひとつである。ゲイルの目には、一度に四本すべて解放し、蜂頭を次々と穴だらけにしている姿がとても楽しそうに見えた。

「チ、あいつばかりモテやがって」

自分が雑魚キャラの相手をしている間に、相棒は新種の怪物とイチャイチャしている。何と羨ましい。ゲイルはいつまでもこんな敗戦処理投手のような消化試合をしているつもりなどない。だが何故か寄つてくるのはもう見飽きた蟻頭だけだ。こういう時こそローチンワークの得意なサムの出番だと思うのだが、森で最初の一匹を倒したのが因果なのか、さつきからずっと同じタイプの怪物しか目に

つかない。格下の相手ばかりさせられ、欲求不満が募る。もつと血を沸き立たせるような、熱いバトルがしたかった。

「クソ、俺もギリギリ限界バトルを楽しみたいぜ」

まるでレーシングカーで公道を走っている気分になる。エンジンはフル回転しているのに、アクセルを開けないもどかしさで苛々する。ギアが低すぎてエンストを起こしそうだ。

発散しきれない鬱憤をぶつけるかの如く、連続で二四匹の蟻頭を倒した。そして四匹目の蟻頭に固有振動を叩き込もうとしたその瞬間、いきなり蟻頭の腹を突き破つて槍が飛び出してきた。

「うおっ……！」

咄嗟に身をよじって槍をかわす。側宙をして地面に方膝をつくと、再び槍が襲ってきた。

すかさず体を横に投げ出し回避するが、槍はまるで意思を持つているかのようにゲイルを追尾する。地面を転がるゲイルのすぐ横を、槍が連続で突き刺し穴を穿つていった。

体勢を立て直し、ゲイルは槍から距離をとる。だが操る者のいい槍だけが、つこうつきまでゲイルが転がっていた地面に突き刺さつていた。

「どうなつてんだ？」

槍の使い手を探そうとゲイルが意識を反らした瞬間、槍の形状に変化が現れた。

「なんだあ……？」

五メートルほどの鋼の槍がいきなりぐにゅりと曲がったかと思うと、蛇のように地面にとぐろを巻いた。うねうねと身をくねらせる姿は蛇のようだが、目も口も何もないただの針みたいな姿は蛇に似た別のものを連想させた。

「ハリガネムシみてえだな……。宿主がでかいと、寄生虫まででかくなるのか？」

槍だと思われた寄生生物は、巨大な蟻頭から出てきたに相応しい体長だが、見かけはまさにあの寄生虫のハリガネムシだ。だが宿主

がまだ生きているにも関わらず外に飛び出し襲いかかってきたところを見ると、ただ寄生しているだけではなく独立した一個の戦力として機能しているのだろう。

つまりさつきの攻撃はただ宿主の身に危険が迫つたから飛び出した退避行動ではなく、むしろ最も有効なタイミングで敵を攻撃する奇襲戦法だったのではないか。だとしたら、宿主である蟻頭の体を顧みない行動から、巨大ハリガネムシは蟻頭よりも上位の存在かもしれない。

退屈していた戦闘に、テコ入れするかの如く登場した巨大ハリガネムシ。これからどんな展開になるか予想もつかない。

ちらりと地面に穿たれた穴を見る。大口径の銃弾が着弾したような跡は、巨大ハリガネムシがついさっき開けたものだ。突きの鋭さや威力は、ゲイルたちが乱射した銃弾と同等だと思われる。

従来なら銃弾など問題にしない。ゲイルが着ている戦闘服は防弾防刃に加え、防火耐熱耐寒などあらゆる外的要因に対応できる優れものなのだが、いかんせん今は故障中である。いかに科学の粋を集めた、宇宙空間ですら活動可能な戦闘服でも、機能してなければ電源の入つていない家電製品と同じで意味がない。ナノマシンが活動していないただの服でこんな攻撃を喰らつたら、全身穴だらけだ。

今のゲイルは、銃口を突きつけられた一般人と変わらない。だがあらゆる意味で一般人とは遙かにかけ離れた存在である彼は、だからこそ一般人には真似できない行動に出た。

「ヒイイイイイヤツホオオオウッ！」

若干巻き舌が入った絶叫とともに、ゲイルは巨大ハリガネムシに突進した。

「やっぱバトルにはスリルがないと、盛り上がらないよな！」

向かってくるゲイルに対し、巨大ハリガネムシが鎌首を持ち上げる。そしてバネのように収縮すると、ゲイルを串刺しにしようと飛び出した。

眉間に向けて、弾丸よりも早く打ち出された巨大ハリガネムシの

一撃を、ゲイルは前回し受けでさばく。すぐさま手を返してそれを掴むと、両手に持ちかえて力任せに引っ張った。

硬化テクタイトすら引きちぎるゲイルの筋力に、さしもの巨大ハリガネムシもゴムのように伸びる。鋼線に似た体が引き伸ばされ、繊維がぷつぶつ切れる。だが完全にしきれる前に、ゲイルの動きが止まつた。

「なに？」

気がつけば、ゲイルの足元から数匹の巨大ハリガネムシが這い出し、手足に絡みついていた。一匹だけかと思っていたが、すでに他の数匹が地面に潜つて身を隠していたのだ。蟻頭から飛び出してきたのは奇襲ではなくただの囮で、それに気をとられたところをまんまと絡めとられてしまった。

「ぐ……畜生……」

巨大ハリガネムシたちに拘束され、ゲイルは身動きがとれない。線虫たちの締め上げる力は思つたより強く、ゲイルですら容易に振りほどけないほどだ。並みの人間ならすでに五体がバラバラになつていただろう。

首に巻きついた一匹が、ゲイルの息を止める。脳に回る血液と呼吸を止められ、苦しさから手に持つた巨大ハリガネムシが滑り落ちる。地面に落ちた線虫はもう動かない。だが囮としての役目を果たした、名誉の戦死である。虫としては立派な最期だろう。

そして線虫の罠にかかりがんじ絡めのゲイルは、不名誉な戦死を目前に控えていた。

「う、動けねえ……」

一匹なら簡単に引きちぎれる巨大ハリガネムシでも、数匹まとめ絡まればその強度も数倍である。いくらゲイルが手足に力を入れてもびくともしなかつた。

首に巻きついた線虫が、気管や血管を締めつける。このままでは窒息するか首の骨が折れるかのどちらかだ。

だがそれすら待てないのか、ゲイルの目前の地面から新たな巨大

ハリガネムシが這い出してきた。まさか　と思うが悪い予感は外れる事はなく、線虫はゲイルに狙いを定めて今まさに己自身を発射しようとしていた。

「クソ、ここまでか……」

悔しそうに歯を食いしばるゲイル。絶体絶命のピンチに、さすがの彼も覚悟を決めたのか全身の力を抜いた。

「……な、んて言うとでも思つたのか？」

うなだれた顔を上げ、ゲイルがにやりと笑う。絶望も諦めもなく、むしろピンチを楽しんでいる笑み。敵の罠にかかるて、命が風前の灯火だというのに、その笑顔はあまりにも不敵。こんなピンチなどピンチの内に入らないという貌だ。

「なめんじやねえぞ、虫ケラがあつ！」

内燃氣環がフル稼働し、ゲイルの全身に力がみなぎる。筋肉が膨れ上がり、全身を締め上げる巨大ハリガネムシを押し返す。

「おおおおおおおおおおおおつっ！」

気合一閃。裂帛の気合とともに、ゲイルは体にまとわりついたすべての線虫を引きちぎった。

そして己の眉間に向けて飛んできた巨大ハリガネムシに、渾身の拳を叩き込む。

弾丸よりも早い槍ショックブーストと、石よりも硬い拳がぶつかる。だが線虫はゲイルの拳と衝突した瞬間、まるで猛スピードで壁に衝突した車のように蛇腹にひしゃげていった。なまじ壯絶な速度で衝突したため、ゲイルのパンチの速度が加算されて線虫自身が耐え切れない衝撃となつたのだ。

ゲイルが拳を振り切ると、音の衝撃が巻き起こる。空気の壁をも打ち抜く拳に、誰が太刀打ちできようか。弾丸ですら、彼を仕留めるには荷が重過ぎる。

体にへばりついた線虫の破片を払いながら、ゲイルは地面に転がった槍の成れの果てに告げる。

「虫ムカシ」ときが俺に勝とうなんて、百億万年早いぜ。だがまあ、そ

「そこ楽しかつたよ」

片手を上げ別れを告げると、ゲイルは新たな相手を求めて駆け出した。まだまだ敵はよりどりみどりだ。

どん、といつ音とともに激しい衝撃がコンテナを揺らす。部屋がびりびり震え、サー・シャは思わず「きやつ」と悲鳴を上げてうずくまつた。

コンテナには窓などなく、壁や天井から伝わるのはわずかな音や振動だけで、外の様子はまったくわからない。

外では何が起こっているのだろう。そう思った矢先の大きな爆音と衝撃が、サー・シャの不安をますますかきたてた。

サムにはこの中でじつとしていると言わただが、外の様子が気になつて仕方がない。だが壁には窓はもちろん扉のよつなものはまったくなく、入ってきた天井にはいくら飛び跳ねても指先すらかすりもしなかつた。

「んもう、どうして窓や入り口がないのよ…」

それはこれが貨物用コンテナで、中に入れる事を前提としていないから当たり前の事なのだが、当然サー・シャには知る由もない。散々コンテナを探索したり飛び跳ねていたが、疲れてしまつてその場に座り込んだ。鞄を開き、中身をすべて床にぶちまける。ほどんどが薬や包帯だつた。ゲイルとサムがどんなケガをするか判らないので、とりあえず持てるだけ持つてきたのだ。

もうサー・シャにできる事は、いつでもゲイルとサムの治療ができるように準備する事だけだ。

(一人とも大丈夫よね……。ケガとかしてないよね……)

あれだけの数の怪物を相手に、無傷で帰つてこれるとは思つていな。けれどできる事ならこれらが無駄になつてくれるよつにと願いながら、サー・シャは荷物の一つ一つを丁寧に床に並べて点検し始めた。

薄暗い室内では、蜘蛛頭たちが慌しく動き回つている。表情のな

い虫の顔だが、懸命に働く姿を見ているとちやんと忙しそうに見えるから不思議だ。

ばたばたと立ち働いている蜘蛛頭たちと同様、建ち並んだパイプたちも唸りを上げて稼動している。だがすでに作業は終了していた。今せつせと働いている蜘蛛頭たちは、作業の後始末をしているだけ。すべては順調に滞りなく、時間内に終了した。

男がもう見なくなつたモニターの画面には、すでに一つも青い点は存在していない。だが男の表情には焦りや恐怖はない。今は絶対の自信と、これから訪れる者をどう料理しようかという妄想で、薄ら笑いを浮かべる余裕さえある。

「待つていろ。この私自ら出向いて、貴様たちを解体してくれる！」

男の声が室内に反響する。まだ見ぬ被験体に向けられた声が、虚しく部屋の奥や天井に吸い込まれていく。そして声の木霊が吸い尽くされると、しんと静まり返つた。

静寂。

そして轟音。

唐突に天井が崩壊し、瓦礫が蜘蛛頭に降り注ぐ。何の前触れもなく襲いかかる瓦礫のシャワーに、蜘蛛頭たちはあっけなく押し潰されていった。

「な、何いつ！？」

もうもうと立ち込める砂塵の中、男は天井に開いた大穴を見上げる。すると大小二つの影が音もなく室内に舞い降りた。

ぽつかりと口を開けた大穴から、一陣の風が室内に吹き込む。風が砂埃を払うと、瓦礫の上に降り立つた二人の人物がはつきりと見える。

レーダーであれだけの戦闘力を見せつけられた男は、てっきり武装した戦闘機か新型の兵器が強襲してくると思っていたが、目の前に立っているのは丸腰の優男とただの人型作業機械だ。拍子抜けしそうになるが、よく観察してみると一人の体は緑に染まり、怪物の

ものと思われる粘液が滴つていて、信じたくないが、どうやらこの二人が赤い点の正体だ。

「貴様ら、何者だ！」

男が問いかけると、浸入者の一人が不敵に笑つた。

「宇宙連邦治安維持局だ。解かつたら茶の一つでも出しな」あれだけの数の怪物と戦つてここまでやつてきたにも関わらず、優男は息一つ乱していない。まるで普通に玄関から入つて来た訪問者 のようだ。

「宇宙連邦治安維持局？ 連邦學術院の狗どもが何の用だ？ それにどうやってここまで入つてきた？」

これまで製造したすべての怪物を倒して来た事もそうだが、二人がここまで侵入してきた事が驚きだ。この研究所への入り口は男しか知らないし、巧妙に隠してある。たとえ場所を知っていたとしても、嚴重な警備^{セキュリティ}が施してあるので第三者が通れるはずがない。

「簡単ですよ」と巨大な人型が半歩前に出る。

「火山の地下が本拠地だというのは、だいたい日星がついていました。怪物たちも恐らくここで製造していたのでしょうか。だとすれば、あれだけ巨大な怪物がどうして外にいるのですかね？」

ロボットがそこまで話すと、男は「解放用のゲートか……」と苦々しく呟く。巨大な怪物を研究所から外に放つために作ったゲートなら、正規の出入り口に比べ警戒は甘い。だが巨大な門ゆえに、正門よりも遙かに巧緻を尽くして隠蔽していたのだが、二人はそこから内部に侵入したというのか。

「私のセンサーをそんじょそちらのものと一緒にしてもらつては困りますね。あの程度の隠蔽工作など、隠していないのと同じです

よ

「審判の刻^{ジャッジメント}だぜ、おっさん」

優男はにやりと笑うと、男に向けて拳銃を撃つ仕草をした。

男はゲイルに撃ち抜かれたように、体をびくんと震わせる。まさかこんな辺境の惑星に、宇宙連邦治安維持局の捜査官がやってくるとは思いもしなかったようだ。それとも完全に潜伏したつもりだったのか。

「審判？ 貴様ら、私がいつたい何をしたと言うのだ？」

「おい、『トイツまだ自分のした事がわかつてねえみたいだぞ。サ

ム、言つてやれ』

「了解」

すぐさまサムが脳内にあるデータベースで検索すると、コンマ数秒で男と一致する人物がヒットした。

「元連邦学術院研究員、ジークレイ・アンジニアス。十年前、ある研究で惑星一つを崩壊に至らしめた罪で、学術院を追放されていますね」

ヒットした情報をサムが読み上げると、男 ジークレイの顔が、過去の暴かれたくない失態を開陳される恥辱に少しずつ歪んでいった。

「その研究とは、惑星内部のエネルギーを抽出し、人工的に生命体を生成するものですね。そして貴方は惑星のエネルギーを限界以上に吸い上げ、崩壊に導いた。この惑星でも同じ事を繰り返すつもりですか？ だとしたら、過去の失敗から何も学んでいませんね」

「なにい……機械人形風情が、何を偉そうに……」

「第一、まずどうやつて我々がここに来たかより、何故我々がこの惑星に来たかという考えが浮かばない時点では、貴方は二流なんですよ」

サムの辛辣な言葉に、ジークレイは歯噛みする。だが確かにその通りだ。この惑星は宇宙連邦治安維持局の管轄の中でもかなりの僻地に在るし、他の星に情報を送れるような科学力もない。だからこ

その星を使って研究を進めることにしたのだが、いつたいどうやつて彼らはこの星が怪しいと田星をつけたのか。

「エネルギーを吸い上げられた惑星がどうなるかという事を、貴方は考えもしませんでしたね。星が急激に瘦せると、自転や公転周期に乱れが出来ます。それを観測したからこそ、我々が調査のために派遣されたのですよ。どうせやるなら、もつとゆっくり吸い上げるべきでしたね」

「たしか十年前に惑星が崩壊した原因も、急激にエネルギーを抽出したからだつたよな。同じ間違いを一度するなんて、アホのやることつたぜ」

「馬鹿者！ あれは私の実験が失敗したわけではない。惑星のエネルギーを抽出するという本来の目的は達成しておる。それを連邦学術院の阿呆どもは、非人道的などと科学者にあるまじき批判をし、しかも私の研究に失敗などという不名誉な烙印を押して学術院から追放した……。たつた一つ星を破壊しただけで、だ」

「破壊しただけ……だと？」

ぎり、とゲイルは歯を噛み締める。

「てめえ、星一つおしゃかにしておいて、たつたそれだけってのはどういうア見だ？」

拳を握り締め、凄まじい形相で睨むゲイルに、ジークレイは失笑する。何を馬鹿な事を言っているのだという人を小ばかにした笑いに、ゲイルの眉間の皺がさらに深くなる。

「たかが未開の星一つ破壊して何が悪い？ むしろ私の研究の糧となれて、名誉な事ではないか」

「……おいおっさん、それ……本気で言つてんのか？」

「当然だ。こんな原始人どもの惑星がどうなるうと、私の知つたことではない」

ゲイルの喰いしばつた歯から絞り出す声にすら、ジーカレイは笑つて答える。彼にとって、この惑星の住民など自分が作り出した虫頭たちと同じ価値なのだろう。いや、むしろ彼の手足となつて働く

虫頭たちのほうが、価値があると言わんばかりだ。

「カミサマにでもなつたつもりか、この野郎？」

おめでてえな、とゲイルは吐き捨てる。高度な科学力を持つ者が、文明の未発達な惑星に行って悪事を働くのは往々にしてある事だが、ジークレイの研究は度が過ぎている。しかも抽出したエネルギーを使って怪物を作り、この星に住む人々を恐怖で苦しめている。これは明らかに人道に反する行為。そしてジークレイのような者こそ、ゲイルたち宇宙連邦治安維持局が取り締まるべき悪なのだ。

ゲイルは怒りを握りこんだ拳を開き、叩きつけるようにジークレイを指差す。

「決まりだ。お前のような外道は、法が裁く前に俺が徹底的に懲らしめてやる！」

「ほほほ。検査官！」ときが法を超えるか。それこそ傲慢というものがではないのか？

「別に傲慢じゃないさ。俺はただ気に入らねえ奴をぶつ飛ばすだけだからな」

「ちなみに貴方には黙秘権も、弁護士を呼ぶ権利もありませんからあしからず」

二人は瓦礫から飛び降りると、一気にジークレイへと突進する。だが男は不敵に笑うと、近くのコンソールを片手で操作した。

「うおっ……！」

「ややつ？」

ジークレイが何やら打ち込み終わると、突然室内の重力が消えた。ゲイルは勿論、体重一トンのサムさえ羽毛のようにふわりと宙に浮く。天井の瓦礫やその下で押し潰されていた蜘蛛頭の死骸たちも、同じくふわふわと浮かんだ。

「クソ、何だこりや？」

「どうやらここにはあらかじめ重力を制御する装置が仕掛けられていたようですね」

「ンなこたあわかつてゐよ。つたく、これじゃあ上手く進めねえ

！」

じたばたと宙を泳ぐゲイルとサムを、ジークレイは愉快そうに眺める。どうやら自分だけは重力の影響を受けないようにしているのだろう。彼の足は以前と変わらず地に着いたままだった。

「くははははっ、どうだ。いくら特務捜査官と言えど、こりやつて重力を操作してやれば無様に宙を漂うことしかできんだろ。滑稽な姿よのう」

「づらづら大笑いすると、ジークレイは続いて別のコンソールを作する。するとどこからか一本のチューブが彼に向かつて伸びてきた。

チューブの先端には注射器に似た接続端子がついており、ジークレイはそのチューブを掴むと自ら首の後ろに突き刺した。

「ふん！」

ぐちゅり、と肉を突き刺す音がする。だがしさかも怯まず淡々と機械を操作すると、続いてチューブが唸りを上げてうごめいた。

「見るがいい。」れこそ私が研究を重ねた、惑星エネルギーの新しい使い道よ！」

どくんどくんと、惑星から抽出したエネルギーがチューブを通してジークレイに注ぎ込まれる。チューブが脈打つたびに彼の顔には血管が浮かび上がり、顔色が変わっていく。しかし紅潮しているかと思いきや、病人よりも青ざめたり死体のように土氣色になつたりとどう見ても尋常ではない変化をきたしている。

「く、う、ふふふふおおおお……ああああががががああああああああ！」

最初は快樂に身悶えていた声が、苦痛に抗つ悲鳴になつた。びくびくと体を痙攣させ、白目を剥いて涎をたらす姿は重度の麻薬患者を思わせる。

苦痛による悲鳴は息が切れても止めることができず、喉を笛のように鳴らせながら口を開閉させている。垂れ流しになつた涎を拭う事も忘れて体を震わせているジークレイの体が、突如膨れ上がつた。

どくん、といつ音がしそうなほど、男の体が膨らむ。体を震わせるたびに手足のあちこちが膨張し、衣服を破つても止まらない。

「ががががががががぐぐぐげご」……

新種のヒキガエルのような声と、肉が膨らみ骨が軋む音が重なる。耳をふさぎたくなるような身の毛がよだつ怪音に、ゲイルたちもふわふわ浮いている事を忘れて男に釘付けになつた。

ジークレイの体から無尽蔵に肉が溢れ、ついには見上げるほどの肉の塊になつた。血色の良いピンクの皮膚には赤や青の太い血管が網の目のように広がり脈打つてゐる。巨大な哺乳類の表皮を生きたまま剥いたら、こんな光景になるのかもしれない。うず高くそびえ立つ肉の山の中央に、ちょこんと申し訳程度にジークレイの顔が存在していなければ、ただの特盛り生肉にしか見えない。

「ふぬぐぐくはははは……見たかこれがエネルギーと生命体の究極の融合だ！」

左右の瞳が別々の方を向きながら、ジークレイは高らかに笑う。だがどう見ても特大の肉色アーバに人の顔が生えたようにしか見えない。それを究極の姿だ言わっても、誰もこうなりたいとは思わないだろう。

「ひでえな」りや。完全に容量をオーバーしてやがる」

「すね

ジークレイが自ら施したのは、虫頭たちのように無から有を作つたものとはまるで違う、生命の形を変えるものだった。人としての肉体を捨てたジークレイは、今や悪夢の象徴として二人の眼前にそびえ立つていた。

だがサイズが大きくなつたとは言え、見た目はただの肉の塊だ。醜悪な容姿から受けける精神的ダメージさえ何とかすれば、後は何ら脅威になる要素は見当たらなかつた。

「おい、それでこれから俺たちをビリするつもりだ？」

無重力の中を漂いながら訊ねるゲイルに、ジーライは笑みを向

ける。数万の怪物を倒してきた相手を前にしているにも関わらず、その笑みはとてつもない自信を含んでいた。

「まあ待ちたまえ。まずは新しく得た肉体のテストをしなければな」

そう言つてジークレイの体から、数本の肉の触手が飛び出した。触手は無重力の中を意思を持ったように自由自在に動き回ると、宇宙を漂つてゐる蜘蛛頭の死骸に巻きついた。

蜘蛛頭の死骸をすべて絡めた触手は、飛び出した時と同様滑らかな動きでジークレイの元に戻る。

「後片付けか？ 意外と行儀がいいな」

場にそぐわぬ暢気な事を言うゲイルだが、次の瞬間「うえつ」と奇妙な唸り声を上げた。

「こいつ……食つてやがる……」

ジークレイの元まで戻つた触手たちは、蜘蛛頭の死骸を絡めたまま肉の塊の中に戻つていった。そして肉塊の中に取り込まれた死骸たちは、ぐじゅりぐじゅりという音を立てて咀嚼され、見る見る溶けてなくなつていった。しかもジークレイの趣向なのか嫌がらせなのか、溶ける様子が透けて見えてるのが何とも気味悪い。

「もつたといないというわけではないが、あれも一応この惑星のエネルギーから創り出したものだからな。リサイクル再利用というやつだよ」

「ぐええ氣色わりい……食欲なくなりそうだ……」

食欲が失せる肉塊の食事風景に、さすがのゲイルも渋面する。

「そんな事を言つている場合じゃないでしょ」

「そうか、次は俺たちの番じゃねえか。畜生、あんな奴に食われるなんて冗談じゃねえぞ」

「何を言つたか。私の一部となつて永遠に生きられるのだ。それ以外にどのような幸福がある。大人しく我が体内に取り込まれよ」

再び触手が飛び出し、今度はゲイルたちに向かつて一直線に伸びる。襲いかかる触手は、無重力によつて身動きのとれない一人を簡単に捕らえるかに思えた。

だが

「フン、誰がお前なんかの餌になるかつてんだ」

「即お断りします」

触手が触れる寸前、二人は巧妙に体をずらす。そしてすれ違い様にゲイルは手刀を見舞い、サムは超振動ブレードで斬りつけた。切断された触手から血しぶきが飛び、無重力空間ではすぐに玉となって宙を漂つ。

「なに……？」

よもやかわされるとは思つていなかつたジークレイは、一人の洗練された動きに驚愕の声を上げる。

「アホかあつさん。？ 宇宙？ と名のつくところの特務捜査官の俺たちが、無重力に慣れてなくてどうすんだよ？」

手刀を打ち込んだ慣性で回転する体をコントロールしながらゲイルは笑う。サムも巨体とは思えぬ絶妙な重心の操作でバランスを保つていた。

「おのれ……ならこれでどうだ！」

今度はさつきの十倍以上の触手が一人に襲いかかる。篠つく雨のように降りかかる肉の槍は、さすがに避ける隙間などない。いかに無重力下の行動に慣れっていても、こればかりは避けようがないかに見えた。

だが触手が一人を捕らえる事はなかつた。何故なら、二人の姿はとつこの昔にそこになかつたからだ。だがふわふわと宙に浮いた状態でどうやって。

「ようやく本来の機動性が生かせますね」

サムはゲイルを抱えながら、触手からかなり離れた場所で浮いていた。背中の二基と両足の一基、計四基のバーニアから炎を噴き出しながら。

「な、何だそれは！」

「何だも何も、私の基本装備の一つですが、何か？」

「貴様、ただの補助用機械ではないのか？」

サボートメカ

「貴方がそう思い込むのは勝手ですが、あまり見ぐびつてもうつては困りますね」

「なら出し惜しみするなつてことだ」

相棒の声になるほど、とサムは頷くと、抱えていたゲイルを宙に放り投げた。

「ではお見せしましよう。私の本来の姿を」

「行くぜ、相棒！」

「了解。ゲイル、^{キーワード}言靈を」

「応よ」

空中でトングボを切り、ゲイルは高らかに声を上げる。

「我ら 無敵なり！」

ゲイルの発した言靈により、体内の内燃氣環が今までにないほど唸りを上げて稼動する。

「言靈承認。内燃氣環の臨界突破を確認。これより合体シーケンスに入ります」

サムの両目から眩いばかりの光が溢れ、体が前後から真つ二つに割れた。貝のように開いたサムの体内には、ちょうど人がぴったり納まるほどの空洞があつた。サムは四基のバー＝ニアを巧みに噴射し、大の字になつて宙を漂うゲイルに向かつて飛ぶ。

「座標修正。合体シークエンス終了まであと四秒。三、二、一、ゼロ」

カウントダウン終了と同時に、サムの中にゲイルが納まる。そして開いていたサムの体がぴたりと閉じると、全身から凄まじいエネルギーのオーラがほとばしる。

「合体終了。增幅装置と内燃氣環との接続、異常なし。増幅開始」^{ブースター}

「うおおおおおおおおお！ 来た来た来たきたああつ！」

サムに搭載された增幅装置と接続された事により、ゲイルの内燃氣環が限界値を遥かにぶつちぎった稼動を開始する。湧き上がるエネルギーの奔流は止まる事を知らず、これまでとは比べ物にならないエネルギー量は太陽すら焼き火に等しい。

「見たか。これが
これこそが俺たちの本気の力だ！」
文字通り一心同体となつたゲイルとサム。これからが二人の本領
發揮である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8222y/>

特務捜査官ゲイル&サム～俺たちは英雄じゃない

2011年12月31日17時46分発行